

令和6年度  
自己点検・自己評価報告書



吉備国際大学

## 評価委員

(敬称略)

所 属	職 名	氏 名
高梁市大学連携室	室 長	大森 恭二
高梁市教育委員会	教育長	小田 幸伸
高梁商工会議所	会 頭	藤岡 孝
岡山県立高梁高等学校	校 長	鳥越 信行
順正学園	監 事	讃岐 洋子

## 自己点検・自己評価報告

建学の理念・教育目標の具現化 . . . . .	1	理学療法学科 . . . . .	41
学生確保 . . . . .	2	作業療法学科 . . . . .	44
教育の充実（教育改善・向上）. . . . .	4	心理学部 心理学科 . . . . .	47
教育の充実（学生支援の充実）. . . . .	7	農学部 . . . . .	50
教育の充実（キャリア支援の強化）. . . . .	9	地域創成農学科 . . . . .	53
教育の充実（図書館の活用）. . . . .	11	醸造学科 . . . . .	56
教育の充実（学修環境の整備）. . . . .	12	海洋水産生物学科 . . . . .	58
研究推進 . . . . .	13	外国語学部 外国学科 . . . . .	61
大学運営（持続可能性の追求） . . . . .	15	アニメーション文化学部 アニメーション文化学科 . . . . .	66
大学運営（職能開発の強化） . . . . .	16	人間科学部 人間科学科 . . . . .	69
大学運営（人権・安全への配慮の充実）. . . . .	18	通信教育部心理学部 子ども発達教育学科 . . . . .	73
大学運営（法人部門との連携の円滑化）. . . . .	18	社会学研究科 . . . . .	75
大学運営（財政基盤の確立）. . . . .	19	保健科学研究科 . . . . .	78
大学運営（適正な会計処理の実施） . . . . .	19	（通信制）保健科学研究科 . . . . .	81
内部質保証 . . . . .	20	心理学研究科 . . . . .	83
地域連携・地域貢献の推進 . . . . .	22	（通信制）心理学研究科 . . . . .	85
国際化の推進 . . . . .	24	地域創成農学研究科 . . . . .	87
社会科学部 . . . . .	27	（通信制）連合国際協力研究科 . . . . .	89
経営社会学科 . . . . .	31	留学生別科 . . . . .	91
スポーツ社会学科 . . . . .	34	外部評価 . . . . .	95
看護学部 看護学科 . . . . .	38		



# I. 建学の理念・教育目標の具現化について

## 1. 大学の使命・目的及び教育目標の周知徹底

吉備国際大学は、開学以来「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会に有為な人材を養成する」という建学の理念のもと、地域密着型総合大学として、地域に根差した人材の育成に取り組んできた。また、国際化時代を予見し、開学当初から留学生を積極的に受け入れるとともに海外の大学と教育交流協定を締結し、教育・文化交流を図ることにより、学生に国際性を備えた豊かな人間性を身につけさせることに努めてきた。本学の教育の特色と強みはこれからも「地域連携・地域貢献」と「国際化」にある。

開学30周年を迎えた2020年に、建学の理念をより具体的実現するべく、吉備国際大学ブランドビジョン「実践的な知識を自ら学ぶ力、多様化する社会で生きぬく力、自分の可能性を信じる力を引き伸ばします。」を新たに策定した。このブランドビジョンにより、本学が育成する能力を具体的な三つの力で表し、各学科においてそれぞれをディプロマ・ポリシーに明確に定めて教育を行っている。本学はこのブランドビジョンを教育目標と定めて全教職員が共有し、それを具現化する質の高い教育を展開して、学生の三つの力を引き伸ばす。

### 〈今年度の取り組み状況〉

令和5（2023）年度から始まった第三期中期目標・中期計画の2年目となった。

#### 【教職員に対する周知】

1. ガルーントップページのバナー、ネームホルダー、名刺など至る所にブランドビジョンを表示して全教職員で教育目標を共有した。
2. 令和6年4月13日に自己点検・自己評価会議を実施して前年度の自己点検・自己評価を行い、その結果を受けて今年度の目標・計画の作成を行った。

#### 【ステークホルダーに対する周知】

1. 学外に対しては、学生便覧や大学案内、ホームページ等のメディアの内容を充実させて周知した。
2. オープンキャンパスや保護者会、入学前説明会、入学宣誓式、学位記授与式等の機会において説明を実施した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

令和4年度認証評価を受けて、令和5（2023）年度を1年目とする第三期中期目標・中期計画ではブランドビジョン「実践的な力を自ら学ぶ力、多様化する社会で生きぬく力、自分の可能性を信じる力を引き伸ばします。」を教育目標と定めて5年間の計画を策定した。教育目標を達成するための本学の教育の特色は「地域連携・地域貢献」と「国際化」にある。

「地域連携・地域貢献」では令和7年2月22日に地域連携・地域貢献活動報告会を開催し、本学の地域連携・地域貢献活動を学外へ広くアピールした。

「国際化」については第30回吉備国際大学高校生英語スピーチコンテスト、第16回吉備国際大学日本語スピーチコンテストを開催したほか、留学生と高梁市立有漢中学校の国際交流会を開催して学外にアピールした。

### 〈次年度への課題〉

建学の理念に基づくブランドビジョンを教育目標と定めて全教職員が共有し、それを具現化する質の高い教育を展開して、学生の三つの力を引き伸ばす。

教職員に対する周知としては、ガルーントップページのバナー、ネームホルダー、名刺など至る所にブランドビジョンを表示して全教職員で教育目標を共有する。また、教育目標に基づき4月に自己点検・自己評価会議を実施して令和6（2024）年度の自己点検・自己評価を行うとともに、令和7（2025）年度の目標・計画の作成を行う。

ステークホルダーに対する周知としては、学外に対して学生便覧や大学案内、ホームページ等のメディアの内容を充実させて周知する。またオープンキャンパスや保護者会、入学前説明会、入学宣誓式、学位記授与式等の機会において説明を実施する。

## Ⅱ. 学生確保について

### 1. ブランディングの強化

#### 〈今年度の取り組み状況〉

学長を委員長とした「ブランディング実行委員会」を設置して、委員は各学科及び各部署の若手・中堅層を中心とし、職位を問わず優れた意見を改革に反映できる体制でブランディングを推進する。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

1. ブランドビジョン＝教育目標であり、それを具現化する本学の教育の特色が「地域連携・地域貢献」と「国際化」にあることを、あらゆる機会を通じて周知する。  
学内外のイベントでの挨拶やインタビュー等の機会に折に触れ、学長をはじめ各担当者が本学のブランドビジョン（教育目標）と、その目標を達成するための2つの柱が「地域連携・地域貢献」と「国際化」であることを発信している。
2. インスタグラムなどのSNSを通して各学科の魅力を発信する。  
各学科の学生スタッフが、SNSに所属学科の様子がよくわかる写真や動画を掲載し、魅力を発信している。また全学的な行事等についても都度SNSに掲載し大学の特色を発信している。
3. ホームページは常に最新の内容に更新して、特に本学の教育の特徴である「地域連携・地域貢献」と「国際化」について積極的に発信する。  
地域と連携した行事や研究の状況、国際交流の行事や留学の状況については、都度ホームページに掲載し広く発信している。

#### 〈次年度への課題〉

学長を委員長とした「ブランディング実行委員会」を継続して、三つの活動を強化する。委員は各学科及び各部署の若手・中堅層を中心とし、職位を問わず優れた意見を改革に反映できる体制でブランディングを推進する。また、学生参画を推進するために、ブランディング実行委員会に学生の参加を求めていく。

### 2. 入学者受入れ方針（AP）の明確化

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- (1) 2025年度より、現役受験の高校3年生は、新学習指導要領に対応した選抜となる為、一般選抜試験を各科目において適切な出題範囲を設定し、現役受験生、既卒受験生の間で不利にならないよう実施する。
- (2) 専願入試（A0総合選抜・指定校・特別推薦）入試において、各学科のアドミッションポリシーの質問を追加し、アドミッションポリシーの周知度を確認する。
- (3) 一般選抜前期A方式（A-II）について、引き続き科目試験に加え小論文による選抜を行い、学力の3要素を多面的・総合的に評価する。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- (1) 本学独自の入試問題である推薦総合選抜・一般選抜の科目試験について、現役・既卒に不利にならないように実施できた。令和の7年度入試から「情報」が科目として大学入学共通テストに導入された。本学では選択科目として大学入学共通テスト利用入試で活用した。
- (2) A0総合選抜、指定校、特別推薦の専願入試について、各学科・専攻のアドミッションポリシーの理解度を面接時に確認した。
- (3) 2025年度入試も一般選抜A-II方式を実施し、7名の志願があった。

#### 〈次年度への課題〉

- (1) 次年度も一般選抜入試は科目試験による適正な出題範囲で学力検査を実施していく。
- (2) 各学科・専攻のアドミッションポリシーの面接による確認について、個人面接時と集団面接時に運用方法を検討していく。

(3) 2025年度の一般選抜前期A-II方式について、志願者は3名減少したが引き続き科目試験、小論文、調査書の評価を取り入れた入試を実施していく。

### 3. 収容定員の充足

#### 【収容定員充足に向けた募集活動】

##### 〈今年度の取り組み状況〉

- (1) ブランドビジョンを柱に各学部・学科・専攻の情報発信を行い、入学定員充足を目指す。
- (2) オープンキャンパス参加者を増やして、専願入試（AO総合選抜、指定校、特別推薦）の入学者を昨年以上に確保するために高校訪問、進学ガイダンスや出張講義、独自の学校見学会などを行い、4月～8月までの広報活動を強化する。
- (3) Web広告やダイレクトメール等を積極的に活用し、受験生等をホームページ等へ誘導してオープンキャンパスへの参加、受験に結びつける。  
本学のホームページやInstagramでの情報発信を充実させていく。
- (4) 「高梁市・順正学園特別奨学金制度」「南あわじ市入学奨励金制度」、岡山キャンパス外国語学部の学生を対象に創設した「伊藤奨学金等の給付型奨学金制度」の周知浸透を進める。

##### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- (1) ホームページにより、学部・学科・専攻の情報発信を積極的に行った。また、奨学金制度などの新着情報も発信した。
- (2) 高校生対象の高校内ガイダンスの会場型ガイダンスに積極的に参加したことにより、昨年度より接触者数も増えて、オープンキャンパス参加者数も増加した。（カッコ内は昨年度）高校内ガイダンス【入試広報室】90校（65校）、高校内ガイダンス・出張講義【教員】99校（79校）、会場型ガイダンス【入試広報室】36会場（30会場）接触者数（参加者数）2,570名（1,981名）  
オープンキャンパスを全7回実施し、参加者数（カッコ内は昨年度）は、受験生・高校生1,134名（1,068名）と増加した。

##### 〈次年度への課題〉

- (1) 2026年度募集に向けて、昨年度と同様にホームページの内容を充実させ、各学部・学科・専攻の新着情報を発信していく。
- (2) 2026年度入試学生確保は、オープンキャンパスの参加者数を増やして、年内入試で入学者確保するために、引き続き高校訪問、進学ガイダンスや出張講義などを行い、更なる広報強化を行う。
- (3) Web広告やダイレクトメール等を活用し、オープンキャンパスへの参加、受験に結びつける。
- (4) 引き続き、ホームページやInstagramを利用して最新の情報発信を行い、入学者確保に繋げていく。

#### 【改組等による適切な学科編成】

##### 〈今年度の取り組み状況〉

人間科学部人間科学科（心理学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻）は「人間科学の基礎と応用を教授し、地域社会的な側面への深い理解のもと、人間科学を基盤に心理、教育、理学療法、作業療法の専門性を発揮し、その地域社会で暮らす人間が抱える課題を解決できる高度な人材の養成」を目的として心理学部心理学科、保健医療福祉学部理学療学科及び作業療学科を改組して令和6年度に開設した。これにより、これまで各学科で行っていた専門教育・研究を学際的なアプローチから総合的に学ぶ事で、各々の専門分野に加え社会のニーズに広く対応できる人材養成を目指せる事を周知し学科定員の充足を図る。

前述の改組に伴い、保健医療福祉学部看護学科は1学科のみの構成となるため令和6年度より看護学部看護学科へ名称変更を行った。「看護」を前面に出すことで特に看護師養成を行う学科である事を周知し定員充足に努める。

また、令和7年度からはアニメーション文化学部アニメーション文化学科をアニメーション学部アニメーション学科に名称変更する。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

開設1年目の人間科学部人間科学科は心理学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻で昨年同時期より手続完了者が増えている。また、今年度より名称変更した看護学部看護学科も昨年同時期より手続完了者が増えている。今後の入試等で増減はあるが、人間科学部人間科学科では各専攻共通で学修する専門教育の社会におけるニーズの高まりや国家試験合格率の高さが受験生に認知されてきていると考えられる。また、看護学部看護学科について、平成7年度の開設以来教育研究活動をおこなっているが学部名に「看護」を冠することで、これまで以上に社会に認知されてきていると考えられる。

### 〈次年度への課題〉

農学部地域創成農学科及び海洋水産生物学科の志願状況を踏まえ、令和8年度より新たに「アクアグリーンフィールド学科」を入学定員40名、収容定員160名で開設する計画である。また、新学科開設に併せて既設学科の入学定員の見直しを行い、定員充足の適正化を図る。

## Ⅲ. 教育の充実について

### 1. 教育改善・向上

#### ブランドビジョン実現のための教育課程の見直しと充実

##### 〈今年度の取り組み状況〉

(1) 本学の教育の特色である「地域連携・地域貢献」と「国際化」を軸とした全学的教育プログラムの策定

全学教養教育科目を中心に検討を進めており、特に「地域連携・地域貢献」については、高梁市や南あわじ市との連携を深め、課題解決型の授業(PBL)を取り入れ、「人間力育成」や「自己効力感の向上」を図ることができる内容を検討した。また、「国際化」については、ネイティブ・スピーカーによる英語学修を中心に、中国語と中国文化、フランス語とフランス文化、ドイツ語とドイツ文化等の授業を開講するとともに、日本人学生と留学生が協働して取り組む課題解決型演習授業(PBL)等を導入して国際化に資する教育を実施した。

(2) 情報教育の推進と語学教育の充実

情報教育については、2022年度入学生より導入したBYOD(パソコン必携化)を推進し、大学生に求められるリテラシーレベルのデータ活用能力を身につけることを目標に、教養選択科目として「数理・データサイエンス・AI基礎」と「数理・データサイエンス・AI応用」の2科目を導入したが、2024年5月に文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」に申請し、認定を受けることができた。また、語学教育については、英語力向上を目指して同じく教養選択科目に導入したネイティブ・スピーカーによる「アクティブ英語Ⅱ」や「レベルアップ英語Ⅰ・Ⅱ」等の教育内容の充実と履修者増に取り組んだ。

(3) 通信制大学院の取り組みとしては、連合国際協力研究科が東京スクーリング会場に代えて、令和7年度より岡山県内でハイブリッド方式によるスクーリングを実施する運びとなった。

##### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

全学教養科目や専門教育科目を中心に、学生の課題解決力、行動力、ICT活用力・語学力・コミュニケーション力・プレゼンテーション力等の育成を図る取り組みが行われている。特にICT活用については、文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」に計画通り申請し、認定を受けることができた。全学教養科目については、必修科目以外の選択科目の履修率を向上させるために、各学期初めのオリエンテーション時に大学生として身につけるべき能力や育成科目受講の必要性等についての口頭説明やチラシ配布による受講の奨励により、数理データ活用科目では、大学全体では「数理・データサイエンス・AI基礎・応用」の履修者が135名(前年比126%)、「アクティブ英語Ⅱ・レベルアップ英語Ⅰ、Ⅱ」の履修者が95名(前年比130%)であり、関心を持って受講する学生が増加傾向にあることは評価できる。

## 〈次年度への課題〉

「地域連携・地域貢献」と「国際化」を軸とした全学的教育プログラムの策定を全学教養教育科目を中心に検討をさらに進めていく必要がある。また、「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」の認定を受けた数理データ活用科目や英語コミュニケーション力の育成を目指す関連科目の受講率の向上に取り組む必要がある。

大学院(通学制・通信制)においては、社会人の受け入れを増やすことが課題である。

## 学修支援の強化

### 〈今年度の取り組み状況〉

#### (1) 学修時間の延伸に向けた取り組み

春学期末に実施した「学生の学修及び生活に関するアンケート」によれば、1週間の授業以外の学修時間は、「ほとんどしない」が25.9%(全国17.3%)、「1～5時間」が51.3%(全国45.2%)で、学修時間が全国平均を大きく下回っていることが分かった。

この結果を受け、各学科の事情に合わせて学修習慣を身につけるための方策が検討され実施された。取り組みとしては、毎回の授業の予習(事前学修)と授業後の復習(事後学修)の徹底と確認テストの実施、毎回授業のレポートやリアクションペーパーの取り組み、授業の空きコマを利用した自主学修の促進強化等の取り組みが実施された。

#### (2) 国家試験対策の取り組み

令和5年度の自己点検・自己評価結果を受け、国家資格の取得を目的としている保健医療福祉学部看護学科、理学療法学科、作業療法学科について、3学科での情報共有や協働体制のもと、1年次から4年次までの体系的な対策に基づき学生指導が行われた。

#### (3) 外国人留学生の学修支援

外国人留学生を対象とした「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」が10月に文部科学省の「留学生就職促進教育プログラム認定制度」に認定された。この認定制度は、外国人留学生に対する敬語やビジネスマナーを含む「日本語教育」、「キャリア教育」、「インターンシップ」を一体として提供する質の高い教育プログラムを文部科学省が認定し外国人留学生の国内企業等への就職を一層促進するもので、プログラムを修了した学生には修了証明書が発行され就職活動に活用することができる。当プログラムについては、大学HPやオリエンテーションなどを通じて学内外に情報発信し、留学生の日本国内への就職活動支援や留学生募集に役立てるようにした。また日本語能力が十分でない留学生のための補習授業として、ラーニングサポートセンターが実施する日本語能力試験対策講座を、週2コマ開講するなど、トップアップとボトムアップの両面から支援し、留学生全体のレベルアップを図った。

#### (4) 退学者対策の実施

精神的に問題を抱える学生の状況を早期に把握し、支援策を講じることを目的に、例年通り新生面談ウィークとして、オリエンテーション時に実施した心理テストの結果なども活用して、入学時に個人面談を全学で実施した。また、2週連続授業欠席データを活用しての早期対応も継続して実施しているが、毎月末には、各学科の欠席者の状況を取りまとめ、学長、副学長、学部長及び担当部局に報告し、情報共有を図る取組みを新たに実施している。また、増加傾向にある留学生の退学・除籍について、留学生別科、学部の各入学試験において個人面接を実施し、大学入学の目的や意思確認を必ず実施することとした。さらに、留学生別科の学生と各学科との交流イベントの実施やキャンパス行事への参加など、留学生別科の学生の大学入学への意欲を醸成する取組みを積極的に行った。

また、学力不足による学修意欲の低下を防ぐため、入学前教育及び入学後の基礎学力向上のツールとして導入しているkiuiドリルについて、学生の実施状況データからその妥当性について各学科で検討した結果、2025年度入学生の入学前教育として実施することになった。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

(1) 学修時間延伸の方策については、各学科の取り組みにより計画的に進められている。

(2) 国家試験の結果(合格率)

看護師：	100%(全国平均95.9%)	保健師：	89.5%(全国平均96.4%)
理学療法士：	100%(全国平均95.2%)	作業療法士：	100%(全国平均92.5%)
公認心理師：	100%(全国平均66.9%)		

理学療法士・作業療法士は、前年に引き続き合格率100%、また看護師、公認心理師合格率も100%を達成しており、国家試験対策の全面的な見直しによる効果が見られた。なお、保健師の合格率は昨年(100%)を下回った。

(3) 外国人留学生を対象とした文部科学省「留学生就職促進教育プログラム認定制度」については、本年度4名の受講者があったが、日本国内での就職を希望する優秀な留学生の就職支援として活用が期待される。

(4) 退学者数・除籍者数等（通学制学部・大学院の合計）】※R6年度は4月8日時点（受理分）、また、令和5年度は同時期の数値

	退学者数	除籍者数	合計	退学率	除籍率	退学・除籍率
令和5年度	48	13	61	3.2%	0.9%	4.1%
令和6年度	31	18	49	2.3%	1.3%	3.6%

留学生の退学・除籍者が前年より12名減となり、対策による一定の効果をえた。しかし、入学時より問題を抱えた学生が増加してきており、1年次の早い段階で授業を欠席したり、休学や退学となるケースや、学習意欲の喪失により4年次になって退学する者が微増している。□

### 〈次年度への課題〉

外国人留学生の学修支援として新たに構築し、文部科学省に認定された「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」については、受講者が少ない状況であり、今後留学生に周知し受講者を増やす必要がある。

退学者対策については、入学段階及び入学後の対人・学修などに関する不安など、各段階で精神的に問題を抱える学生への有効な支援方法を検討する必要がある。

## 学修成果の可視化の推進と教育改善

### 〈今年度の取り組み状況〉

(1) アセスメントプランに基づく三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価と改善

アセスメントプランに基づく令和6年度アセスメント実施計画を策定し、計画どおり実施した。これまでに、入学時アンケート、卒業時アンケート、卒業生及び就職先アンケート、学生の学修及び生活に関するアンケート、学生による授業評価アンケートの各種アンケートの実施及び検証結果報告、また各種資格取得率、修業年限内卒業率、退学理由分析、成績分布等の各種IRデータの集計報告、ジェネリックスキル測定テスト（PROGテスト）を実施し、客観的評価による学修成果の可視化を図った。

(2) ジェネリックスキル測定テスト（PROGテスト）の実施

学生のジェネリックスキルを客観的に測定することができる「PROGテスト」を1年生及び4年生を対象に新たに実施した。学生へのフィードバックは、1年生は「キャリアデザインⅠ」の授業内で個人結果を返却して解説会を実施し、4年生はゼミ単位でフィードバックした。また大学全体の集計結果については、内部質保証委員会に報告し、本学学生の強み・弱みなど分析結果を共有した。

(3) 学修ポートフォリオとルーブリック評価の実施

令和4年度の1年生から実施している学修ポートフォリオは、今年度は3年生までを対象に実施した。また、演習及び卒業論文（研究）科目で導入したルーブリック評価については、評価項目等について見直しを実施した。

(4) 教育改善の取り組みへの学生の参画

卒業する学生にカリキュラムについて意見を聴取して改善に取り組む「カリキュラム・コンサルタント」については、理事長と学生代表との懇談会において、授業カリキュラムの他学部他学科履修の充実や語学教育の充実、ワークショップ型課題演習授業やIT関連科目の充実等の要望があった。これらの要望については現行のカリキュラム履修制度で対応できるものについては周知を図るとともに、今後改善を要するものについては関係委員会や部門において検討を行うこととした。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

アセスメントプランは、毎年、実施時期や点検内容、アンケート実施方法等について見直しを行った上で、計画通り実施できていることは評価できる。特に、「PROGテスト」については、これまで学生アンケート等の自己評価が中心であった学生の能力に関する評価について、客観的なテストにより測れるようになったことで、学修成果の可視化としてより正確に検証できるようになった。

### 〈次年度への課題〉

前年度と同様に「PROGテスト」のデータを活用し、DPの達成度、各種アンケート結果との相関性など、データの分析と検証を行い、教育改善の基礎データとする。将来的には1年次と4年次のテスト結果を時系列的に比較し、能力の伸長を確認して学修成果の可視化を進める。また学生へのフィードバックを丁寧に行い、学生が自らの能力を確認し、大学生活や将来の目標設定、就職活動に役立てられるようにする。

学修ポートフォリオについては、継続して実施し、就職活動に結びつけられるようキャリア教育との連携を検討する。

## 2. 学生支援の充実

### 学生の意見・要望への対応の強化

#### 〈今年度の取り組み状況〉

理事長・学長と各キャンパスの学友会執行委員との意見交換会を令和7年2月に開催し、施設運用、カリキュラム、授業に関する意見・要望の聴取を行うと共に交通安全啓発活動や学修態度改善等について本学側から学生代表へ協力の要請を行った。さらに、各クラブの代表、学友会執行委員、伊賀祭実行委員、南あわじ志知C代表、岡山C代表と学生部との会議を実施し学生部より施設使用並びに提出書類についての説明を行ったうえで学生からの要望を聴き、質疑応答を行った。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

理事長・学長と各キャンパスの学友会執行委員との意見交換会については、例年、施設・設備の充実についての要望が過半を占めていたが、今年度は、授業資料の事前配布、他学科履修、授業内容の改善などカリキュラム全般についての意見・要望の聴取が出来たと考える。また、学生が運営する諸団体と学生部との会議では、質疑応答を通じて学生からの要望を聴取できたと言える。

#### 〈次年度への課題〉

今年度の意見交換会において、学生からカリキュラムや施設の運営など例年と違った意見要望が提出された。年数を掛けて対応していかなければならない意見・要望もあることから各部署で学生とのコミュニケーションを密にし改善・修正した点を相互に確認しながら継続性を持って対応していくことが必要である。

### 学生の相談体制の見直しと充実

#### 〈今年度の取り組み状況〉

窓口対応の円滑化を図る目的でユニバーサルパスポートの学生プロフィール機能を利用し学生指導の内容、学生からの意見等の情報を部内で共有することを開始した。さらに、留学生が円滑に学生生活を送っていくための知識について、新入生オリエンテーションにおいて説明を強化すると共にユニバーサルパスポートを使用し留学生の詐欺被害に関する情報告知をおこなった。また、学生部とキャリアサポートセンターが同フロアになることで入学から卒業するまで一貫した支援体制が整えられた。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

ユニバーサルパスポートのプロファイリング機能活用は、学生部の中で情報を共有する事で窓口での学生支援の円滑化を図ることが出来る。また、近年、増加傾向にあるSNS、国際電話による留学生の詐欺被害に関する啓発については、インターネットの翻訳機能を使用し留学生の母国語で分かり易く告知するなど工夫を行い取り組んでおり、今後も継続して行きたいと考える。

### 〈次年度への課題〉

学生の相談・支援については、事案ごとに学生部と教員が情報を共有することが最善であるが、ユニバーサルパスポートのプロファイル機能は、情報を共有する教職員の範囲が自由に設定出来ない。この点を運用面を含めて改善していく必要がある。さらに、留学生だけではなく日本人学生についても少数ではあるが、SNSを使用した海外からの詐欺被害に関する相談があったことから、学生部からだけではなく学友会と各クラブを通じた啓発活動に取り組む必要がある。

## 課外活動の活性化（クラブ活動）

### 〈今年度の取り組み状況〉

学友会並びに伊賀祭実行委員が学生課を介し協力体制をとることで伊賀祭の運営が円滑となり無事に開催することが出来た。今年度は、学友会から来年度発足する女子硬式野球部への先行支援を行うと共に硬式野球部の全国大会出場の経費についての支援を行った。また、コロナ禍により休部・廃部となっていたクラブが復活し活動を再開している。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

学友会と伊賀祭実行委員との連携は、人員が不足している両団体が相互に補完しあう事で行事が活性化することにつながる。また、女子硬式野球部並びに各クラブへの支援については、今後の学生募集への一助になると考える。今後も各クラブへの手厚い支援を継続していく。また、来年度以降は、文科系クラブへの支援方策の検討を行う。

### 〈次年度への課題〉

伊賀祭実行委員の過半数が、看護学科、理学療法学科の学生であることから、2年生が実行委員長を務めることが、コロナ禍以降常態化している。経験不足から伊賀祭の運営に支障をきたす事があることから各学科から実行委員を募ることが課題となっている。また、学友会についても心理学科の学生が大半を占めており、学友会行事の準備時に時間的融通が利かないなどの不都合が生じている。

## 課外活動の活性化（地域社会との連携）

### 〈今年度の取り組み状況〉

今年度は、7月に開催された高梁土曜夜市に岡山キャンパスのスパイス研究会、高梁キャンパス学友会、南あわじ志知キャンパス有志学生が合同で参加した。また、10月に開催された高梁市内の祭に男女のサッカー部、学友会が参加した。南あわじ志知キャンパスについては、海洋水産生物学科の教員並と学生が昨年に引き続き海岸のクリーンアップ行事に参加すると共に地元漁協並びに各種団体と共催で一か月限定の水族館イベントの運営（まるやま水族館）に携わった。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

地域社会と課外活動の連携について年々活性化していると言える。高梁キャンパスにおいては、市の補助金に軽音楽部が申請し市内で音楽イベントを開催、南あわじ志知キャンパスにおいても学生が地域社会との共催という形で期間限定の水族館の運営に携わるなど行事への参加に止まらない成果を挙げている。

### 〈次年度への課題〉

高梁キャンパスにおいては、昨年度より近隣の総社市で開催されるそうじゃ吉備路マラソンへ学生がボランティアで参加するなど地域社会との連携が活発化している状況であるが、キャンパスによっては学生が参加できる行事に多寡があり、経験機会が得られない学生もいると考えられることから、キャンパス間の交流事業を拡大するなどで在学生の参加機会を増やしていきたい。

## キャンパス間交流の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

今年度についても高梁市栄町商店街において開催されたカレーフェスタに3キャンパスの学生が合同で出店を行い、伊賀祭についても、南あわじ志知キャンパス並びに岡山キャンパスの在学生在が参加して出店を行った。くにうみ祭についても、高梁キャンパス並びに岡山キャンパスの学生が参加・出店した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

キャンパス間交流については、年々参加学生が増加し、伊賀祭並びにくにうみ祭において3キャンパスの軽音部が相互に演奏するなどクラブ単位での交流が活発化してきた。この点からも成果が挙げられていると言える。今後もこの事業を継続し、学生の仲間意識を育て最終的に本学への帰属意識を涵養する取組にしていく。

### 〈次年度への課題〉

今年度、南あわじ志知キャンパスで開催されたさなぶり祭で高梁キャンパスの学生が負傷（肩脱臼）した。また、高梁市栄町商店街のカレーフェスタでは、7月の猛暑の時期に開催されるため、今後、学生の体調管理に配慮する必要がある。

## 3. キャリア支援の強化

### キャリア教育の充実

#### 〈今年度の取り組み状況〉

学生の主体的・積極的なキャリア形成を支援していくため、1年次から3年次までのキャリア教育科目において以下の方策を重点的に実施してきた。

- (1) キャリアとは何か、大学で何を習得していくのかを自分で考え実行できるよう情報提供や実践的なキャリア教育を行う。
- (2) 社会的及び職業的自立に必要な能力である基礎的・汎用的能力（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、キャリア・デザイン能力）を高める演習やグループワークを行う。
- (3) 就職活動に必要な情報の収集、各種書類の作成、試験や面接に関する知識やスキルを教授し、主体的に進路を決定する力を養う。
- (4) 1年次の「キャリアデザインⅠ」では留学生クラスを設け、日本での生活や制度に関する情報、対人関係や就労に必要な知識とスキルを教授する。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- (1) 1年次の「キャリアデザインⅠ」では、初回から「キャリアとは何か」を教授し、自分の将来の生き方をイメージさせ、大学4年間の目標やそれを実現するための生活を考えることができるよう講義や演習を提供し、また、学科別時間には、多くの学科で自己理解やコミュニケーションに関する演習（グループワーク）を導入した。
- (2) 1年次の「キャリアデザインⅠ」の中で、自己理解を深める演習を繰り返した。また、外部講師として卒業生やボランティアセンター職員を招聘し、社会と繋がっていく自分をイメージしながら実際にキャリア実践に繋がる活動していくこと勧めた。さらに2年次の「キャリアデザインⅡ」においても、自分の社会人基礎力や就職基礎力を自覚できるよう、自己理解の演習やグループワークを実施した。
- (3) 就職活動に必要な情報収集をするため、3年次の「キャリア実践Ⅰ」の初回到情報サイト会社2社による説明会を実施し、情報サイト会社6社の登録を行った。また、県内企業による職業教育、岡山県労働局による労働基準に関する基礎教育を実施した。各種書類の作成や面接については、授業以外の時間においてもキャリアサポートセンターのスタッフが履歴書、エントリーシート添削及び面接練習等を実施した。
- (4) 行政書士を招聘し、地域での生活や日本での生活マナー、日本の法律を踏まえた働き方やルールについて教授した。日本人学生と同様に社会と繋がっていく機会や方法を学ぶため、ボランティアセンター職員を招聘し、留学生が参加できる活動内容や、自身が日本で災害に遭遇した時の危機管理等を教授する時間を設けた。

### 〈次年度への課題〉

- (1) 本年度の講義内容を継続しながら、さらに自分のキャリアについて具体的なイメージがもてるよう支援していく。
- (2) 1年次のキャリアデザインⅠでは、社会人基礎力を高めていくため、人間関係の構築に必要なスキルやコミュニケーションに関する演習を行っていく。2年次のキャリアデザインⅡでは、キャリアビジョンを明確にし、将来自分が目指していく目標を立て、振り返りを実施していく。
- (3) 就職活動に必要な情報収集をするための情報サイト会社6社の登録に時間を要するため、次年度は各学科教員指導の下、第2回授業までに登録を終えるようにする。また、県内企業による職業教育、岡山県労働局に労働基準に関する基礎教育は継続し、各種書類の作成や面接に関する支援も、引き続きキャリアサポートセンターのスタッフが随時実施していく。
- (4) 入学直後の留学生にとっては法律に関する説明が難しかったため、留学生をサポートしている就職関連会社のスタッフを外部講師として招聘し、日本での生活やマナー、日本の法律を踏まえた働き方やルールについて紹介していただく。その後、具体的な法律等について行政書士からの講義を受けることとする。

## キャリア支援における連携体制の構築

### 〈今年度の取り組み状況〉

学生及び採用企業のニーズや社会情勢の把握に努め、「就職率 100%」並びに「就職・進学率 90%以上」を目指し、以下の対策を重点的に実施してきた。

- (1) キャリアサポート委員をはじめとする各学科教員と連携して、就職関連イベントやオープンカンパニー、学内就職説明会やガイダンス等の周知を徹底し、学生の参加増に取り組む。
- (2) 動画やオンラインによる面接、グループディスカッションの対策を強化する。
- (3) 「キャリア実践Ⅰ・Ⅱ」の授業も活用し、3年次生の就職活動や書類作成を実践的に支援する。
- (4) 日本での就職を希望する留学生に対しては、「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」に基づく積極的なキャリア教育や情報提供、就職ガイダンスを行うとともに、個別面談対応を強化していく。
- (5) 学生の能力や個性を卒業後のキャリアに活かすため、学生部と連携し、就職に関する情報の共有を行っていく。

各キャンパスにおいて実施した主なガイダンス及びイベント（本年度中の予定を含む）、参加人数は以下のとおりである。

5月25日	SuperBusinessForum（グランフロント大阪）	7名（志知C）
6月2日	インターンシップ&キャリア発見EXPO（インテックス大阪）	12名（志知C）
10月25日	就活体験談2024「就活のリアル」	登壇4名、参加20名（高梁C）
11月7日	学内インターンシップ等説明会&業界研究会（参加企業10社）	29名（高梁C）
1月24日	今日から書けるエントリーシート作成会	15名（高梁C）
2月7日	市内（高梁市）企業見学バスツアー	5名（高梁C）
2月10日	就職ガイダンス（看護学科対象）	35名（高梁C）
3月1日	就職EXPO（インテックス大阪）	15名
3月3・4日	岡山県合同企業説明会（3日ジップアリーナ、4日WEB）	20名
3月10日	アジア地域出身留学生のための企業説明会	9名
通年	学内単独説明会	

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

学内での単独企業説明会は、4月から2月中旬までで106事業所より申し込みがあり、昨年度とほぼ同じ件数であった。この企画を継続してきたことにより、企業研究、業界研究に繋げることができた。

2025年2月19日現在、2024年度の就職率は81.3%、昨年同時期76.9%であり、昨年同時期に比べ順調に伸びている。以下の取組が効を奏していると考えられる。

- (1) 企業や病院から届いたオープンカンパニー及びインターンシップの情報をユニバーサルサポートにて学生へ周知した。講義や就職ガイダンスにおいても、情報サイト会社担当者が申し込み方法等を説明する機会を設けて早期に就職活動準備を促した。

(2) キャリアサポートセンターが導入している求人検索NAVIの面談予約から申し込みのあった学生に対して、進路相談をはじめ面接練習、履歴書添削等をオンラインも活用して実施し、予約以外の学生にも臨機応変に対応し、昼休み時間も対応した。

(3) キャリア実践Ⅰ・Ⅱでは、就職に関する知識・情報提供とともに、実際の就職活動において必要な実践的スキルを指導した。卒業生アンケート結果の「学生時代に強化しておけばよかったこと」を参考に、担当外部講師と打ち合わせを重ね、内容を考えて実施した。

(4) 「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」がスタートし、教務課、経営社会学科担当教員と連携して進めている。本年度初めて留学生を採用予定の企業との意見交換会を実施し、企業が考える留学生採用の基準や、就職後の現状と課題について情報交換を行った。

また、本年度からキャリアサポートセンターに外国人スタッフが配置され、留学生に対して就職に関する個別相談や添削指導、就労に関する情報提供等を行っている。留学生が相談しやすい状況になっている。

(5) キャリアサポートセンターが実施しているイベントやセミナー等について、学生課や留学生課へ情報提供を行った。また、これまでキャリアサポートセンターの場所が学生にとってわかりにくい場所であったが、教務部と同じ1階に移り、わかりやすくなった。学生課・留学生課と同じ部屋になったことで、学生への対応や情報共有等の連携を強化することができた。

#### 〈次年度への課題〉

(1) インターンシップやオープンカンパニーへの参加を強化していく。キャリア教育関連の講義だけではなくユニバーサルパスポートや求人NAVIからの周知を行う。

(2) 学内で実施される単独説明会等の案内をユニバーサルパスポートを活用して学生へ案内すると共に、関連のある就職イベントに関して各学科教員にも協力をいただき学生への周知を図る。

(3) 就職支援、進学等の支援について現段階の予約時間（対応時間）を見直し、より多くの学生対応ができるよう取り組んでいく。

(4) 留学生を採用できる企業の開拓及び学内での企業単独説明会を実施する。留学生対象の就職ガイダンスも実施していく。

## 4. 図書館の活用

### 図書館環境の充実

#### 〈今年度の取り組み状況〉

2024年度の蔵書冊数は247,292冊（内洋書38,545冊）、年間受け入れ図書は1,457冊であった。学術雑誌については、所蔵雑誌種数843種（内外国雑誌396種）、年間受け入れ雑誌80種（内外国雑誌3種）である。購入図書の選定にあたっては、教員や学生からの推薦・希望を受け付けることとし、教育研究に資する図書の充実などに努めている。また、図書の除籍や雑誌の継続・廃棄などに関しては、図書館運営・研究紀要編集委員会において審議されている。

学修ニーズを反映した資料構築を維持し、書架スペースの合理的な活用と適切な資料保存環境を保つため、年3回の除籍を進めた。ラーニングコモンズの所蔵資料の拡張に伴い、フロア案内板、図書館ホームページのリニューアルを行った。

図書館資料の整備、再配架においては、利用者のニーズに応じて変遷し、資料の整理・保存に努めた。10号館図書館の閉架図書については、学生のニーズに即した資料を整理、移設できるよう、学生からの利用希望を随時、受け付け、ラーニングコモンズへの図書移設、所蔵データの更新作業を実施している。

教員からの依頼を受け行ったラーニングコモンズ企画展示では、認知症支援の啓蒙活動の一環として、高梁市地域包括支援センターによる「認知症サポーター企画展示」【期間：10月1日(火)～10月31日(木)】を開催した。また、障害・福祉事業への理解促進を目的に社会福祉法人旭川荘によるアート展「旭川荘アートギャラリー展」【期間：11月1日(金)～12月4日(水)】を開催し、一般の方への開放も行った。多様化する社会で役立つ実践的な能力を育む学習環境の充実・整備のため、企画展示の期間中は、関連図書の展示を行った。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

概ね順調に業務を遂行することができた。高梁キャンパスにおいては、収容可能冊数の変化に応じて、図書の新設・除籍・無償譲渡・廃棄を進めた。引き続き、選択と集中を念頭に、適時適切に除籍を進める必要がある。また、図書館・ラーニング commons の諸活動については、学修支援の一助となるべく、図書展示企画や「先生の押し本」「セルフツアー」等の企画やイベントを実施しており、「図書館だより」(年5回)を発行した。学生参加型のイベント情報や企画展、ラーニング commons のリニューアルオープン等のお知らせについては、図書館ホームページ上にも公開し、広く周知している。

### 〈次年度への課題〉

南あわじ志知キャンパスにおいては、図書資料所蔵スペースの狭隘化が進んでおり、所蔵スペース確保の対応が今後の課題となってきている。計画的な環境整備が必要である。

## 5. 学修環境の整備

### 施設・設備の整備

#### 〈今年度の取り組み状況〉

学修環境の整備について以下の通り実施した。

大学全体としては、学生の入学前から卒業後までの全てのデータを管理するシステムである GAKUEN のバージョンアップを行い、よりきめ細かなサポート体制を整えた。

在学生・卒業生の利便性向上への取り組みとして、各種証明書をコンビニエンスストアで受け取れる証明書発行サービスを開始した。

また、学内に設置する証明書発行機を更新し、キャッシュレスで証明書の発行ができるよう機能の充実を図った。

事務系ファイルサーバの保有する共有ストレージをリプレイスし、学修支援の充実を図った。

高梁キャンパスでは、旧順正高等看護福祉専門学校の校舎を学生会館に改修した。

学生生活の充実を図るとともに、地域との連携を深め更に魅力ある大学となることを目指すため、1階をボランティアセンター、2階を学生の憩いの場、3階を学生の学びの場として整備した。

南あわじ志知キャンパス臨海実習棟の屋外に、有用海藻類の陸上養殖試験を行うための施設を整備した。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

2025年4月には GAKUEN のバージョンアップを完了、各種機能の運用確認も終了し、問題なく稼働している。

証明書発行サービスは、2024年9月より、学内での発行・コンビニ等での発行ともに問題なく稼働している。

事務系ファイルサーバの保有する共有ストレージのリプレイスは、2025年2月初旬でリプレイスが終了し問題なく稼働している。

学生会館の改修工事は、2月に完了し、4月16日に学生に解放する。

#### 〈次年度への課題〉

経年劣化による施設・設備の要修繕箇所の洗い出しと対応が必要である。  
備品の棚卸しをする必要がある。

## IV. 研究推進について

### 1. 研究力の強化

#### 〈今年度の取り組み状況〉

① 6月26日(水)に科学研究費補助金採択率の向上を目的として、「科研費 採択者体験談～私の研究計画調書、こんな工夫をしました～」と題して科研費が採択された先生に情報提供をしてもらった。

② 7月31日(水)に科学研究費公募要領等説明会を開催した。

- ③ 令和6年度は、科学研究費は新規の応募が18件あり、新規採択件数は4件であった。新規応募に対する採択率は22.2%であった。なお、継続も含めた採択件数は17件であった。また、本学の教員が科学研究費の分担研究者として10件の研究が進められている。科学研究費補助金以外では、研究助成金・受託研究等20件が助成を受けて研究が進められている。
- ④ 学内共同研究費の配分については5件の研究について研究費を配分した。加えて、SDGs教育研究活動助成金3件、地域貢献教育研究活動助成金5件を助成した。
- ⑤ 研究部門自己点検・自己評価報告書を作成し、外部評価委員からの評価を受けた。
- ⑥ 令和6年度は全学で学術論文57件、雑誌投稿等8件、講演・口頭発表95件、著書・作品11件の研究成果が発表された。
- ⑦ 全教員が年2回のresearchmap更新を実施し、研究成果を発信した。
- ⑧ 3月13日（木）に順正学園学術研究交流会を開催して研究交流の推進を図った。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

科学研究費は継続も含めた採択件数は17件であった。全体的には研究費の獲得も評価することができる。昨年度は新規の応募に対する採択率が8.7%と非常に低かったが、科研費申請書の書き方研修会を行った結果、採択率が22.2%に向上した。一方、応募件数が18件であり、教員数に対する応募率が低かった。令和6年度は、学術論文は57件であり令和5年度の81件に比較して減少した。講演・口頭発表も令和5年度の189件から95件へと減少している。研究活動の活性化が必要である。

研究部門自己点検・自己評価は評価報告書を作成し、外部評価委員からも評価をいただき、計画通りに実施できた。

順正学園学術研究交流会は、学園内の研究活動の情報共有と活性化に貢献していると高く評価できる。

#### 〈次年度への課題〉

科学研究費補助金採択率の向上を目的として科学研究費補助金研究計画調書の書き方研修会を開催した結果、科学研究費補助金の新規採択率が22.2%に向上した。今年度も研修会を開催したが、今後も採択率向上を目指して研修会を開催する。さらに、科学研究費公募説明会を充実させ、学内共同研究費の効果的配分を行うことにより、科学研究費補助金の採択数向上を目指す。一方、科研費応募件数が18件と少ないことから、応募件数の増加を目指して教員への働きかけを強める必要がある。

全教員が年2回のresearchmap更新を確実に実施し、研究成果を発信する。また、順正学園学術研究交流会の内容を充実させ、研究交流の推進を図る。

## 2. 社会実装の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① それぞれの教員が自治体・産業界・他大学等と産学官連携研究を推進しているが、大学、学部単位での連携は出来なかった。
- ② リサーチパーク研究発表会は1件の発表を行った。
- ③ 地域貢献教育研究活動助成金5件及びSDGs教育研究活動助成金3件に研究費を配分し、地域志向研究を推進した。
- ④ 地域連携研究および地域社会の課題解決を目指した学科単位での研究は一部の学科にとどまった。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

本年度も大学、学部単位での産学官連携研究ができなかった。また、リサーチパーク研究発表会での発表は1件にとどまった。学外との研究連携は個々の教員の連携にとどまっており、大学全体としての連携が出来ていないことが課題である。

地域貢献教育研究活動助成金及びSDGs教育研究活動助成金を充実させ地域志向研究を推進することは出来たが、さらに地域連携研究および地域社会の課題解決を目指した研究を推進する必要がある。

#### 〈次年度への課題〉

本年度も大学、学部単位での産学官連携研究ができなかった。また、リサーチパーク研究発表会での発表は1件にとどまった。学外との研究連携は個々の教員の連携にとどまっており、大学全体としての連携が出来ていないことが課題である。

地域貢献教育研究活動助成金及びSDGs教育研究活動助成金を充実させ地域志向研究を推進することは出来たが、さらに地域連携研究および地域社会の課題解決を目指した研究を推進する必要がある。

### 3. 研究倫理・コンプライアンスの充実

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① 6月26日（水）にコンプライアンス教育・研究倫理教育を実施した。今年度もコンプライアンス違反、研究倫理違反はなかった。
- ② 「吉備国際大学コンプライアンス教育・啓発活動実施計画2024年度版」に基づき研修会を開催すると共に、学長が研究規範の遵守等についてメッセージを発信し、コンプライアンス違反ゼロを継続した。
- ③ 動物実験の自己点検・自己評価を行い、日本動物実験学会の外部検証を受審し、11月27日（水）に現地審査を受けた。
- ④ 11月12日（火）に実験動物慰霊祭を開催した。
- ⑤ 2月26日（水）に動物実験内部監査を行い、動物実験が適切に行われていることを確認した。
- ⑥ 「吉備国際大学安全保障輸出管理規程」、「吉備国際大学における研究インテグリティの確保に関する規程」、「吉備国際大学オープンアクセスポリシー」、「吉備国際大学研究データポリシー」、「吉備国際大学 学術機関リポジトリ運用指針」を策定し、適切な研究推進と研究成果の公表に関して学内規程等を整備することができた。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

コンプライアンス教育・研究倫理教育については、研修会を開催すると共に、学長が研究規範の遵守等についてメッセージを発信した。また、学生に対しては演習科目等の授業で研究倫理教育を行うことをシラバスに記載し、演習科目等において各学科が研究倫理教育を行った。なお、コンプライアンス教育・研究倫理教育研修会において確認テストを行った結果、点数が低い教員がいたことが今後の課題として残った。

動物実験の自己点検評価を行い、外部検証を受審した結果、動物実験の実施体制に若干の見直しが必要であるとの指摘を受けたが、動物実験は適切に実施されているとの評価を得ることができた。

懸案であった、研究インテグリティの確保等に関する一連の規程等を整備することができた。

#### 〈次年度への課題〉

コンプライアンス関連規程および研究倫理関連規程の周知と違反の予防を図る。研究倫理教育を一層充実させ、倫理違反ゼロを継続する。また、コンプライアンス教育・啓発活動を充実させ、コンプライアンス違反ゼロを継続する。なお、コンプライアンス教育・研究倫理教育研修会において確認テストの点数が低い教員がいたことから次年度は、研修方法と確認テストの方法について検討が必要である。

動物実験の外部検証の結果、動物実験は適切に実施されているとの評価を得ることができたが、指摘を受けた事項について、改善を図る必要がある。

懸案であった、研究インテグリティの確保等に関する一連の規程等を整備することができたが、実際の運用に当たって教員への説明会を開催する必要がある。

### 4. 安全への配慮等

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① 化学物質についてのリスク管理を徹底し、事故等の未然防止に努めた。
- ② 毒劇物、麻薬類、放射性物質等について、法令に基づき管理を徹底した。
- ③ 組換えDNA実験安全管理規程の確実な遵守を呼びかけ、DNA実験等の安全管理に努めた。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

化学物質の実験上の安全への配慮については、環境マネジメントに一環として化学物質の管理を行っている。

組換えDNA実験については、組換えDNA実験安全管理規程の確実な遵守を呼びかけた。

### 〈次年度への課題〉

実験の安全管理については、法令遵守を基本として、徹底したい。

## V. 大学運営について

### 1. 持続可能性の追求

#### SDG's 達成を目指した活動の推進

##### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① 教員の研究活動をSDGsに紐付けし、持続可能性に寄与する研究の推進を目指す予定であったが、本年度も実施することが出来なかった。
- ② 大学の組織活動をSDGsのゴールに紐付けする予定であったが、実施できなかった。
- ③ SDGsを指向した教育研究を推進するため、SDGs教育研究活動助成金で3件の研究を助成した。研究成果は「吉備国際大学研究部門自己点検・自己評価書」に掲載した。
- ④ 持続可能性に寄与する人材の育成を目指して、全ての授業をSDGsのゴールに紐付けし、シラバスに掲載するとともに、持続可能性に寄与する人材を育成を目指して教育を行っている。
- ⑤ 吉備国際大学のSDGsへの取り組みについてはホームページに掲載しているが、SDGs活動の評価システム及び情報公開システムの構築は出来なかった。

##### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

今年度は研究活動についてSDGsの17の目標との紐付けを行う予定であったが、実施することが出来なかった。SDGs教育研究推進経費によるSDGs教育研究の推進は3件を助成したが、教員へのSDGs推進に対する意識の向上が課題である。

1年生の必修授業でSDGs概論を教授した。また、全ての授業科目について、各授業がSDGsのどのゴールに関係しているのかについて紐付けを行い、シラバスに掲載した。学生教育においてSDGsを意識した教育ができたと考えられる。

大学の組織活動のSDGsへの紐付けも実施することが出来なかった。吉備国際大学のSDGsへの取り組みについてはホームページに掲載しているが、SDGs活動の評価システム及び情報公開システムの構築は出来なかった。

##### 〈次年度への課題〉

SDGs活動に関する情報公開ができていない。「サステナビリティレポート」の発行を目指すとともに、ホームページでの情報公開と情報発信を行う。

個々の研究活動をSDGsに紐付けし、持続可能性に寄与する研究の推進を目指す。また、大学の組織活動をSDGsのゴールに紐付けし、全ての活動を持続可能性に向ける。

引き続き、全ての授業においてSDGsを意識した持続可能性に寄与する人材を育成する。

#### 環境マネジメントの推進

##### 〈今年度の取り組み状況〉

##### 1. エネルギー消費量の削減

① 2023年度から5年間にわたり年平均1%以上のエネルギー消費量の削減を目指して取り組んでいる。エネルギー消費量は着実に削減できており、本年度の目標である2022年度比2%削減は達成できる見通しである。

② 機器更新時には省エネ機器を検討している。また電灯のLED化は計画通り進んでおり、本年度で高梁キャンパスの17講義室、6・7号館階段灯の計651本のLED化を実施した。

③ 学生には環境の話題を取り扱う授業において教育を推進している。教職員にはグリーン掲示板でエネルギー使用量の削減について依頼し、省エネ意識を向上させ、エネルギー消費量削減行動を推進した。

④ 省エネ活動の推進及び省エネ機器の導入、再エネの活用などを通じて、2030年温室効果ガス排出量 -46% (2013年度比)に向けた取組を行っている。

## 2. 環境マネジメントシステム (EMS) 活動の確実な実施

① 全キャンパスにおけるEMS活動の推進と各学科から年2回の情報収集を行い継続的に取り組んでいる。

② 教授会やガールン掲示板を通じて、全学的にEMS活動の周知と取り組みの推進、活動実績の公表を行った。

## 3. EMS教育の推進

① 春学期、秋学期の新入生オリエンテーション時にEMS教育を実施した。

② 在学生に対してはオリエンテーション時にEMS教育を実施し、学生のEMS活動への参加を促進した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

環境マネジメントについては、例年通りデータの収集と解析を行った。新入生と在学生に対するEMS教育は継続して実施しており、環境意識の醸成に繋がっていると思われる。

### 〈次年度への課題〉

環境マネジメントの取り組みを継続して推進し、年平均1%以上のエネルギー消費量の削減を達成する。

南あわじ志知キャンパスの環境マネジメント活動の推進と情報収集の継続的取り組みを行っていく。

新入生と在学生に対するEMS教育を継続して行う。

## 2. 職能開発の強化

### FD・SDの充実

#### 〈今年度の取り組み状況〉

建学の理念に基づき、教育目的および教育目標（ブランドビジョン）の具現化を目指し、FD・SDに取り組んできた。授業内容や教育方法の改善を図るとともに、教育研究活動などを適切かつ効果的に推進するため、組織的な研修機会を設けた。今年度は以下の研修会を開催し、教職員の資質向上と能力開発を進めてきた。

#### 1. 全学FD・SD研修会

[日時]

令和6年9月4日(水)14時～15時30分

[方法]

Microsoft Teamsによるオンライン開催

[対象者]

吉備国際大学に所属する教職員及び大学院博士後期課程在学生

[目的]

平成28年4月に施行された障害者差別解消法および令和3年6月に公布された改正障害者差別解消法により、国公立・私立を問わず、すべての大学等において、令和6年4月1日から合理的配慮の提供が義務化された。本研修会では、大学として適切な対応を行うために、関連する基礎知識や、実際に行われた様々な対応事例をご紹介いただいた。これにより、知識を習得し、理解を深め、今後の教育に活かすことで、本学の教育目標（ブランドビジョン）の達成に寄与することを目的とした。

[内容]

講演テーマ 合理的配慮の提供について

講師 原田新氏（岡山大学 教育推進機構 准教授）

#### 2. 学科別FD研修会

[日時]

令和6年10月～令和7年3月

#### [方法]

研修内容は、各学科のFD・SD推進委員が学科長と相談しながら検討し、各学科の状況を踏まえ、特色に応じたFD研修会を以下の手順に沿って実施した。

##### (1) 実施案の提出

研修内容の決定後、各学科のFD・SD推進委員は同委員会へ実施案を提出

##### (2) 学科別FD研修会の実施

実施案に沿って学科別FD研修会を開催

##### (3) 実施報告の提出

研究会の実施後、各学科のFD・SD推進委員は同委員会へ実施報告を提出

※欠席者に対しては動画資料や資料配布等の代替措置を講じ、全教員が参加できるように配慮

#### [対象者]

各学科の教員

#### [目的]

学科別FD研修会を開催し、学科の特色に沿った内容について組織的な研修を行い、教育あるいは授業内容および方法等の改善を目的とした。

#### [内容]

各学科の実施内容は以下の通り。

- ・経営社会学科  
テーマ 経社学生の学びの特徴—教学IRデータによる可視化—
- ・スポーツ社会学科  
テーマ スポーツ社会学科のミッションの再定義 - カリキュラム変更に向けて
- ・看護学科  
テーマ 学生への看護研究指導に活かすExcelを使ったHADの活用
- ・人間科学科  
テーマ 人間科学科における学科共通科目の効果的な運用について
- ・アニメーション文化学科  
テーマ 3D CGの現代的展開とその応用：大学専門課程教育と進路指導における含意
- ・地域創成農学科・海洋水産生物学科（合同開催）  
テーマ 進む少子化を見据え、農学部の教育魅力を高めるための方策を議論しよう
- ・外国学科  
テーマ アクティブラーニングのコツ

以上の通り、研修会を実施した。さらに、SD研修の一環として、研究推進部門が中心となり、コンプライアンス教育および研究倫理教育研修会を開催した。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

春学期には全学FD・SD研修会を、秋学期には学科別FD研修会を開催した。全学FD・SD研修会では、大学全体が抱える共通課題を取り上げ、学科別FD研修会では、各学科の特色に応じた課題をテーマとし、組織的な研修機会を設けることで、教職員の資質向上と能力開発に努めている。

全学FD・SD研修会では、本学が合理的配慮を適切に提供することを目的に、岡山大学における具体的な対応事例をご紹介いただいた。これを踏まえ、教職員が合理的配慮に関する知識と理解を深め、今後の教育に活かせるようにした。

学科別FD研修会では、学科ごとに専門分野が異なることから、各学科の特色に応じた研修会を開催した。各学科のFD・SD推進委員が学科長と相談しながら、テーマ・内容・方法を検討し、実施している。また、実施案および実施報告書はFD・SD推進委員会で共有し、他学科の教員も当該学科の研修会に参加できるようにしている。

以上のように、教職員の資質向上と能力開発に資する研修会を実施することができた。

#### 〈次年度への課題〉

建学の理念、教育目的および教育目標（ブランドビジョン）を実現するため、FD・SDの充実を図る。職能開発の強化については、FD・SD推進委員会が中心となり、教育研究および授業の改善、本学の特色である地域連携・地域貢献、国際化、さらには大学運営に必要な知識の習得と情報共有などに関して、全学または学科別の組織的な研修機会を設け、教職員の資質と能力の向上に取り組んでいく。

<p><b>3. 人権・安全への配慮の充実</b></p> <p><b>労働環境の整備、充実</b></p> <p>〈今年度の取り組み状況〉          公益通報に関してコンプライアンス窓口を設け、通報者に不利益が生じないよう公益通報者保護の制度を整備し、適切に機能させている。</p> <p>〈今年度の結果についての点検・評価〉          「公益通報等に関する規程」に則り、コンプライアンス窓口を法人本部総務部総務課及び大学庶務部庶務課に設置して体制を整備している。なお、今年度は窓口への通報はなかった。</p> <p>〈次年度への課題〉          私立学校法の改正に伴い、内部統制システムの体制整備を行う。その一環として「公益通報等に関する規程」についても一部改正する。</p> <p><b>人権関連の研修の充実</b></p> <p>〈今年度の取り組み状況〉          人権関連の研修の充実については、岡山県大学人権・同和教育懇談会に参加(本年度は書面開催)し、学部学科などの取り組み状況をまとめ報告をした。また、全体の報告書については、届き次第共有する予定である。          キャンパス・ハラスメントの防止については、例年どおりポスターを作成して啓発活動を行った。また、教職員対象のハラスメント防止研修会を9月19日(木)に開催した。</p> <p>〈今年度の結果についての点検・評価〉          人権教育については、教職員については例年通り実施できた。          キャンパスハラスメントについても例年どおりポスターによる啓発活動を行うとともに、ハラスメント防止研修会において相談対応法などの内容を含めることで、教職員全員がハラスメント相談員という意識を持ち、ハラスメントか否かにこだわらない相談対応を心がけるよう啓発した。</p> <p>〈次年度への課題〉          人権に関して配慮が必要な事項が多様化する中、学生及び教職員に対して適切な教育、研修が必要となってきた。本学でも障がい学生、LGBTQ等の学生、外国人留学生など、多様な学生を受け入れており、必要な対応ガイドラインなどの整備や人権教育により、差別のない環境づくりが今後の課題となる。          引き続き、キャンパス・ハラスメントの防止、排除に向けた啓発活動を行い、適切に対応ができるようにする。</p> <p><b>4. 法人部門との連携の円滑化</b></p> <p><b>管理運営機関の連携と相互チェック</b></p> <p>〈今年度の取り組み状況〉          理事会には学長が理事として、また評議員会には副学長、学部長、附属図書館長等の大学教職員が評議員として出席し、学園の意思決定において大学の意見を述べている。          また、学園協議会により設置校間に共通する重要事項を協議し相互の連携強化と業務の円滑化を図っている。大学協議会は総長が招集し、議長となって大学の教学に関する重要事項の決定について理事会との意見調整を行い意思決定の円滑化を図っている。事務部門においては、事務連絡会議により理事長、学長、校長参加のもと学園全体の事務部門が情報共有を行うことで業務の円滑化を図っている。          さらに、これらの理事会、評議員会、学園協議会及び大学協議会等の構成により相互チェック体制を整備し、大学から法人経営に参画するなど相互チェック機能を適切に機能させている。          監事は理事会、評議員会に出席してその運営を監査するとともに、法人の業務若しくは財産の状況又は理事の業務執行状況について意見を述べている。また、内部監査部門と連携して会計監査や業務監査を実施してその結果を理事長に報告している。</p>
--

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

理事会、評議員会を定例のほか臨時に開催しており、学長が理事として、副学長、学部長等が評議員としてそれぞれ出席し、学園の意思決定において大学の意見を述べている。

また、5月と12月に学園協議会を開催し、設置校間に共通する議題を協議するとともに連携強化を図っている。事務部門では、理事長参加のもと毎月、事務連絡会議を開催して情報共有を行い業務の円滑化に努めている。さらに、これらの会議体を適切に運営することで相互チェック機能を果たしている。

監事は、理事会、評議員会に出席するとともに、常勤監事1名は、法人本部に週2日出勤して、監査計画にもとづき監査を行っている。監査にあたっては内部監査部門である法人本部総務部や監査法人と連携して業務にあっている。

### 〈次年度への課題〉

令和7年4月の私学法改正により理事会、評議員会等が新体制となる。改正法に則ってこれを適切に運営し、新体制のもとで一層のガバナンス強化に努めていく。

## 5. 財政基盤の確立

### 中期的な計画に基づく財務運営と安定した財務基盤の確立

#### 〈今年度の取り組み状況〉

決算をもとに実態に即した中期財務計画へと見直しを行い、学園の今後の財務状況の推移を的確に把握を行った。また、計画にもとづき安定した財務基盤の確立を目指して取り組む努力を行った。

学納金のほか外部資金獲得による収入の増加、人件費及び経費の削減による支出の抑制を積極的に推進し、収支バランスの改善を図った。

特に、学納金収入の増加は喫緊の課題であり、ブランディングに基づいた広報活動、より魅力ある学部学科への再編を含めた募集戦略、高梁市・順正学園特別奨学金制度をはじめとする本学独自の学生支援の充実等により、定員確保を目指して学生募集を強化を行った。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

令和5年度決算をもとに中期財務計画の見直しを行った。

また、収支改善の取り組みとしては、令和7年度にむけて様々な取り組みや、独自の奨学制度及び応援学費などを積極的に広報し、定員確保を目指して学生募集に取り組んだ結果、全体の入学者は対前年度比110%となり、高梁キャンパス114%、南あわじ志知キャンパス103%、岡山キャンパス96%となった。

#### 〈次年度への課題〉

今後の財務状況の推移を的確に把握し、安定した財務基盤の確立を目指し、更なる外部資金獲得や経費の削減を目指し収支バランスの改善を行う必要がある。

また、魅力ある大学を発信する広報戦略を実施し、更なる入学定員の増加を目指す必要がある。

## 6. 適正な会計処理の実施

### 職員の知識向上

#### 〈今年度の取り組み状況〉

学校法人会計基準に準拠し、学園の経理関係諸規程に則った適正な会計処理を行った。

また、ガルーンを活用して情報提供・情報共有し、適正な会計処理についての共通認識を図った。

日本私立大学協会の経理部課長相当者研修会に会計課長が参加し、研修内容をとりまとめた課内で研修を行い知識を深めた。

また、日本私立大学協会の「寄附促進のためのオンライン説明会」についても課内で受講し知識向上を図った。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

日本私立大学協会の経理部課長相当者研修会をはじめとする研修会に参加することで新たな情報を得ることができ、本学の会計処理方法改善の参考となった。また、オンライン研修の受講により会計担当者個々の知識が深まった。

#### 〈次年度への課題〉

令和7年度4月より「学校法人会計基準の一部を改正する省令」が施行されることから、文部科学省の関連通知をはじめとする事項に注意を払い、新会計基準への対応、実際に運用する上での留意点など理解を深める必要がある。

### 会計監査の厳正な実施

#### 〈今年度の取り組み状況〉

5月の期末監査、監事への報告をはじめ、9月、10月、11月に監査法人が期中監査を実施した。

7月～10月にかけて公的研究に関する監査を常勤監事が行っており、11月下旬に書面により監査報告を受けた。

また、1月下旬に総務課の特別監査が実施され、11月下旬の監査報告内容に対して報告や指摘事項の状況確認、今後の改善点等について意見交換を行った。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

監査法人による監査、公的研究費の監査を滞りなく行い、適正な会計処理を行った。

#### 〈次年度への課題〉

次年度も引き続き、監査法人及び監事による会計監査を継続的に実施する。

### 諸規定に則った適正な会計処理

#### 〈今年度の取り組み状況〉

令和6年度の学校法人全体の予算編成方針に従い、大学においても各部門で目的別に積算し編成した予算をシステムに登録し、効果的な予算執行管理を行った。

会計処理を行うにあたり研究費の使用マニュアルを更新し、学校法人会計基準、順正学園経理規程に沿った会計処理のルールの共通認識の徹底を行った。また、会計処理に関する各部門からの相談には、監査法人等に確認の上対応した。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

監査法人、監事、内部監査部門の監査結果報告に記されているとおり、全体的に適正な会計処理を行った。

#### 〈次年度への課題〉

次年度も学校法人全体の予算編成方針に従い、目的に見合った予算を作成し厳密な経費執行を実施する。

また、研究費の使用マニュアルを更新し厳密な経費執行を行う。

## VI. 内部質保証について

### 1. 内部質保証体制の確立

#### 〈今年度の取り組み状況〉

(1) 中期目標・中期計画を起点としたPDCAサイクルの実現

令和5年3月に、令和5年度から令和9年度までの第3期中期目標・中期計画書を策定し、実行に移して、本年度が2年目となる。第3期中期目標・中期計画書では、大学機関別認証評価の評価項目に沿った項目で目標を設定し、中期目標・中期計画を各年度の事業計画に落とし込み、以下のようなPDCAサイクルを実現して内部質保証体制の確立を図っている。

各年度事業計画 (P) ⇒計画実行 (D) ⇒自己点検・自己評価 (C) ⇒改善指示 (A)  
⇒翌年度事業計画策定 (P)

## (2) 自己点検・自己評価の実施

令和5年度より「キックオフミーティング」と「自己点検・自己評価委員会総会」を統合し、「自己点検・自己評価会議」として新たに実施している。自己点検・自己評価会議では、学長・副学長が前年度の取り組み状況や結果の点検・評価、次年度への課題等について発表した後、学部学科・部門ごとに改善案を検討している。また、外部評価委員との意見交換の場を設け、外部評価委員の評価を受けた自己点検・自己評価報告書と自己点検・自己評価会議で議論した改善案を基に、翌年度の事業計画を立てる仕組みを構築している。

## (3) アセスメントプランによる教育改善の実現

令和4年1月に「吉備国際大学内部質保証推進規程」ならびに「吉備国際大学内部質保証の方針」を定め、内部質保証システム体制を構築した。さらに令和4年2月には「吉備国際大学アセスメントプラン」とその実行性を高めるための「アセスメント実施計画」を策定したが、点検項目の追加や実施時期の見直しを行い、内容の充実を図った。アセスメントプランの実施にあたっては、教育イノベーション課を中心に、計画に基づき各種アンケート、データの収集・分析等を実施し、担当委員会での検証を経て内部質保証委員会に報告され、必要な改善指示が内部質保証委員会から担当委員会、各学科に対して発出されている。改善指示を受けて改善計画が内部質保証委員会に提出されるとともに、実施された結果について報告されている。

また、教学IRデータの情報共有教学IRが収集したデータは、各学科や部局が教育改善を検討する際に活用できるように、ガルーン内に共有フォルダ(情報プラットフォーム)を置き、情報の共有化を図っている。

## 内部質保証委員会の審議状況 (令和6年度)

令和6年5月17日

(第1回) 教学マネジメント推進委員会からの報告により以下について検証  
・内部質保証委員会による改善指示に基づく令和6年度事業計画(案)

令和6年6月5日

(第2回) 内部質保証委員会(令和6年1月10日)からの改善指示に伴う改善計画について検証 [参考]

改善指示1: 学生の学修及び生活に関するアンケート回収率を上昇させる方法を検討し、実施すること。

改善指示2-1: 高校段階から学習時間が少ないことから、初年次教育等において学習習慣を身につけさせる方策を検討し、実施すること。

改善指示2-2: 各教育課程や授業において、学修時間を増やすための取組みを検討し、組織的に実施すること。

改善指示3: 交通事故の防止、交通ルールやマナーの遵守を目的とする取組みについて検討すること。

令和6年7月5日

(第3回) 教学マネジメント推進委員会からの報告により以下について検証

- ・2024年度のマイステップ運用について
- ・2024年度春学期の授業アンケートの実施について
- ・2024年度学生の学修及び生活に関するアンケートの実施について

令和6年8月5日

(第4回) 庶務課からの報告により以下について検証

- ・ガバナンスコードの実施状況報告書(案)について検討

令和6年9月4日

(第5回) 吉備国際大学大学院(通信制)連合国際協力研究科のカリキュラム変更等の検証、内部質保証委員会(令和6年6月5日)からの改善指示に伴う改善計画について検証

[参考]・改善指示1: KIUIドリルの状況分析

① 2024年度入学生については、このまま継続するが、新入生が円滑に取り組めるようサポート体制を再構築する。

② 2024年度入学生の実施状況を検証し、2025年度入学生の入学前教育として、kiuiドリルを継続するか、ほかの内容とするか各学科で再検討すること。

- ・アセスメントプランに基づく学修成果の可視化について

2024年度春学期の入学時アンケートの実施結果について

- ③ 2024年3月の卒業時アンケートの実施結果について
- ④ 学位授与率の推移
- ⑤ 国家試験合格率の推移
- ⑥ 中退率及び中退理由の推移
- ⑦ 【kiuiドリル】ベーシック入学前教育教科別全体実績について
- ⑧ 2024年度ジェネリックスキルテスト（PROGテスト）の実施結果について

令和6年12月4日

（第6回） 教学マネジメント推進委員会からの報告等により以下について検証

- ・令和6年度自己点検・自己評価の実施について
- ・社会科学部経営社会学科のカリキュラム変更に伴う吉備国際大学学則の一部変更について
- ・留学生の日本語教育体制の変更について

令和7年2月5日

（第7回） アセスメントプランに基づく学修成果の可視化について

- ① 2024年度教養科目履修率について
- ② 2023年度学年別累積GPA分布状況について
- ③ 2021年度入学生における入試制度の妥当性の検証について
- ④ 2024年度入学時アンケートの実施結果について（最終）
- ⑤ 2024年卒業時アンケートの実施結果について（最終）
- ⑥ 2024年度卒業生アンケートの実施結果について
- ⑦ 2024年度就職先アンケートの実施結果について
- ⑧ 2024年度学生の学修及び生活に関するアンケートの実施結果について
  - ・令和5年度の学長からの改善指示に伴う『改善経過報告書』の作成について・
  - ・令和6年度の学長からの改善指示について

令和7年3月5日

（第8回） ・吉備国際大学(通信制)規程の変更について

- ・令和5年度の学長からの改善指示に伴う『改善経過報告書』の検証について
- ・令和6年度の学長からの改善指示について

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

アセスメントプラン実施計画に基づく点検と検証が計画通り実行され、内部質保証委員会による改善指示と改善計画策定という教学マネジメントが機能し、内部質保証の体制が確立しつつあることは評価できる。また、教学IRデータをガルーン内の共有フォルダに蓄積して情報の共有化を図ることができたことは評価できる。

#### 〈次年度への課題〉

「吉備国際大学アセスメントプラン」に基づく「アセスメントプラン実施計画」は、見直しを行いながら、確実に実施できるようになっている。しかし、検証結果から導き出された“課題”を“改善”へと繋げるための改革のエンジンがまだまだ不十分といえる。したがって、各委員会での議論を活性化し、内部質保証委員会の改善指示を受けて実行可能な改善案を策定し、着実に実行し改善を図る必要がある。

## VII. 地域連携・地域貢献の推進について

### 1. 地域連携・地域貢献の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① 「地域連携・地域貢献の基本方針」を基にして、全学部、全学科が地域連携活動及び地域貢献活動に取り組んだ。
- ② 高梁キャンパス、南あわじ志知キャンパス、岡山キャンパスの各地域連携センターを統括する「地域貢献推進センター会議」を毎月開催し、各キャンパスの地域連携、地域貢献の取り組みに関する情報共有をきめ細かく行った。
- ③ 地域貢献教育研究活動助成金5件及びSDGs教育研究活動助成金3件を配分し、地域貢献活動の活性化および持続可能社会づくりに関する研究を推進した。
- ④ 自治体及び産業界との間で新たな連携協力協定の締結はできなかった。

- ⑤ ボランティアセンターを始め、各教員、学生サークルが地域連携・地域貢献活動を行った。
- ⑥ 高梁市及び高梁商工会議所と産学官連絡会議を開催している。また、南あわじ市大学連携協議会に参加して情報交換をしている。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

地域貢献推進センター会議を毎月開催し、各キャンパスの地域連携、地域貢献の取り組みに関する情報共有をきめ細かく行うことができたが、各キャンパス地域連携センターの活性化が課題として残った。

地域貢献教育研究活動助成金及びSDGs教育研究活動助成金により、教員の地域貢献活動を支援することが出来た。自治体及び産業界との間で新規の連携協力協定は締結に至らなかった。

ボランティアセンターを始め、各教員、学生サークルが地域連携・地域貢献活動を行った。多くの地域連携・地域貢献活動が行われているが、活動の整理が必要である。

高梁市、高梁商工会議所と開催している産・官・学連絡会議により、情報交換が出来ている。

#### 〈次年度への課題〉

引き続き「地域連携・地域貢献の基本方針」を基にして、全学部、全学科が地域連携活動及び地域貢献活動に取り組む。地域貢献教育研究活動助成金は令和7年度も継続し、教員が担う地域貢献活動の活性化を目指す。

多くの地域連携・地域貢献活動が行われており、毎年活動結果を報告してもらっているが、活動の整理が出来ていない。次年度以降も活動の整理に取り組む。

地域連携・地域貢献活動の活性化のために、地域のニーズと大学のシーズを一致させる仕組みを検討する必要がある。

## 2. 大学の持つ知の地域への還元

#### 〈今年度の取り組み状況〉

① 高梁キャンパスで開催された「公開講座まちなかゼミナール」については、高梁・岡山キャンパス所属の教員により、前期8講座、後期8講座、計16講座を開催した。南あわじ志知キャンパスで開催された「地域創成生涯学習講座」は5講座を開催した。大学全体で計21の公開講座を提供した。

② 出張講義等については、出張講義が可能なリストを作成しホームページに公開しており、高等学校等からの依頼の都度対応している。

③ 学部単位でのフォーラム、講演会等の開催を目指しており、本年度は社会科学部が「吉備国際大学社会科学部・高梁川流域連携中枢都市圏事業合同シンポジウム～人生100年時代を見据えた健康づくりを高梁から～」というテーマで公開シンポジウムを開催した。

④ 大学コンソーシアム岡山の各事業を通じた地域連携・地域貢献活動としては、吉備創生カレッジへの講座の提供、「日ようび子ども大学」へのブース出展などを行った。

⑤ 第30回吉備国際大学英語スピーチコンテストを開催した。今後も国際大学として地域の高校生の皆さんに英語学習の成果を披露する場を提供する。

⑥ 大学公式ホームページを改善して地域連携・地域貢献活動を掲載したが、地域連携に関する情報発信欄を設置することが出来なかった。

⑦ 令和7年2月22日（土）に吉備国際大学地域連携・地域貢献活動報告会を開催した。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

公開講座の開催、出張講義については計画通りに開催することが出来た。大学の持つ知の社会への還元については評価できる。学部単位でのフォーラム、講演会等として社会科学部が公開シンポジウムを開催した。一方、地域貢献が教員個々の活動に留まっている。

大学コンソーシアム岡山の各事業を通じた地域連携・地域貢献活動としては、吉備創生カレッジへの講座の提供、「日ようび子ども大学」へのブース出展などを行った。

高大連携についても出張講義を活用した出前授業、英語スピーチコンテストの開催により地域の高校生の支援が出来ている。

情報公開については、吉備国際大学地域連携・地域貢献活動報告会を開催した。また、大学公式ホームページを改善して地域連携・地域貢献活動を掲載したが、地域連携に関する情報発信欄を設置することが出来なかった。

### 〈次年度への課題〉

公開講座の開催等、大学の持つ知の社会への還元は出来ているが、教員個々の活動が中心であることから、大学全体及び学部としての講演会やシンポジウム等のさらなる開催が課題である。

また、地域連携・地域貢献活動は活発に行われているが、情報の整理と情報公開に課題がある。また、ホームページ等を活用した情報公開が出来ていないことから、今後より効果的な情報公開方策を検討する。

次年度以降も吉備国際大学地域連携・地域貢献活動報告会を開催する予定である。

## 3. 地域貢献人材の育成

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① 学科専門科目の中での、地域課題解決人材を育成する授業の開講は出来なかった。
- ② 地域課題解決の担い手を養成・輩出する「地域貢献人材育成プログラム」の開設を目指したが出来なかった。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

地域課題解決の担い手を養成・輩出する「地域貢献人材育成プログラム」の開設も出来なかった。

### 〈次年度への課題〉

地域課題解決の担い手を養成・輩出する「地域貢献人材育成プログラム」の開設を目指す。

## VIII. 国際化の推進について

### 1. 国際化に向けた科目内容の充実

#### 〈今年度の取り組み状況〉

1. 国際化に向けた英語学修等の充実と異文化・国際事情理解の推進

① 2022年度から全学共通教養科目として導入した「人間力育成科目群(きびこく学、SDGs概論、グローバルスタディーズ入門、課題解決演習)」を引き続き実施した。

② 外国学科以外の学科においては、複数のネイティブスピーカー(外国学部専任教員と非常勤講師)による英語教育(必修3科目、選択3科目)を実施した。

③ 英語以外の外国語や文化を学ぶ科目として、「中国語と中国文化Ⅰ・Ⅱ」、「フランス語とフランス文化Ⅰ・Ⅱ」、「ドイツ語とドイツ文化Ⅰ・Ⅱ」を開講した。

2. 海外留学・短期研修の促進

① 海外留学・短期研修については、主に外国語学部の学生を対象とするプログラム(スタディー・アブロードⅠ～Ⅳ)を実施している。

3. 留学生に対する学習支援の充実と生活環境の整備

① 留学生に対しては、正課の日本語関係科目のほかに春学期・秋学期に「日本語能力試験N2対策講座」を毎週2コマ開講して日本語の学修支援を実施した。また、ラーニングサポートセンターでは、毎月「おしゃべりカフェ」を開催して、日本人学生と留学生が自由に話し合い国際交流を深め、グローバルな視野で考える力を育てている。

② 生活基盤の安定化を図るための種々の支援(市民生活・住宅・アルバイト情報の提供等)を行った。

③ 留学生の母国語対応による支援体制としては、留学生課に中国、韓国、スリランカ国籍の職員を配置し、留学生の母国語対応を行った。

4. 国際社会で活躍できる職能教育と留学生に対する就職支援

① 令和5年10月に文部科学省の「留学生就職促進教育プログラム認定制度」に、本学の「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」が認定されており、日本語科目を中心としたプログラム(23科目)の単位履修者には修了証明書を発行して就職支援を行っている。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

1. 国際化に向けた英語学修の充実と異文化・国際事情理解の推進については、英語学修を中心として、複数の言語や文化について学ぶことができる教養科目群を開講していることは評価できる。ただ、必修科目を除いて履修者が少ないため、今後積極的に取り組む学修態度の涵養が必要である。
2. 海外留学・短期研修の促進については、外国語学部の学生を対象とするプログラムが中心となっているが、受け入れ人数的にも他学部の学生参加が限られる状況であり、今後は全学的に参加が可能なプログラムの促進を図る必要がある。
3. 留学生に対する学習支援の充実と生活環境の整備については、種々の日本語学修の機会を用意し、留学生の日本語能力の向上に努めていることは評価できる。また、生活基盤の安定化を図る各種の支援についても評価できる。今後は、留学生のニーズを把握し、的確な情報提供を促進する必要がある。
4. 国際社会で活躍できる職能教育と留学生に対する就職支援については、文部科学省の「留学生就職促進教育プログラム認定制度」に、本学の「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」が認定されていることは評価できる。今後の活用が期待される。

### 〈次年度への課題〉

1. 国際化に向けた英語学習の充実と異文化・国際事情理解の推進については、外国語学部以外の学部(高梁キャンパス・南あわじ志知キャンパス)の英語教育については、卒業生のアンケートにおいても「十分身についていない」という自己分析が多くなっているため、語学実践力養成に向けた教養科目における英語の必修化、ネイティブスピーカーによる英語授業内容の充実化を図るとともに、英語の外部標準テストの導入も検討したい。また、本学の教育の特色である「地域連携・地域貢献」と「国際化」を軸としたグローバル教育プログラムを検討する。
2. 海外留学・短期研修の促進については、外国語学部の学生を対象とするプログラムが中心であるが、受け入れ人数的にも他学部の学生参加が限られるため、今後は海外留学・短期研修プログラムを充実させ、外国語学部以外の学生の参加が可能なプログラムの促進を図る必要がある。合わせて短期留学・研修先の確保及び参加者の募集方法を検討する必要がある。
3. 留学生に対する学修支援の充実については、日本語能力が十分でない学生のための補習授業等の充実と参加率の向上を図る。生活環境の整備については、生活基盤の安定化を図る支援(市民生活・住宅・アルバイト情報の提供等)の促進を図る。また、留学生の母国語対応による支援体制の充実を図るとともに、引き続き留学生のニーズを把握し、学生が求める情報を提供していきたい。また、留学生の母国語対応による学修支援体制としては、今後は、他国(インドネシア、ベトナム、ネパール等)の言語への対応を検討する必要がある。
4. 国際社会で活躍できる職能教育と留学生に対する就職支援については、文部科学省の「留学生就職促進教育プログラム認定制度」に認定された、本学の「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」を活用して、日本企業への就職意欲が高い留学生の受け入れ体制の強化を図る。また、授業科目「キャリア開発Ⅰ・キャリアデザインⅠ」の学修成果を検証して、今後の授業内容の充実を図る。

## 2. 国際交流の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① アメリカ・ブラジル研修団を加計学園と合同で受け入れた。
- ② インターナショナルフェスタを学友会主催のクリスマスイベントと協働で開催し、プレイベントでは留学生と市内の中学生が交流した。
- ③ 留学生が松山踊り保存会や婦人会の方々の指導を受け松山踊り交流会を実施した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

アメリカ・ブラジル研修団はコロナ禍以前と同様のスケジュールで受け入れることができ、歓迎会や学生との交流を通じて、国際交流への理解や意識を高めることができた。

インターナショナルフェスタでは、留学生と日本人との交流はもとより、プレイベントの中学生との交流を通して、地域貢献・地域交流の推進を図った。

松山踊り交流会では留学生が地域の伝統文化に触れると共に地域交流の場を与えることができた。

### 〈次年度への課題〉

アメリカ・ブラジル研修団に加えて、フィンドリー大学から作業療法プログラムへの研修団の受け入れを実施し、台湾への研修団派遣を再開するなど新たな取り組みを加速させる。

インターナショナルフェスタを学外で実施し、市民との地域交流を充実させる。また、留学生と日本人との交流を目的とした研修旅行を実施し、異文化理解及び相互の国際理解の発展を深めることを目指す。

# 社会科学部の自己点検・自己評価

学部長

井勝 久喜

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

#### ① 入学者数

社会科学部定員180名に対して、入学者数は116名（秋学期入学を含む）であり、定員充足率は64.4%であった。

#### ② 高校を対象とした広報活動

高校への出張講義を経営社会学科は4回、スポーツ社会学科は7回行った。それ以外にも、進路ガイダンスや大学見学に積極的に対応した。また、スポーツ社会学科は部活動の選手募集もかねて153校の高校を訪問した。

#### ③ 広報活動

両学科ともInstagram、Facebookを活用して情報発信を行った。特にスポーツ社会学科では各教員が研究室単位においても積極的に最新知見、研究室学生の様子を発信した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

#### ① 入学定員充足と入学者

社会科学部として、定員を満たすことができなかった。経営社会学科は日本人の入学者数が減少した。対策を検討する必要がある。経営社会学科は海外から2年編入生（春7名、秋2名）、3年編入生（秋2名）を、学内他学科から転学科生（2年次1名、3年次2名）を迎えた。編入生、転学科生の受け入れは、経営社会学科が多様な学生の教育ニーズを満たす役割をは対しているとは評価できる。

スポーツ社会学科は昨年と比較して入学者が増加したものの、依然定員割れが続いている。来年度から女子野球部が創部され、学科の新しい取組結果として6名（他学科2名）が入学者する（予定）ことは評価できる。

#### ② 高校を対象とした広報活動

高校進路ガイダンス、出張講義、大学見学など、依頼のあった高校を対象とした広報活動に対応できたことは評価できる。スポーツ社会学科では、部活動における高校訪問時には可能な限り体育教官室に加えて進路指導部に積極的に出向き、他学科学科についても紹介している。

#### ③ 広報活動

学科Instagram、Facebookによる学科情報発信を継続した。

### 〈次年度への課題〉

#### ① 入学定員充足

定員充足率100%を目指して入試広報室と連携して広報活動に取り組む必要がある。経営社会学科は日本人学生の確保が課題であり、各種データを検証して入学者確保に取り組む。スポーツ社会学科は女子野球部の創部にもない入学者が増えると思われるが、一部の部活動のみに頼らない学生募集策を検討する必要がある。

両学科ともカリキュラム改定を行う予定であり、学科教育の強みを高校生に理解してもらい、社会科学部を選んでもらうためにディプロマポリシーを見据えたカリキュラムの改訂を検討したい。

#### ② 高校を対象とした広報活動

引き続き、出張講義を軸に、高校生を対象とした活発な広報活動を展開する。オープンキャンパスは学生募集に重要な機会であることから、オープンキャンパスの内容の改善と充実が必要である。また、高校生にオープンキャンパスに来てもらうための工夫が必要である。

#### ③ 広報活動

学科Instagram、Facebookによる学科情報発信を行っている。高校生フォロワーを増やす工夫が必要である。また、スポーツ社会学科は各教員が積極的に情報発信を行っているが、経営社会学科は一部の教員にとどまっておき、全教員に積極的に情報発信をしてもらうための教員の意識改革が必要である。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

#### ① 資格・免許・検定等

経営社会学科は本年度「社会調査士」の資格取得者を10名輩出した。また、留学生について「KIUグローバル人材養成留学生就職促進教育プログラム」（文部科学省留学生就職促進教育プログラム、2023年度に認定）が今年度より本格的にスタートした。初年度にあたる今年度、6名の外国人留学生がこのプログラムを履修中である。

スポーツ社会学科は、各種資格試験、教員採用試験における合格率向上に向けた支援体制システムを構築した。

#### ② 退学者対策

少人数のチューター制度を活用し、定期的な個別面談を実施している。また、基礎演習、演習を通じて担当教員が学生の状態を細かく確認している。

学生についての情報は学科教員全体で共有して、フォローしている。2回連続欠席した学生はチューターまたはゼミ教員が学生の状況を確認し、教員同士で情報を共有している。加えてGPAが低い学生に関しては、個人面談に加えて保護者との三者面談も行った。

#### ③ 教育の充実

学科別FD研修会開催して、教育力の充実を図った。両学科とも新カリキュラム導入に向けて学科内で議論を重ねた。スポーツ社会学科では、kiuiドリルに加えて学科独自の教材を推薦教材(有料)としての活用を試みた。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

#### ① 資格・免許・検定等

経営社会学科では社会調査士資格取得を目指す2年生が増加している。また社会調査実習でWEBアンケートを試行的に導入したことで、学生がWEB調査のスキルを獲得することができた。また、留学生について「KIUグローバル人材養成留学生就職促進教育プログラム」の新規履修者募集の説明会を4月、10月の学期初めの学科別オリエンテーション等で実施した。結果、来年度から新たに2名の留学生から申し込みがあった。

スポーツ社会学科では、各種資格試験、教員採用試験における合格率向上に向けた支援体制システムを構築、実施した。目標達成した資格、未達成の資格があった。教員免許状の取得については、教職免許状を取得することを目的にする学生、教員になることを目標にする学生がおり、モチベーションの違いが確認された。

#### ② 退学者対策

経営社会学科については、前年度（2023年度）退学者が15名（うち留学生13名）に上ったが、今年度は減少している。入学当初からの指導が成果を上げたものと思われる。スポーツ社会学科では今年度は2名の退学者が確認されている。修学意欲の低下が原因で退学した学生がおり、退学を回避できた可能性もあることから、今まで以上に学生に寄り添った指導が必要であると思われる。

#### ③ 教育の充実

経営社会学科では3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証をおこない、学科の教育の特長（強み）と今後の課題の両方を検証することができた。

スポーツ社会学科では、新カリキュラム導入(2026年度)について、学科全体のコンセプトを含めた見直し、コース制度の有無について検討した、また、スポーツマネジメント教育の強化を検討、実施したが、実務経験を積めるプログラムの展開には至っていない。

### 〈次年度への課題〉

#### ① 資格・免許・検定等

経営社会学科では、社会調査士資格取得及び留学生の「KIUグローバル人材養成留学生就職促進教育プログラム」の履修について、多くの学生が取得を目指すように入学期から指導する必要がある。資格取得のメリットを含めたガイダンスを丁寧に行っていきたい。

スポーツ社会学科では、教職を除く資格については受験者数が減少している。各種資格の説明に加えて、各種資格と就職との関連性についても具体的な事例を出しながらの説明を実施したい。教職に関しては、目的によってモチベーションが異なることから、各目標に対応した指導方法が必要である。

#### ② 退学者対策

学期移行時の担当教員（ゼミ・チューター）変更の際、教員間で十分引継ぎを行う小必要がある。また、新入留学生については特に留学生別科担当教員と入学前に情報共有を行う。

GPAが低い学生、欠席が多い学生に関しては今まで以上に早い段階での面談、個別指導が必要である。また、教務課との連携に加えて、学年を超えたつながりがもてるような取り組みを検討したい。

両学科ともディプロマポリシーの達成と学科での学びが将来の職業にどのように展開していくかを1年次から具体的な事例をだしながら学生に伝え、学びについてモチベーションを持たせることが必要である。

### ③ 教育の充実

経営社会学科では、FD研修会で利用した教学IRデータの集計分析の結果は、「集団」レベルの学生の特徴（集団特性）の把握にとどまった。集団特性だけでなく、学生一人ひとりの成長も調べる必要がある。今後は、入学から卒業までの学生の成長度を調べる必要がある。

スポーツ社会学科では、吉備国際大学Charme岡山高梁と本学科の連携により、Charmeの運営、トレーニング指導、マネジメント業務補助等でスタッフ参加して、実務経験を積めるプログラムを展開できるかについて引き続き検討する。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

#### ① 研究報告

教員それぞれが研究活動に取り組んだ。学術論文9編、雑誌投稿等1編、③講演・口頭発表20件、著書・作品等1編の研究成果を発表した。

#### ② 研究費の獲得

科学研究費は継続も含めて3件が採択された。また、分担研究者として1件の研究が行われている。その他、3件の受託研究が行われている。

#### ③ 研究の推進

スポーツ社会学科では若手教員を中心とした研究に関する勉強会を実施した。また、継続的に研究が実施できる時間の確保、環境整備に取り組んだ。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

#### ① 研究報告

教員それぞれが研究活動に取り組んでいるが、研究成果の発表が一部の教員に偏っていることが課題である。

#### ② 研究費の獲得

科研費の新規申請は2件にとどまり、科研費の申請を増やすことが課題である。

#### ③ 研究の推進

スポーツ社会学科では、学科内共同研究も継続しており、口頭発表できたことは評価できる。研究を通して知的探究心を学生と共有し、研究成果を学生教育に還元できた。若手教員を中心とした勉強会実施は、目標達成に向けての努力として評価できる

教員が教育と雑務をこなす時間が多く、研究時間の確保は十分ではない。他業務の効率化等、更なる検討が必要である。

研究倫理については教員だけではなく、大学院生、学部生に対しても徹底できた。

### 〈次年度への課題〉

#### ① 研究報告

研究報告が一部の教員に限定されていることが課題である。全教員が研究報告を行うようにする必要がある。

#### ② 研究費の獲得

科研費の申請が少ないことが課題である。若手教員が科研費を申請するように支援する必要がある。

#### ③ 研究の推進

スポーツ社会学科では学科内共同研究ができており、成果を上げている。経営社会学科でも学科内共同研究に取り組む必要がある。また、学内外、学内他学部他学科の研究者との積極的な学術交流を図る必要がある。

経営社会学科では地域連携・地域貢献活動における取り組みを、実践としてのみならず、研究の枠組みから検討する必要がある。

継続的に研究を行える時間の確保が課題となっており、学科業務の見直し等を行う必要がある。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① スポーツ社会学科が高梁川流域連携中枢都市圏事業として高梁市と共同で取り組んでいる高梁ヘルスアップ講座、高梁健幸フィットネス講座、高梁シェイプアップ教室、出張体力測定、健康スポーツ講座等の成果を発表する場として、社会科学部・高梁川流域連携中枢都市圏事業合同シンポジウムを開催した。
- ② 経営社会学科では、学生主体の地域連携・地域貢献活動を実施した。また、岡山県立高梁高等学校と連携して、同校におけるデジタル人材の育成と「総合的な探究の時間」の内容の充実に向けた教職員対象研修会を実施した。
- ③ スポーツ社会学科では高梁市教育委員会と連携して、地域運動部活動推進事業として中学生における部活動の練習計画、指導補助を実践した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ① 経営社会学科の学生主体の地域連携・地域貢献活動である「防災教育チャレンジプラン」で学生が受賞した。また、各教員の地域との連携が進み、学生が地域で挑戦しやすい環境づくりができた。
- ② スポーツ社会学科では、2016年度より展開してきた高梁市民を対象とした健康教室（4講座）がトラブルもなく実践できたことは評価できる。また、昨年度の課題であった市民を対象とした成果報告会を経営社会学科と協力し、合同で学部シンポジウムとして開催した。  
高梁市教育委員会と連携して高梁市内の中学校で、地域運動部活動推進事業として中学生における部活動の練習計画、指導補助を実践できたことは評価できる。

### 〈次年度への課題〉

- ① 経営社会学科ではゼミ、サークルなど、学科学生が主体となった学生の地域貢献に関わるプロジェクトが行われているが、学科としての地域連携・地域貢献活動が行えていない。教員間の連携を強化し、高梁市を中心とした地域貢献活動をさらに展開する必要がある。また、研究・地域貢献の内容とともに、学生が日々学ぶ授業内容との接続性をより高めることが課題である。
- ② スポーツ社会学科は次年度も引き続き健康づくり課と連携し、高梁市民の健康寿命延伸に貢献する。また、次年度は子育て世代の女性を対象とした健康教室を開催予定である。加えて、継続的に中学部活動を支援する仕組みの構築について行政と連携し、引き続き検討する。

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① 経営社会学科では、9か国の学生がともに学びあう国際交流活動を1、2年生の必修授業で実施した。キャリアデザインI（日本人学生クラス）の授業内などで、海外留学経験を有する上級生の体験談を聴講する機会を設けた。
- ② スポーツ社会学科では、在校生1名が短期留学していたことから、留学成果報告会を実施した。令和7年度から始まる新カリキュラムにおいて「グローバルスポーツ論・演習(仮)」が開講予定である。留学先の担当者と打ち合わせを数回実施した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ① 経営社会学科で行った国際交流活動に関連する学内外の活動は学生の評判が高かった。
- ② スポーツ社会学科では1、2年生を対象とした合同演習において、短期留学した学生による留学成果報告会を実施した。リアクションペーパーの結果から、留学に興味をもったという回答もあり、一定の成果が得られたものとする。

### 〈次年度への課題〉

- ① 経営社会学科では、国際交流活動の充実化として、日本人学生と留学生がともに学びあう機会・交流プログラムをさらに促進する。また、2026年学科新カリキュラムで、短期海外研修・留学のプログラム化、単位化について整備をおこなう。
- ② スポーツ社会学科では、留学に関しては語学留学、専門性を高めるための留学、アスリートによる留学等、多岐にわたる。特に専門性を高めるための短期留学に関しては、講義として2026年度より開始予定である。

# 経営社会学科の自己点検・自己評価

学科長

黒宮 亜希子

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① 入学定員充足（定員100名）
  - ・入学者（1年生）67名（春41名、秋26名）、学科定員定員率：67%
  - ・入学者（1年生）のうち留学生54名（5カ国）、日本人学生13名
- ② 高校を対象とした広報活動の強化
  - ・出張講義：4回（笠岡高校・興譲館高校・並木学院福山高校・希望高等学園津山高）
  - ・大学見学：2回（吉備高原学園高校・香川県立高瀬高校）
- ③ SNSによる情報発信
  - ・学科Instagram、Facebookによる学科情報発信を継続

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ① 入学定員充足と入学者
  - ・日本人入学者の減少：2023年度と比較すると日本人の入学者者が減少した。通信制高校からの入学者が減ったことが学科内の分析。しかし2025年度入学者では回復傾向にある。
  - ・多様な学生の教育ニーズ対応：海外から2年編入生（春7名、秋2名）、3年編入生（秋2名）を、学内他学科から転学科生（2年次1名、3年次2名）を新たに迎えた。
- ② 広報活動（SNS含む）
  - ・これまで学科が積極的に実施していなかった高校への出張講義を開始したことは評価できる。SNSによる情報発信は今後さらに強化の必要がある。

### 〈次年度への課題〉

- ① 入学定員充足と入試広報室との連携
  - ・充足率を高める（100%目標）。学生募集活動を強化する。特に日本人学生の確保を重点的に行う。そのためにデータの検証が必要である。
- ② 広報活動
  - ・出張講義を軸に、高校生を対象とした活発な広報活動を展開する。
  - ・オープンキャンパスでは、経営学のみでない「経営社会学科で学ぶこと」の特徴・魅力が十分伝わるような説明資料を準備する。
  - ・SNSについては情報の内容を充実化するとともに、情報更新の頻度を高める。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① 退学者対策
  - ・1・2年生はチューター教員が基礎演習Ⅰ～Ⅳの授業において、3・4年生はゼミ（演習）担当教員が演習Ⅰ～Ⅳの授業を軸に、週1回以上学生と必ず関わる機会を設け、学生の状態を細かに確認している。
  - ・毎月の学科会議で気になる学生についての情報を全体共有している。
- ② 資格・免許・検定等
  - A) 「KIUグローバル人材養成留学生就職促進教育プログラム」（文部科学省留学生就職促進教育プログラム、2023年度に認定）が今年度より本格的にスタートした。初年度にあたる今年度、6名の外国人留学生がこのプログラムを履修中である。
  - B) 「社会調査士」本年度新たに10名の資格取得者を輩出した。資格認定科目である社会調査実習の授業では今年度WEBアンケートを試行的に導入した。
- ③ 3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証
  - 学科別FD研修会を2024年11月20日に実施し、学内で収集・蓄積している教学IRデータをもとに、本学科学生の学びの特徴や在学中の成長度について客観的に把握した。

## 〈今年度の結果についての点検・評価〉

### ①退学者対策

前年度（2023年度）退学者が9名、退学率3.5%に上ったが、今年度は退学者5名、退学率2.2%と改善された。特に留学生の専門学校への進路変更による退学者が大幅に減少した。

### ②資格・免許・検定等

A) プログラムの新規履修者募集の説明会を4月、10月の学期初めの学科別オリエンテーション等で実施した。結果、来年度から新たに2名の留学生から申し込みがあった。

B) 社会調査士：資格取得を目指す2年生が増加している。また社会調査実習でWEBアンケートを試行的に導入したことで、学生がWEB調査のスキルを獲得することができた。

### ③3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証

学科別FD研修会で教学IRデータの集計分析の結果をもとに、本学科学生の学びの様子や特徴について客観的に把握できた。また、教学IRデータを使って、学科のアドミッション・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーの到達度の検証をおこない、本学科の教育の特長（強み）と今後の課題の両方を検証することができた。

## 〈次年度への課題〉

### ①退学者対策

- ・新入生の留学生については特に留学生別科担当教員と入学前に情報共有を行う。
- ・学期移行の担当教員（ゼミ・チューター）変更の際、教員間で十分引継ぎを行う。

### ②資格・免許・検定等

A) 今後も履修学生に、所定の授業科目を履修するように指導する。並行して、修了証明書取得の要件である日本語能力検定N1に合格できるようエンカレッジしていく。

B) 社会調査士資格：特に入学生には資格取得のメリットを含めたガイダンスを丁寧に行う。社会調査実習履修者について、学生の調査実施スキルやそのための前提知識を高めるような授業を提供する必要がある。

### ③3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証

学科別FD研修会で利用した教学IRデータの集計分析の結果は、「集団」レベルの学生の特徴（集団特性）の把握にとどまった。集団特性だけでなく、学生一人ひとりの成長も調べる必要がある。今後は、入学から卒業までの学生の成長度を調べる必要がある。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

教員がそれぞれ計画的に研究活動に取り組んだ。

- ① 学術論文：8編、②雑誌投稿等：1編、③講演・口頭発表：9件
- ④ 著書・作品等：1編
- ⑤ 外的資金：2件（うち科学研究費：継続1件）、⑥その他：2件

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

・教員がそれぞれの専門知識・技術をもとに研究を実施してはいるが、担当授業数（学部・研究科）の多さ等、教学の多忙さも相まって研究蓄積が十分とはいえない。

- ・日頃の教育実践を研究論文として発表している論文が複数ある。
- ・今年度、学科から科研費の新規申請がなかった（継続1件のみ）。

### 〈次年度への課題〉

- ・学内外、学内他学部他学科の研究者との積極的な学術交流を図る。
- ・地域連携・地域貢献活動における取り組みを、実践としてのみならず、研究の枠組みから検討する。
- ・外的資金を獲得する。
- ・科研費の新規申請数を増やす。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① 学生主体の地域連携・地域貢献活動
  - ・内閣府主催の「防災教育チャレンジプラン」に学生プロジェクトが参加した。
  - ・高梁みらい共創チャレンジ事業に採択され「ワールドフェスティバル：1Day Asia in たかはし」を学生が企画実施した。
- ② 教員の地域連携・地域貢献活動
  - ・岡山県立高梁高等学校と連携して、同校におけるデジタル人材の育成と「総合的な探究の時間」の内容の充実に向けた教職員対象研修会を実施した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ① 学生主体の地域連携・地域貢献活動
  - ・「防災教育チャレンジプラン」で学生が受賞した。
  - ・学科学生が春秋ともに「方谷賞」を受賞した。
- ② 教員の地域連携・地域貢献活動
  - ・各教員の地域との連携が進み、学生が地域で挑戦しやすい環境づくりができた。
  - ・教員の日頃の地域連携や地域貢献活動をもとに、学科の専門科目の授業に実務家を招聘するなどの授業を展開することができた。

### 〈次年度への課題〉

- ① 学生主体の地域連携・地域貢献活動
  - ・ゼミ、サークルなど、学科学生が主体となった学生の地域貢献に関わるプロジェクトを教員がサポートする。
- ② 教員の地域連携・地域貢献活動
  - ・教員間の連携を強化し、高梁市を中心とした地域貢献活動をさらに展開する。
  - ・研究・地域貢献の内容とともに、学生が日々学ぶ授業内容との接続性をより高める。

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① 9か国の学生がともに学びあう国際交流活動を1、2年生の必修授業で実施した。
  - ・基礎演習ⅠⅡ（1年生）：「シャルム高梁応援」「高梁散策（街歩き）」等
  - ・基礎演習ⅢⅣ（2年生）：「チームビルディング」「グループ交流会」等
- ② 日本人学生を対象とした留学志向の促進
  - ・キャリアデザインⅠ（日本人学生クラス）の授業内などで、海外留学経験を有する上級生の体験談を聴講する機会を設けた。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ① 国際交流活動に関連する学内外の活動「シャルム高梁応援」「高梁散策」「チームビルディング活動」などは学生の評判が高かった。
- ② 留学を志す日本人学生（1年生など）が徐々に出てきている。
- ③ 3年生で海外渡航し、現地でインターンシップを経験する学生も出てきている。

### 〈次年度への課題〉

- ① 国際交流活動の充実化として、日本人学生と留学生がともに学びあう機会・交流プログラムをさらに促進する。これらは結果的に留学生の退学防止の一つになりうる。
- ② 2026年度より開始予定の学科新カリキュラムで、短期海外研修・留学のプログラム化、単位化について整備をおこなう（現在：学部検討段階）。
- ③ 国内外でのインターンシップの拡充を目指す。

# スポーツ社会学科の自己点検・自己評価

学科長

山口 英峰

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

#### ① 入学定員充足

- ・ 入学予定者数:59名(定員:80名), 入学定員充足率:73.8%(昨年度:61.3%)
- ・ 5年先(2年目)を見据えた取り組みを学科教員で再確認し, その結果を入試広報室と共有した。

#### ② 情報発信活動を継続して実施する

- ・ 学科Instagram, Facebookの充実:241記事(昨年度365記事)  
主としてSNSを活用し, 教育研究活動, 学生の大学生活について情報を発信した。  
各教員が研究室単位においても積極的に最新知見, 研究室学生の様子を更新した。

#### ③ 広報活動を強化する

- ・ 高校訪問等:153校(昨年度:103校)  
岡山県:23校, 中国地方:30校, 四国地方:30校, 九州地方:24校  
近畿地方:41校, その他:5校
- ・ 高校進路ガイダンス, 模擬授業等:7校(昨年度:10校)

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

#### ① 入学定員, 入試広報室との連携

昨年度と比較して入学者数は増加したものの, 目標である定員充足は未達成となった。  
これまで以上に入試広報室と連携して, 継続的に検討していく必要がある。女子野球部が創部され, 学科の新しい取組結果として6名(他学科2名)が入学者する(予定)ことは評価できる。

#### ② 情報発信活動

情報発信はSNS担当教員を中心として継続的にInstagramを更新したことは評価できる。

#### ③ 広報活動

高校進路ガイダンス, 模擬授業については, 依頼があった全ての広報活動に参加できたことは評価ができる。また, 部活動における高校訪問時には可能な限り体育教官室に加えて進路指導部に積極的に出向き, 本学科以外の学科についても紹介することができた。

### 〈次年度への課題〉

#### ① 入学定員, 入試広報室との連携

引き続き入試広報室と連携を強化する。2026年度のカリキュラム変更に伴う本学科の新しい強みや取り組みに関して情報共有する。

#### ② 情報発信活動

引き続き情報発信を積極的に実施する。

#### ③ 広報活動

オープンキャンパス(OC)に来校した生徒の本学科への受験率が高いことからOCの更なる充実を図ると共に, OCに来てもらえる工夫が必要である。スポーツに関わる学科特性として, 高校進路指導担当者に加えて保健体育教官室への情報提供が必須である。保健体育教官室宛の郵送物配布を開始して3年を終了することから, その効果について入試広報室と検討する。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① 各種資格試験, 教員採用試験における合格率向上に向けた支援体制システムの構築

- ・集団および個別指導，模擬試験(教員作成・過去問題)の実施
- ・全学年の教職希望者に対して月1回の全体指導会(情報交換・モチベーション向上等)開催
- ・動画を活用した実技試験対策の実施
- ・グループLINEを活用し，資格に関する情報の提供
- ・成績不振者に対する個別指導の実施

## ② 退学者対策

- ・少数のチューター制度を活用し，定期的な個別面談を実施
- ・2回連続欠席および全体で5回欠席学生の把握と対応，GPAが低い学生に関しては，個人面談に加えて保護者にも早い段階で連絡した。
- ・演習科目やイベントを中心に「縦・横・全体のつながり」を強化した。

## ③ その他

- ・学科の新カリキュラム導入(2026年度)について，学科全体のコンセプトを含めた見直し，コース制度の有無について議論を重ねた。
- ・入学前教育において，kiuiドリルに加えて学科独自の教材を推薦教材(有料)としての活用を試みた。
- ・スポーツマネジメント教育の強化:吉備国際大学Charme岡山高梁と本学科の連携により，Charmeの運営，体力測定，コンディショニング，トレーニング指導，マネジメント業務補助等でスタッフ参加して，実務経験を積めるプログラムを展開できるかを検討した。

## 〈今年度の結果についての点検・評価〉

### ① 各種資格試験，教員採用試験における合格率向上に向けた支援体制システムの構築

- ・中高教員採用試験(保健体育):現役合格者の輩出，一次試験合格率目標50%  
(採用試験合格者:0名，私学高校合格:1名，市立高校合格者1名，一次試験合格率目標0%(0/3名))
- ・健康運動実践指導者資格試験合格率目標:100%(全国平均:67.2%，本学結果:20%(5名))
- ・健康運動指導士合格率目標:全国平均以上(養成校合格率:75.7%，本学結果:50%(2名))
- ・日本スポーツ協会認定資格試験合格率目標:100%(結果:受験者0名)
- ・日本サッカー協会公認C級コーチライセンス合格率目標:100%(結果:100%(11名))

\*目標達成した資格，未達成の資格があった。教職免許状を取得することを目的にする学生，教員になることを目標にする学生がおり，モチベーションの違いが確認された。  
月に1回の全体指導会の実施により，学生にも気持ちの変化がみられたように感じる。

### ② 退学者対策

- ・退学者数:2名(退学率:0.9%)  
今年度は2名の退学者が確認されており，目標は未達成であった。1名については入学式直後から大学に来れなくなった学生であった。もう1名については，生活習慣の乱れにより単位が取得できず，そのことによる修学意欲の低下が原因であった。修学意欲の低下については，退学を回避できる可能性もあることから，今まで以上に学生に寄り添った指導が必要であると思われる。

### ③ その他

- ・学科の新カリキュラム導入(2026年度)について，学科全体のコンセプトを含めた見直し，コース制度の有無について検討した。コース制度を廃止することを学科教員で共有した。
- ・スポーツマネジメント教育の強化:Charmeと本学科の連携により，体力測定補助でスタッフ参加はしたものの，実務経験を積めるプログラムの展開には至っていない。

## 〈次年度への課題〉

### ① 各種資格試験，教員採用試験における合格率向上に向けた支援体制システムの構築

- ・教職を除く資格については受験者数が激減している。各種資格の説明に加えて，各種資格と就職との関連性についても具体的な事例を出しながらの説明を実施する。
- ・教職に関しては，目的によってモチベーションが異なることから，各目標に対応した指導方法が必要である。今年度より全学年の教職希望者に対して月1回の全体指導会(情報交換・モチベーション向上等)を実施した。この会において個別指導も実施した。  
次年度はモチベーション向上に繋がる教員という職業の魅力についても伝えていく。

## ② 退学者対策

教務課との連携に加えて、学年を超えたつながりがもてるような取り組みが必要である。  
GPAが低い学生、欠席が多い学生に関しては今まで以上に早い段階での面談、個別指導が必要となる。本学科での学びが将来の職業にどのように展開していくかを1年次から具体的な事例をだしながら進めていく。例年実施しているチューター、学年、部活動の枠を超えたイベントを学生主体で実施できる体制を整える。

## ③ その他

吉備国際大学Charme岡山高梁と本学科の連携により、Charmeの運営、トレーニング指導、マネジメント業務補助等でスタッフ参加して、実務経験を積めるプログラムを展開できるかについて引き続き検討する。本プログラムは学科独自の特徴となり、他大学との差別化を図れるものとする。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・受託研究による健康教室、体力測定の実践
- ・若手教員を中心とした研究に関する勉強会の実施
- ・継続的に研究が実施できる時間の確保、環境整備の取組
- 研究費 科研費採択：1件(応募2件)、継続：2件、受託研究：1件
- その他 研究論文：1編、口頭発表：11回、共同研究：6件

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・研究活動全般について  
科研費は1件採択され、各教員の継続した申請ならびに研究成果が形になりつつある。学科内共同研究も継続しており、口頭発表できたことは評価できる。研究を通して知的探究心を学生と共有し、研究成果を学生教育に還元できたものとする。若手教員を中心とした勉強会実施は、目標達成に向けての努力として評価できる。研究に向き合う時間の確保は十分ではない。他業務の効率化等、更なる検討が必要である。
- ・研究倫理について  
教員だけではなく、大学院生、学部生に対しても徹底できた

### 〈次年度への課題〉

- ・若手教員を中心とした勉強会を次年度も継続して実施する。
- ・引き続き、国内外に多くの知見を発信できるよう、継続的に研究を行える時間の確保、環境整備に取り組む。科研費等の資金獲得者の申請書記載内容を共有し、申請書のブラッシュアップが行える環境を整える。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ① 地域貢献(連携:高梁市健康づくり課)  
以下、健康教室・体力測定を実施(\*参加者、学生・教員スタッフは延人数表記)
  - ・高梁ヘルスアップ講座 開催回数：11回、参加者：150名、スタッフ：52名
  - ・高梁健幸フィットネス講座 開催回数：22回、参加者：150名、スタッフ：140名
  - ・高梁シェイプアップ教室 開催回数：9回、参加者：35名、スタッフ：63名
  - ・出張体力測定 開催回数：24回、参加者：289名、スタッフ：63名
  - ・社会科学部・高梁川流域連携中枢都市圏事業合同シンポジウムの開催
- ② 地域貢献(連携:高梁市教育委員会)
  - ・地域運動部活動推進事業として中学生における部活動の練習計画、指導補助を実践

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・2016年度より、高梁市民を対象とした健康教室(4講座)をフィットネススタジオ、フィットネスラボにて展開してきた。トラブルもなく実践できたことは評価できる。高梁市民を対象とした運動指導の実践は、学生の現場経験の場としての教育効果が高いだけでなく、地域の方とのコミュニケーションを深めることができる。

今年度、健康教室に様々な学年の学生が積極的に参加してくれたことは評価できる。昨年度の課題であった市民を対象とした成果報告会を経営社会学科と協力し、合同で学部シンポジウムとして開催した。本学科で実施している健康寿命延伸事業の取組、成果、課題について、市民へ情報提供できたと思われる。

- ・高梁市内の中学校では、単一の学校では大会などに参加できない競技が存在している。地域運動部活動推進事業として中学生における部活動の練習計画、指導補助を実践できたことは評価できる。

#### 〈次年度への課題〉

- ・次年度も引き続き健康づくり課と連携し、高梁市民の健康寿命延伸に貢献する。次年度は子育て世代の女性を対象とした健康教室を開催予定である。
- ・高梁市内の中学校では、単一の学校では大会などに参加できない競技が存在している。継続的に中学部活動を支援する仕組みの構築について行政と連携し、引き続き検討する。

### 国際化の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・在校生1名が短期留学していたことから、留学成果報告会を実施した。
- ・令和7年度から始まる新カリキュラムにおいて「グローバルスポーツ論・演習(仮)」が開講予定である。留学先の担当者と打ち合わせを数回実施した。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・1,2年生を対象とした合同演習(基礎演習Ⅱ、演習Ⅱ講義)において、短期留学した学生による留学成果報告会を実施した。リアクションペーパーの結果から、留学を希望している学生がいること、留学に興味をもったという回答もあり短期留学を促進できたと考えられ、一定の成果が得られたものとする。
- ・留学先担当者と留学プログラムの内容について検討し、具体的な内容を詰めれた点については一定の評価ができる。

#### 〈次年度への課題〉

留学に関しては語学留学、専門性を高めるための留学、アスリートによる留学等、多岐にわたる。特に専門性を高めるための短期留学に関しては、講義として2026年度より開始予定である。引き続き短期留学先との連携を深め、円滑に講義が進めれるよう準備する。

短期留学は、本学科の強みになると考える。オープンキャンパス等においても周知する。

# 看護学部 看護学科の自己点検・自己評価

学部長・学科長

竹崎 和子

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・学校訪問：学部学科紹介（総社南高校・矢掛高校・興譲館高校・井原高校  
新見高校・共生高校・方谷学舎高校・高梁高校・城南高校）
  - ・大学見学：学部学科紹介（倉敷高校・吉備高原学園高校）
  - ・高校ガイダンス：模擬授業（広島県立福山明王高校）進路説明会（創志学園高校）
  - ・オープンキャンパス：「高梁市と吉備国際大学があなたの学生生活を支えます！」をキャッチフレーズとして学科紹介、模擬授業、演習、在校生との交流
  - ・学科作成の動画紹介（在校生キャンパス紹介、入学試験対策等）
  - ・看護学科のブログを活用した情報発信
- 複数の資格取得可能であり、多様なカリキュラムがある特徴を紹介して、学生・保護者への訴求に努めた。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・2024年度入学者 学部定員 60名 入学者24名 充足率 40%（昨年度38%）  
編入生定員 10名 入学者10名 充足率100%（昨年度100%）

学部生充足率80%は未達成 編入学充足率100%は達成できた。

- ・看護学科ブログ24件：授業、演習、オープンキャンパス、授業報告会等に関するタイムリーな情報を発信できた。
- ・動画作成1件：編入生の入学動機、大学生活等の内容の動画を作成し、オープンキャンパスで活用した。

### 〈次年度への課題〉

- ・教員と学生が連携を図り看護学部の魅力を発信して、入学生確保に繋げる。
- ・入学定員充足率 学部80% 編入学100%を達成する。
- ・入試広報室、教務課と連携して高校ガイダンスを計画的に実施する。
- ・高梁市、高梁市医師会と連携した高校訪問を継続する。
- ・オープンキャンパス内容を検討し、高校生、保護者に対し看護学部看護学科の魅力、高梁市奨学金制度等を効果的に発信する。
- ・教育と学生が連携し看護学科ブログ、インスタグラム等を作成し、情報発信を充実する。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・国家試験全員合格（看護師・保健師）を目指して看護学科教員が一丸となり、ゼミ単位指導、集中講義、模試等を計画的に実施した。
- ・キャリアサポートセンターと連携し就職試験対策を行い就職率100%を目指した。
- ・退学者0を目指し、チューターを中心に学生、保護者と連携を図り修学を支援した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・国家試験対策として模試結果を基に調べ学習・ペア学習方法による指導を実施した。

看護師：新卒100%（昨年87.9%） 既卒42.9%（昨年37.5%）

新卒+既卒 88.2%（昨年78%）

全国平均 新卒95.9% 新卒+既卒 90.1%

保健師：新卒89.5%（昨年100%） 既卒 該当者なし

全国平均 新卒96.4% 新卒+既卒 94%

- ・キャリアサポートセンターと連携し、就職率97.3 %である。〈3月10日時点〉
- ・成績不振学生のGPA1.5以下の学生1名に対し、保護者と連携し修学継続を支援した。
- ・退学者3名（昨年度3名） 進路変更1名、心身不調1名  
懲戒1名：実習中の不適切な言動による処分

除籍者1名（昨年度0名）

休学者1名 理由（心身の不調）2025年4月より転学科（経営社会学科）予定

#### 〈次年度への課題〉

- ・国家試験（看護師、保健師）全員合格100%を達成する。
- ・1年次から計画的に国試対策として、ペア学習を導入する。
- ・講義、アクティブラーニング等の学習方法を活用し、学生の学習ニーズに応じた教育を実践する。
- ・授業以外の学修時間を確保するための予習・復習を工夫する。
- ・授業評価を参考にして、授業内容を検討し教育の質の向上に繋げる。
- ・GPA評価を参考に、成績不振者に対してチュータを中心に早期学生指導を強化する。
- ・退学者、休学者0名を目指して、チュータを中心に全教員が連携し、個々の学生に応じた学生指導を強化していく。
- ・転学科について学生に説明し必要時には保護者と連携し支援を行う。
- ・健康管理センターと連携し、学生の身体面、メンタル面の支援を行う。

### 研究推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・科研費採択 継続1件 新規1件  
論文6件（昨年度10件）、口頭発表12件（昨年度20件）、雑誌投稿2件（昨年度2件）  
著書1件（昨年度0件）
- ・各教員が計画的に研究活動に取り組む。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・教員が研究活動に取り組んだが、昨年度より総件数は減少した。

#### 〈次年度への課題〉

- ・大学教員としての自覚を高め、教員間での学術交流を深め研究活動を推進する。
- ・科研費の獲得に向けて積極的に挑戦していく。

### 地域連携・地域貢献の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・岡山県看護協会、高梁市医師会と連携し、委員会活動、研修講師等を推進する。
- ・出前講座（高等学校）、まちなかゼミナールへの参加を継続する。
- ・高梁地域と連携し、認知症サポーター養成講座、高梁市在宅医療、介護推進、看護師確保対策活動に参加する。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・岡山県看護協会高梁支部支部長、高梁地域内病院の看護研究指導、研修会講師等各教員が専門性を活かし、業務に支障のない範囲で地域貢献活動に取り組んだ。
- ・出前講座2件、まちなかゼミナール2件の参加
- ・学生が老年看護学授業を通じ認知症サポーター養成講座を受講し資格取得を達成した。
- ・保健師養成課程の学生が、地域住民を対象に健康教育を実施し地域活動に貢献した。

#### 〈次年度への課題〉

- ・地域連携・地域貢献活動に継続して取り組む。
- ・認知症サポーター養成講座を継続し、高齢化が進む高梁地域との連携を強化する。
- ・高梁市役所、備北保健所と連携し、高梁地域の子育て支援、健康教育活動等の活動を継続する。

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・「グローバルスタディ入門」授業履修により、国際的な視点での学びを深める。
- ・短期留学が可能な学内体制を整備し、学生支援に繋げる。
- ・学内での国際交流行事への参加を推進する。
- ・「おしゃべりカフェ」への参加による交流を推進する。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

「グローバルスタディ入門」履修により、講義、GW、プレゼンテーションを通じて、国際的な視点による知識を深めることが出来た。

### 〈次年度への課題〉

- ・「グローバルスタディ入門」履修により、国際的な視点での学びの意義を深める。
- ・学生の希望に応じた、短期留学体制を整備する。
- ・学内交流行事への参加を推進する。

# 理学療法学科の自己点検・自己評価

学科長

原田 和宏

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

#### 【教育活動】

- ・「豊かな人間性」「多様性を増す社会で活躍する力」を育む教育を継続した。
- ・3年生に対する臨床実習技能試験（OSCE）を春期と秋期に行う体制を確率した。
- ・2年生に対する国家資格基礎力（基礎3科目）の向上を図った。

#### 【実習教育】

- ・理学療法学科臨床実習委員会の対面開催に戻し、高梁キャンパスで実施した。

#### 【退学者対策】

- ・転学科を希望する学生に対して履修上の工夫（他学科科目等履修）を指導し、転学科後に目的達成がスムーズになるようにした。
- ・不本意入学の学生を早期に発見し、本人と保護者対応を図った。
- ・総合臨床実習で体調不良による実習中止が1名発生したが、医師による治療を提案して回復を促し、実習再開につなげることができた。
- ・精神的な不調を来した学生にほっとルームでの面談を勧め、早期に対応した。

#### 【資格取得に向けた教育】

- ・国家試験対策を1年生～4年生ですべて実施した。
- ・作業療法学科との連携を推進し、国家試験対策の情報を密に交換することができた。
- ・国試対策では、4年生秋期で月曜日から金曜日の1限から4限、2つの部屋を活用してグループ学習が行えるようにし、学生が勉強に専念できるよう運営した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

#### 【教育活動】

- ・学位授与率72.0%（前年度83.7%）が低下し、修業年限内学位授与率78.3%（前年度78.6%）が横ばいにとどまっていることは課題である。
- ・臨床実習委員会を作業療法学科と連携して対面で再開し、高梁Cで実施できたことは評価できる。

#### 【退学者対策】

- ・退学者は3名（1年生2名、5年目の留年生1名）であった。理由は1年生は進路変更で、4年次では成績不振後の進路変更であった。なお、3年生に除籍が1名発生した。
- ・留年生における退学が1名にとどまったことは評価できる。
- ・転学科は1年生2名、2年生4名、転科先は経営社会が4名、スポ社が2名であった。理由の多くは、理学療法士を目指す気持ちが入学時から明確ではなく、入学後に経営学やスポーツ科学への関心が徐々に高まったためであった。
- ・総合臨床実習で体調不良による実習中止が1名発生したが、退学には至らず履修を継続できたことは評価できる。

#### 【資格取得に向けた教育】

- ・第60回理学療法士国家試験の合格率は新卒100%、既卒33.3%、合計77.8%であった（全国平均：新卒95.2%、合計89.6%）。

### 〈次年度への課題〉

#### 【教育活動】

- ・国家試験を確実に突破できる力を身につけさせるために、非常勤講師とも連携しながら、基礎3科目の専門学力を教育体制を強化する。
- ・他大学との差別化のために、これからの多様性を増す社会や医療現場での問題解決能力を身につけるための授業内容を増やす。

#### 【退学者対策】

- ・目標は、年間退学者3名以内とする。
- ・学生の変化を早期にキャッチして共有するため、教員間での情報交換体制の充実を図る。
- ・臨床能力や国家試験の基礎知識の定着を推進し、学生の自信をより深めるようにする。

### 【資格取得に向けた教育】

- ・理学療法士国家試験合格率100%の継続をめざす。
- ・病院や社会で活躍する理学療法士の姿を多く示し、在学の目的意識を高め、キャリア形成力を向上させる教育を充実する。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

科研費：5件（代表3件，分担2件） 厚生労働科学研究費補助金：1件（分担1件）  
他の助成金等：4件（企業との共同研究2件、岡山県助成金1件、学内助成金1件、寄付金1件）  
論文：14編（査読あり12編）  
口頭発表：9件  
外部講演・講義：1件  
著書：1件

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・教員が研究活動に取り組んだが、論文化や発表については昨年度より総件数は減少した。
- ・教員各自で自覚をもって継続的に研究活動に取り組んでいる。
- ・企業との共同研究契約が2件、地方自治体の助成金が1件、地域貢献の学内助成金が1件で、社会実装や地域貢献をもたらす成果であった。

### 〈次年度への課題〉

- ・引き続き教員各自で研究活動に取り組むとともに、学内外の研究者と積極的な学術交流を図る。
- ・研究活性化のために、科研費等の応募を増やす。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・公開講座（まちなかゼミナール）で2名の教員が講義
- ・高梁市ミニディへ講師講師派遣（2回）
- ・インターナショナルフェスタにおける中学生との交流で2年生が基礎演習授業で参画した。
- ・1年生授業で地域住民の生活課題を共有するため、住民1名を講師として招聘した。
- ・臨床実習指導者講習会の世話人で教員2名が参画。次年度以降の講習会講師招聘に備える。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・各教員の専門性を活かした地域貢献活動が行われた。
- ・演習授業を通して地域課題を分析できる人材の育成に取り組むことができた。
- ・研究活動の内、地方自治体の助成金が1件、地域貢献の学内助成金が1件採択され、事業が行われたことは、新たな取り組みとして評価できる。

### 〈次年度への課題〉

- ・地域連携・地域貢献を推進するために、今年度の取り組みを継続する。
- ・授業を通して、地域の人々のウェルビーイング向上に関わる身体的、心理的、および社会的な課題を発見し分析する人材育成の充実を図る。
- ・異業種協働のための基礎力を身につけるためのキャリア教育を推進する。

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・1年生は、「グローバルスタディーズ入門」科目で国際的な視点を学んだ。
- ・2年生と3年生に「実践医療英語」を開講することができ、学生の過半数が履修した。
- ・3年生は、「国際貢献・地域理学療法学」にてウクライナの戦争負傷者を支援した経験を持つ理学療法士を招聘し、「海外における理学療法と国際貢献」を学んだ。

**〈今年度の結果についての点検・評価〉**

- ・ 2年生で国際化教育を行う機会が少ないことが課題である。

**〈次年度への課題〉**

- ・ 英語でコミュニケーションを図れる機会を増やす必要がある。
- ・ 「おしゃべりカフェ」への参加による交流を推進する。

# 作業療法学科の自己点検・自己評価

学科長

京極 真

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

#### 【3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証】

- ・3つのポリシー（ディプロマ・カリキュラム・アドミッションポリシー）に基づき、学科教員が一丸となり、教育課程の実現に向けて計画的かつ着実に取り組んだ。
- ・授業内容や指導方法について、必要に応じた教員間でのサポート体制を構築し、授業の質向上を図った。
- ・学生から寄せられた意見や授業評価アンケートを参考にしながら、教育内容の改善を継続的に行った。

#### 【退学者対策】

- ・年間退学者数を2名以内に抑える目標を設定し、学生一人ひとりに寄り添った指導を行った。
- ・チューターを中心に、学生の視点を重視した丁寧な学修・生活指導を実施した。
- ・退学や転学科を希望する学生には、チューターおよび学科長が面談を行い、問題解決に向けた具体的な助言を行った。
- ・保護者とも早期に連携し、学生本人・保護者・教員間で協力体制を構築することで、早期解決に努めた。

#### 【資格・免許・検定等】

- ・国家試験対策は1年次から計画的に実施し、特に4年次では秋学期中に月曜日から金曜日まで1限から5限まで集中講座を行う体制を整えた。
- ・学生個々の進捗状況や苦手分野を把握し、それぞれに応じた指導を実施した。
- ・必要な資格取得支援については、教員間で情報共有しながら適切なフォローアップを行った。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

#### 【3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証】

- ・3つのポリシーに基づく教育課程は着実に実施され、その成果が確認された。

#### 【退学者対策】

- ・退学者は1名であった。理由は「学業不振」であった。
- ・転学科者は2名であり、転学科先は経営社会学科であった。理由としては「学習ニーズとの相違」および「学業不振」が挙げられた。
- ・学生間の縦のつながり強化を目的として、新入生歓迎会や卒業生お別れ会などのイベントを3年生が主体となって企画・運営し、新入生が安心して居場所を見つけられる環境作りに貢献した。

#### 【資格・免許・検定等】

- ・作業療法士国家試験合格率は新卒100%、既卒50%、合計90.9%（全国平均：新卒92.5%、合計85.8%）という結果であった。
- ・資格取得支援では、一部学生について保護者との連携が必要となり、その際には学習状況や心身状態について保護者と情報共有するための面談や連絡調整を行った。

### 〈次年度への課題〉

#### 【3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証】

- ・引き続き3つのポリシーに則った教育課程を着実に実施し、学生一人ひとりが目標達成できるよう支援する。
- ・講義形式だけでなくアクティブラーニングや実習など多様な教育手法を用い、学生の主体性や能力向上につなげる。

#### 【退学者対策】

- ・目標は、年間退学者2名以内を目指す。
- ・チューターは、主担当が学修・生活指導を中心、副チューター1がカリキュラム担当、副チューター2が他学年との連携担当を設け、学生指導が必要な指導について強化する。

・転学科ガイダンスについては、早期段階で学校全体の方針や情報を把握し、それらを迅速かつ適切に学生へ伝える仕組みづくりを進める。

【資格・免許・検定等】

- ・作業療法士国家試験合格率100%達成を目指す。
- ・1年次から4年次まで一貫して国家試験対策プログラムを計画的かつ体系的に実施する。
- ・学生個々の理解度や進捗状況に応じた個別指導や補講体制も引き続き強化する。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

科研費5件（代表2件、分担3件）  
査読あり論文14編（単著・第1著者1編、共著13編）  
査読なし論文4編（単著・第1著者3編、共著1編）  
著書4冊（単著1冊、共編著0冊、分担執筆3冊、翻訳0冊）  
講演・口頭発表等22件

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・教員各自が研究活動に取り組み、おおむね良好な結果であった。
- ・一部教員においては研究成果が限定的であったが、それぞれの専門性や研究環境を踏まえた上で改善の余地があると評価された。

### 〈次年度への課題〉

- ・教員各自が引き続き研究活動に取り組むとともに、多様な学術交流を通じて研究成果の質と量を向上させる。
- ・科研費への応募をさらに促進し、その採択率向上を目指すための支援体制を強化する。
- ・若手教員や研究実績が限定的な教員へのサポートを充実させることで、それぞれが持続的に成果を挙げられる環境を整備する。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・園芸療法：特別養護老人ホームグリーンヒル順正にて、園芸療法の実践を行った。12月には、園芸療法論を履修している1年生の有志とともに、園芸療法の実践も行った。基礎作業学実習において、2年生が毎月2、3回、施設へ訪問し、高齢者と作業活動を通じた交流を行った。「その人らしい作業」を担当高齢者に対して実践した。
- ・ワークシェアリング就労支援プロジェクト：月に1～2回の活動を、大学内の教職員の手が回りにくい業務をシェアすることに充て、地域在住の精神障害者に就労経験の提供と適正探索の支援を行った。本学のSDGsの学習として利用者のプロジェクト参加の経験についてや社会参加についての講演に協力した。
- ・高梁市介護予防事業：高梁市より依頼のあった3地区を対象に介護予防に関する講演及び実演を開催した。高梁市の介護予防事業の成果の検討会議に参加し、令和7年度の地域連携の基礎となる情報収集及び調査を実施した。
- ・認知症サポーター養成講座：人間科学部の1年生を対象に講義協力として課題解決演習への協力として講座を開講した。高梁市からの要望を受け、養成講座実施に関する啓蒙を含めた認知症啓蒙展示を2号館ラーニングコモンズの協力にて開催した。
- ・吉備国際大学主催の講演会「まちなかゼミナール」にて、7月と12月に高梁市内で講演会を実施した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・園芸療法：園芸療法ゼミナール3年生3名が、年2回の園芸療法（うち1回は学生企画）に参加した。ガーデンセラピーと作業療法の視点からグリーンヒル農園の課題と整備の提案をおこなった。基礎作業学実習では、2年生15名が、担当高齢者と6回の活動を行い、1人1人の利用者へ異なる「その人らしい作業」を提供することができた。
- 人間科学部において、一般社団法人全国大学実務教育協会の園芸療法士の認定校として承認され、講義がスタートした。学生の定期的な訪問活動は、利用者の楽しみとなった。これは、施設が重視している「1人1人へ丁寧な対応」について、学生の関わることで貢献するものとなった。

- ・ワークシェアリング就労支援プロジェクト：月に1～2回の活動維持が、地域在住の精神障害者の精神科病院の再入院の阻止に貢献できた。地域の作業所から大学の貢献に対し幾度も感謝の意を伝えられており、昨年度と比較し活動回数は減ったが、プロジェクトの活動維持が成果として評価されている。
- ・高梁市介護予防事業：参加者の調査から、取組に対する難易度や内容の満足度が高い結果であったことが分かった。また、健康活動に対する動機づけの調査などから、期待する支援の特徴を地区別に簡易的に把握することができた。
- ・認知症サポーター養成講座：社会課題の解決を検討し学習する課題解決演習の講義に連動させる仕組みにより、認知症サポーター養成講座の受講生の増加と誰一人取り残さない防災計画を主題とした学生教育に寄与した。ラーニングコモンズを活用した働き世代に向けた認知症啓蒙活動（10月1か月間のブース設置）では簡易的ではあるが感想を集約し、地域包括ケアセンターとの取組連携を強化することができた。

#### 〈次年度への課題〉

- ・園芸療法：現在の活動継続に加え、園芸療法士を養成するために、グリーンヒル順正との協力体制を強化する。令和7年度春学期から始まる園芸療法実習の科目において、数回の施設訪問を実施し、利用者様の生活の質の向上と施設のサービス向上に貢献できるように努める。
- ・ワークシェアリング就労支援プロジェクト：地域社会への貢献の持続と、地域連携の形態について選択肢を模索をしていく。利用者の講義協力を含めた本学の取組が高梁市の障害者福祉計画（精神障害、発達障害）に対しどのように貢献されるのか検討したい。
- ・高梁市介護予防事業：令和6年度の結果を踏まえ、高梁市在住の虚弱高齢者に対する健康支援のあり方（目的・目標設置や方法等）を協議する予定である。
- ・認知症サポーター養成講座：令和6年度の取り組みを継続しつつ、地域包括ケアセンターとの連携のもと、内容の洗練化や取組の定着を目指す。

### 国際化の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・アメリカのフィンドレー大学から、リサ先生、川村先生をお迎えし、6月20日、21日の2日間かけて、学内や近隣の病院見学に行った。20日は、学内の案内と、特別養護老人ホームグリーンヒル順正、老人保健施設ゆうゆう村の見学を行った。そして、夕方から作業療法学生を対象にリサ先生がアメリカの作業療法についての講義を1時間程度してくださった。21日は創心会、ハートスイッチ岡山南高、岡山県精神科医療センターの見学を行った。その後、岡山キャンパスへ移動し、外国語学部の学生や教員と話し合いの場をもうけた。
- ・また日本に来られた際に宿泊予定の施設（JK寮、国際交流会館）をみていただくこともできた。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・今年度予定していた視察は、すべて実施することができた。リサ先生と日本の医療・福祉現場についての情報交換をすることができた。

#### 〈次年度への課題〉

- ・2025年度に予定されていた研修団派遣については、中止されることになった（リサ先生、学生課を通して連絡があり）。今後、2026年度に向けて、フィンドレー大学や学生課と連携しながら派遣調整を進めていけたらと考えている。

# 心理学部 心理学科の自己点検・自己評価

学科長

森井 康幸

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

\*退学防止策として、教員間での情報共有を密に行うとともに、問題を抱えた学生には早期に保護者と連絡を取り対応するようにした。

\*公認心理師基礎受験資格や教員免許状の取得希望者への細やかなサポートにより、希望者全員が資格取得できるよう取り組んだ。

\*心理学の基礎知識習得の動機づけを高めるために、一般社団法人 日本心理学諸学会連合の実施する「心理学検定」の受検を促し、卒業までに1級合格を目指して取り組むように働きかけた。

\*3つのポリシーに挙げられた事柄の実現に向けて、『基礎演習』の授業をはじめとして、多面的な取り組みを行っている。

\*基礎学力の修得は、学修の基盤であることから、「心理学の基礎・基本となる知識や考え方、研究方法をしっかりと修得し・・・」というカリキュラムポリシーの基本方針に対応して、特に2年次に集中している必修科目の重要性を繰り返し学生に伝達した。

\*学力の客観的な指標として、平均 GPAの目標値を 2.5 に設定して、全学年達成を目指した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

\*公認心理師受験基礎資格取得者は13名（卒業生の59%）であった。1名が資格取得に必要な科目単位を修得できず留年することになった。

\*就職率は100%であった。

\*大学院への進学者は6名（卒業生の27%）であった。

\*教員免許状取得者（中学校I種社会と高校I種公民）は3名であった。

\*退学者は3名、除籍者2名であり、両者を含めた退学率は5.0%であった。

\*令和5年度のGPAは、1年次生2.56、2年次生2.06、3年次生2.37、4年次生2.65、全体で2.41という結果であり、目標の2.5には達しなかった。

\*心理学検定の受検結果については、最終発表が4月末なので現時点では不明。

\*研究室等の移動のため、研究環境が整わず、卒論等の実験実施に影響があった。

### 〈次年度への課題〉

\*3つのポリシーを育むためにも、様々な場面、特に学習場面で学生一人ひとりの自己効力感を高めることで、学習意欲を高め、積極的な学習態度を涵養するとともに、学科全体の平均GPAを2.5以上に引き上げる。

\*心理学検定の受検への動機づけを高めるために、検定結果を加味した学修評価の導入を検討することも検討する。

\*ICTの活用を工夫・促進するとともに、個に応じた支援・教育をどこまで実践できるかが課題である。

\*退学者対策としては、大学に全く出てこない学生、連絡が取れない（返信等のない）学生、集団の中での行動が苦手な学生、対人関係づくりそのものが苦手な学生などへの対応が課題である。教員間の情報交換やホットルームとの連携等をより一層密にするとともに、保護者との連携強化が重要である。退学率は5%台を目指す。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

\*科研費3件（いずれも継続：代表1件、分担2件）

- \*その他の学外助成金3件（新規：代表2件、継続：分担1件）
- \*査読あり論文6（単著・第1著者2編、共著4編）
- \*査読なし論文5編（単著・第1著者4編、共著1編）
- \*解説・報告書等3編（単著3編）
- \*講演・口頭発表等24件

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- \*科研費の新規採択は0件であったが、申請そのものが少なかったことが問題である。
- \*論文数そのものは若干増加したが、学会での口頭発表は減少した。
- \*今年度は研究室等の移動のため、研究環境が整っていなかったことが影響した可能性がある。

#### 〈次年度への課題〉

- \*科研費申請を会議等の機会に強く促す。
- \*科研費のみならず、各種の公的、あるいは民間企業・団体などからの研究助成金の獲得に向けた活動を積極的に推進していくことは急務である。
- \*第3期中期目標・中期計画にある「研究推進」の項で掲げた目標「社会実装の推進」の実行計画『研究成果の地域社会への実装』の具現化に向けた取り組みを進めていく。

### 地域連携・地域貢献の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

\*例年どおり、学校ふれあい促進事業（高梁市教育委員会）特別支援教育推進事業（高梁市教育委員会）、教育相談（岡山県・高梁高校）、母子保健事業：乳幼児健診（高梁市・健康づくり課）、子どもの心とからだの総合相談（岡山県・備北保健所）、ペアレント・トレーニング講座（高梁市・NPO法人color）、学校における心理教育授業（倉敷市真備東中学）、少年院におけるコンサルテーションおよび保護者支援（法務省岡山少年院）、児童養護施設におけるアートセラピー体験（岡山聖園子供の家）、岡山いのちの電話相談（岡山いのちの電話協会）、思春期・ひきこもり相談（岡山県・備北保健所）、心の健康相談（岡山県・総社南高校）で地域連携・地域貢献活動を行った。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

\*例年どおり、高梁市教育委員会や保健所などとの連携で、教員の専門性を生かした活動が行われている。  
 \*学部生や大学院生の現場実習の機会となっているものもあり、本学科と地域づくりとの関係づくりに貢献している。  
 \*防災合宿訓練については、看護学科教員、真庭消防署とも連携しながら行ったが、地域住民の参加は少なかった。

#### 〈次年度への課題〉

- \*学生の自主的な地域貢献活動の取り組みの活性化も望まれる。
- \*学生および地域住民を対象とした防災・減災教育を、市レベルでの連携の下で行えるよう取り組んでいく。

### 国際化の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

\*国際交流の促進を期待して、本学科の留学生と日本人学生との交流の機会を作るために、一部の授業では混合グループでの学習を行った。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

\*学科内に留学生がいるにもかかわらず、日本人学生からの積極的な関係づくりが見られない。授業内でのグループ活動もその場限りという傾向が強かった。

\*本学科の学生の場合、日本人同士でも関係づくりが苦手な学生が多いという、より根本的な問題もある。

#### 〈次年度への課題〉

\*留学生（他学科の学生も含む）と日本人学生との継続的な交流の機会を設定し、相互理解を深める取り組みが必要と考える。

# 農学部の自己点検・自己評価

学部長

相野 公孝

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・高大連携事業を中心として、探求学習の研究指導を行い本学部の魅力を発信した。
- ・オープンキャンパスでは農学部共通で行っていたが、学科ごとに学生と保護者を分け、より詳細な説明ができるように別メニューで説明を行った。特に学生には、本学部の特徴である体験型学習中心のカリキュラムを実感してもらうために工夫を行った（地域創成：圃場でのジャガイモ収穫、植物工場でのトマト収穫体験、微生物の生産する物質の抽出、海洋水産：海洋ドローンの操作体験、モエビの分類等）。
- ・オープンキャンパスにおいて、日本の大学受験の変化と、本学部が必要としている学生像、それに伴う総合選抜重視の受験方法について説明した
- ・Instagram、X(旧Twitter)等のSNSを用い、授業風景やイベント情報などを配信することにより、各学科の特色や何を学ぶのかを具体的に示した。
- ・入学前説明会の開催（オンライン含む）による入学後の不安解消を行った。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・農学部：入学定員90名、入学者数79名、入学定員充足率 87.8%、編入1名（R6）  
入学定員90名、入学者数80名、入学定員充足率 88.9%（R7）
- ・オープンキャンパス7回実施の参加人数は、地域創成農学科90組、海洋水産生物学科165組、参加人数総計568名であり、昨年度584名に比べほぼ同等であった。出願数は、地域創成農学科において前年度より微増傾向を示した。海洋水産生物学科では、AO総合選抜において1・2期目で定員充足となり3期目の募集を停止した。
- ・入学前説明会日は69組158名（オンラインを含む）が参加、入学への準備と学生が抱える不安について、教員及び在学生在が丁寧に説明を行い、参加者の不安を解消することができた。

### 〈次年度への課題〉

- ・令和8年度に開設予定のアクアグリーンフィールド学科（仮称）、地域創成農学科の学科名変更などの情報発信を年度当初から行い、より多くの受験生に認知してもらう必要がある。
- ・オープンキャンパスは今年度と同様に学科ごとに保護者と学生を分けてきめ細やかな説明を行い、さらに体験型学習事例を増やし、「楽しく学べるキャンパス」を実感してもらう必要がある。
- ・農業、海業などに広く興味を示す学生を発掘するとともに、総合選抜での受験の重要性をさらに説明する必要がある。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・各学科の作成した3つのポリシーに基づきそれを実現できるよう授業を実施できた。
- ・退学者防止について、チューターによる早め早めの学習支援を徹底し、退学者率 0%を目指した。特に、2回連続欠席者票を元にし、教授会及び学科会議において各教員間での情報共有を密に行い、問題を抱えた学生には早期に3者面談を行い、解決するよう努力し、よりきめの細かい対応を行った。
- ・実習科目とそれに関連する座学科目を連携・補完させ、原理と実践の両面から学習体得することで、学生の理解度と満足度をより高めることのできる講義体系を構築し、学習の楽しさを全面に打ち出した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・農学部退学者6名、休学者2名で前年度に比べ同程度であった。きめ細やかなチューター対応を行ったが退学者を出したことは残念であった。
- ・地域創成農学科と醸造学科及び新地域創生農学科のカリキュラムが並行して実施されたが、大きな混乱はなくスムーズに授業を行うことができた。

- ・海洋水産生物学科においては開設2年目を迎え、順調にカリキュラムに沿った授業を押し進めることができた。
- ・以前から実学重視の教育を行なってきたが、本年度は両学科において、体験型学習を通じて、農業、海業への面白さや今後の学びについて考える場を作ることができた。また、座学と実習科目の連携を行うことができた。
- ・食品衛生管理者及び食品衛生監視員の課程修了者は27名、卒業生の69.2%であり、昨年度の41.1%に比べ大幅に増加した。

#### 〈次年度への課題〉

- ・退学者0名を目指し、さらなる細やかな指導と、教員間における情報共有を強化する必要がある。特に1学年の学生数増加に伴い、情報の把握と対応が遅れる可能性がある。さらなる教員間における情報共有を密にし、学生の状況把握を強化する必要がある。また、学科内のみならず学科間の情報の情報共有も広く行う必要がある。
- ・実習科目とそれに関連する座学科目を連携・補完させ、原理と実践の両面から学習体得することで、学生の理解度と満足度をより高めることのできる講義体系の構築を目指した一定の成果を得られたが、各学科ともに今後さらに強く押し進める必要がある。
- ・食品衛生管理者及び食品衛生監視員の資格に加えて学芸員の資格取得の重要性を初期段階で理解できるようにし、資格取得まで教員が強く指導し、課程修了者数を増加させる必要がある。
- ・南あわじ市商工会議所と共同でより早くからキャリア教育ができるように、学生への企業情報の周知と実体験ができるようにし、就職活動へスムーズに移行できるよう計画する。

### 研究推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・科学研究費取得のため申請数を増加するために各学科教員に啓蒙し、さらに、学術研究助成基金以外の各省庁及び地方自治体が行なっている競争資金の応募への申請を推奨した。
- ・各学会への査読付き論文への投稿、積極的な学会発表を行うよう啓蒙した。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・研究活動実績は、学術論文が7編、学会等発表が12題、書籍が2編、学術雑誌1編、紀要1題、その他研究会講演14題であった。
- ・科学研究費応募は5件（前年3件）であり、継続が1件で会った。助成・受託研究は4件、学内共同研究が1件、SDGs教育研究活動が1件採択された。他大学との共同研究が1件であった。昨年に比べ研究費確保への意識が高まりつつあるように考えられた。

#### 〈次年度への課題〉

- ・今後とも学術研究助成金はもとよりあらゆる競争的資金に対してチャレンジできる環境を醸成する必要がある。

### 地域連携・地域貢献の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・地域企業及び地域との連携をさらに強化するために、地域のイベントに積極的に参加し、学術的な面からも地域企業との共同研究を増加させる努力を行った。その結果地域創成農学科、海洋水産生物学科ともに合計30テーマにおいて地域連携活動を行った。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・高大連携事業においてクロモジの系統分析やエッセンシャルオイルの抽出・分析の指導を行った結果、指導学生を「バイオサミット in 鶴岡」で厚生労働大臣賞を受賞に導いた。また兵庫県オリジナル秋冬ネギ「ひょうごエヌワン」の抗酸化力評価分析方法を指導し、兵庫県立農林水産技術総合センター成果発表会の学生発表につなげることができた。

- ・淡路島なるとオレンジの復興プロジェクトにおいて、全農との商品開発協力を行い、開発商品をイオンシネマで販売を行なった。また、NHK「あさイチ」（放送日6/6）にて、淡路島なるとオレンジの情報を提供したほか、授業で使用している人工香料噴霧器も番組内で紹介した。
  - ・南あわじ市鳥獣対策室と協力し、阿万吹上地区での防護柵設置や自然獣の生息密度調査などを実施し、獣害に強い地域づくりを支援を行なった。また、イノシシが好む香気を探索する研究を実施し、候補となる香気の選抜を試みた。
  - ・本年度から、福良湾において大規模防波堤完成後の環境の監視と改善を目的とした定期的な漁場環境調査、藻類種苗生産試験、底質改善試験を開始した。本年度は教員5名と学生1名により4回の定期調査、アカモクの種苗生産技術開発、ナマコを用いた底質改善試験を実施した。
  - ・南あわじ市阿那賀・丸山漁港・海の展望広場及び魚彩館において、地元主催の「淡路島まるやま水族館」の運営スタッフとして学生14名が生物飼育・展示・接客等の業務を行った。開催期間中、淡路島内外から、のべ12,782名が入館した。
  - ・南あわじ市伊弉海岸において、「3海峡クリーンアップ大作戦」が開催された。運営スタッフとして学生10名が総合司会・塩づくり体験・受付を行った。
- 以上、多くの成果を上げることができた。

#### 〈次年度への課題〉

- ・現状の取り組みを継続しながら、より広範囲の地域連携活動を行う。

### 国際化の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・海外留学生との交流を活発化する事により相互の文化の理解を促進するために、くこうみ祭やさなぶり祭などのイベントに海外留学生の参加を促し、JICA(フィリピン共和国)、中国、モロッコの視察団及びフィンドリー大学(アメリカ)等からの短期留学生訪問を受け入れた。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・さなぶり祭において、高梁キャンパスの留学生が参画し、田植えを通して日本の文化の交流を行い。バーベキューを通じて、留学生との学生間交流を密にした。また、さなぶり際には高梁キャンパスの学生と留学生との交流を行なった。
- ・インドネシアのテンペ、韓国のキムチなどの発酵食品の加工実習を昨年に引き続き実施した。

#### 〈次年度への課題〉

- ・今年度と同様に留学生と日本人学生との交流を活発化する計画を図り、相互の文化の理解を進めていく必要がある。
- ・海外視察団等の積極的な受け入れや、海外研究機関との共同研究を活用化する必要があり、学生の海外への視野を広げることが重要である。

# 地域創成農学科の自己点検・自己評価

学科長

村上 二郎

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・在学生（1回生と2回生）を対象に、本学科入学理由に関するヒアリング調査を改めて行い、教員間で情報の共有を行った。幅広い分野がある農学の中で、現在の受験生（高校生）が何に関心があるかといったトレンドを把握し、オープンキャンパスやキャンパス見学での講義や体験イベントに反映させた。
- ・オープンキャンパスの魅力を高めるため様々な取り組みを行った。模擬講義においては、農や食だけでなく、高校生の関心が高い環境問題（SDGs）や農業経営に関する話題を追加し多様性を図った。また、施設見学では、学生主導での実験機器の説明や試食品の製造提供を行い、本学科学生の主体性や活発性を強調した。加えて、これらの様子をSNSで精力的に発信した。
- ・高大連携事業（4件）やキャンパス見学（3件）を推進し、本学科のアピールに努めた。また、高校内ガイダンス（13件）にも積極的に参加を行った。さらに、入学前説明会を開催し、合格者が安心して入学できるよう心がけた。
- ・農学部キャンパス周辺では、学生向けの住居が慢性的に不足しており、受験者や保護者が大きな不安を抱いている。そこで、シェアハウス物件の情報を取り纏め、オープンキャンパスや入学前説明会において情報の提供を行い、シェアハウスに住むメリット・デメリットを説明した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・令和6年度：入学定員 50名、入学者数 28名、入学定員充足率 58.0%
- ・令和7年度：入学定員 50名、入学者数 32名、入学定員充足率 64.0%
- ・令和7年度の入学者数は、前年度の114.3%となり増加したが、残念ながら入学定員には達しない結果となった。
- ・オープンキャンパス参加者は、前年度を上回る97組/235人となり堅調であった（それぞれ105%増/122%増）。また、参加者アンケートによる評価も非常に高かった。
- ・各入試の出願数も前年度より増加していた。
- ・これらの要因として、上述した取り組みの成果があったと考える。

### 〈次年度への課題〉

- ・令和8年度に本学科の名称変更が行われに伴い新たなカリキュラムが開始されることから、オープンキャンパスなどを通じて本情報を精力的に発信していく。
- ・在学生が主体的に活躍するオープンキャンパスを実践し、高校生や保護者にとって、親しみやすく、キャンパスライフを実感できる場を提供していく。また、高校ガイダンスや出張講義等で、本学科の多様な取組を紹介し、その魅力を発信していく。
- ・海洋水産生物学科受験者の第二希望として、本学科を選択するケースが散見されることから、本学科独自の楽しさや優位性を明確化しアピールしていく。
- ・従来からの問題である淡路島内出身学生や女子学生の比率の少なさの解消を目指し、地域密接型の活動やSNSなどを活用し志望者の増加を図っていく。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・退学者対策として、学科会議等で連崎欠席者などの情報を頻繁に共有し、チューターのみならず学科教員一丸での徹底的なフォローを実践した。また、早期に三者面談を実施し問題解決に向け細かな対応を行った。
- ・各種アンケート調査より、3つのポリシーのうち可能性を信じる力（自己効力感）が本学科では低い傾向があったことから、実習や卒業研究において、成功体験を積ませることが出来るような指導を行った。
- ・実習や実験科目とそれに関連する座学科目を連携・補完させ、原理と実践の両面から学習体得することで、学生の理解度と満足度をより高めることのできる講義を実践した。具体例として、本学科1回生の必修講義である「フィールド実習」と「栽培学」を連携させ、実習で栽培している作物を座学講義でより深く解説し、さらに収穫物を実際に調理し食すことで一層の興味を引き出す取り組みを行っている。

- ・本学科で取得できる資格に関して内容や有用性を説明し、資格取得に必要な講義の履修を推奨した。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・退学者対策に重点を置いてきたが、残念ながら2名が退学を行った。また、体調不良で1名が休学している。
- ・実習科目と座学科目の連携については、学生からポジティブな評価を受けているが、今後アンケート結果などを詳細に分析し、担当教員間で評価していく必要がある。
- ・食品衛生管理者および食品衛生監視員の課程修了者は14名、卒業生の51.9%であった。

#### 〈次年度への課題〉

- ・前年度と比べ退学者数が減少したが、教員間の情報共有とフォローをさらに強化し、退学者0を目指す。
- ・引き続き、自己効力感を高める講義内容や指導方法を模索していく。
- ・実習科目をより充実させ、また座学科目との連携をさらに推進し、学生の理解度と満足度をより高めることのできる講義を展開していく。
- ・食品衛生管理者や令和6年度入学生から取得が可能になった学芸員の資格に関してその重要性を説明し、取得率の向上を目指す。

### 研究推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・学内外にとらわれず共同研究を推進した。とくに海洋水産生物学科と積極的に連携し共同研究の提案を行っている。
- ・科研費をはじめする競争的資金の応募申請を推奨した。
- ・研究成果の投稿および学会での発表を積極的に行うことを奨励した。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・研究活動実績は、学術論文が3編（そのうち2編は国際誌）、学会等発表が3題、学術雑誌が1編、書籍が1編、その他の研究会等発表が4題であった。
- ・競争的資金プログラム（JST）1件が継続、また、他大学・研究機関との共同研究2件を行っている。

#### 〈次年度への課題〉

- ・海洋水産生物学科との共同研究の具現化。
- ・競争的資金の獲得。
- ・研究成果の発表。とくに国際学会や国際雑誌での発表を奨励。

### 地域連携・地域貢献の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・高大連携事業（4件）、地域中高生の活動補助（2件）、地域密着型の研究や研究会（9件）などを推進した。
- ・南あわじ市との受託研究の継続、地元企業との連携による新商品開発に取り組んだ。一連の研究活動の多くは本学科学生も携わっており、大学と地域をより深く結びつけることに貢献している。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・以下に、主な活動を列挙する。全ての課題において、大学と地域をより深く結びつける有意義な取組となった。
- 1) 淡路島なるとオレンジの復興プロジェクト
- 2) 南あわじ市獣害対策
- 3) 南あわじ市小さな資源循環推進協議会
- 4) 高大連携“小野高校” クロモジ蒸留液の定性分析と系統分類
- 5) 高大連携“播磨農業高校” 「ひょうごエヌワン」の抗酸化力の評価分析

- 6) 淡路三原高校高大連携活動\_実験授業
- 7) 南あわじ市大学連携事業4つの研究会
- 8) ひょうご絆プロジェクト「果樹園の再生と観光農園化で伊加利の新たな魅力を創造！」
- 9) 南あわじ市地域の担い手づくり事業「草刈りで広がる交流の輪！地域環境保全プロジェクト」
- 10) 高大連携“県立農業高校”地域特産作物から分離した酵母菌の解析
- 11) インターアクトクラブの活動補助（阪神間の8中学高校）
- 12) 南あわじ市志知松本地区清掃活動（春、秋）
- 13) 地域に学ぶ中学生・体験活動「トライやる・ウィーク」（南あわじ市中学生の職場体験）
- 14) 淡路島ワインぶどう研究会・交流会
- 15) 上田流麴造り研究会・総会

#### 〈次年度への課題〉

・本学科では、数多くの地域連携活動を行ってきたが、その反面、活動内容やその成果に関する情報発信は十分であるとは言えない。そこで、WebやSNSを通じて、地域社会に分かりやすく発信し、本学科の意義を伝え知名度を上げていく。本学科の弱点である地元学生の少なさを解消していく上で重要な取組と考える。

### 国際化の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・本学科主催行事のさなぶり祭では、高梁キャンパスの留学生が参加し本学部学生との交流を図った。
- ・また短期留学生の訪問時など、海洋水産生物学科と協力し、海外留学生と日本人学生との交流を促進した。
- ・「地域創成農学概論」や「グローバルスタディーズ」などの講義で、世界の食料事情や環境問題を解説し、また海外で就労経験がある教員がその体験談やメリットを紹介することで、海外への関心を高めるよう努めた。
- ・国際農林水産業研究センター(JIRCAS)や国際稲研究所(IRRI、フィリピン)との共同研究を推進した。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・留学生の訪問時には、本学科の学生も多数参加し積極的な交流を通じて親睦を深めることができた。
- ・海外輸出を行う事業所でインターンを行うなど、グローバル志向の学生が増えつつある。

#### 〈次年度への課題〉

- ・本学部の留学生は少なく、交流の機会は多くはないのが状況ではあるが、次年度も引き続き、本学科のフィールド実習講義で行う田植え行事（さなぶり祭）等に、他学部/学科の留学生を招待し本学科学生との交流の場を設け、文化的な多様性の理解を深める場を提供していく必要がある。
- ・研究面では、国際誌への投稿や国際学会での発表を推奨していく。

# 醸造学科の自己点検・自己評価

学科長

村上 二郎

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・退学者対策として、学科会議等で連崎欠席者などの情報を頻繁に共有し、チューターのみならず学科教員一丸での徹底的なフォローを実践した。また、早期に三者面談を実施し問題解決に向け細かな対応を行った。
- ・実習や実験科目とそれに関連する座学科目を連携・補完させ、原理と実践の両面から学習体得することで、学生の理解度と満足度をより高めることのできる講義を実践した。
- ・卒業研究では、自己効力感の向上を目指し、成功体験を積ますよう指導を行った。
- ・本学科で取得できる資格に関して内容や有用性を説明し、資格取得に必要な講義の履修を推奨した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・退学者対策に重点を置いてきたが、残念ながら2名が退学を行った（そのうち1名は、長期休学中であった）。
- ・実習科目と座学科目の連携については、学生からポジティブな評価を受けているが、今後アンケート結果などを詳細に分析し、担当教員間で評価していく必要がある。
- ・食品衛生管理者および食品衛生監視員の課程修了者は13名、卒業生の92.9%であった。

### 〈次年度への課題〉

- ・本学科は令和7年度末での閉設が予定されているので、留年者をださいように計画的な単位の履修や習得を徹底的に指導していく。
- ・食品衛生管理者や次年度から取得できる学芸員の資格に関してその重要性を説明し、取得率の向上を目指す。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・学内外にとらわれず共同研究を推進した。とくに海洋水産生物学科と積極的に連携し共同研究の提案を行っている。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・旧醸造学科所属教員による研究活動実績は、学术论文が1編（国際誌）、学会等発表が5題、その他の研究会等発表が8題であった。

### 〈次年度への課題〉

- ・地域創成農学科や海洋水産生物学科との共同研究の推進。
- ・競争的資金の獲得。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・地元企業との連携による新商品開発に取り組んだ。一連の研究活動の多くは本学科学生も携わっており、大学と地域をより深く結びつけることに貢献している。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・淡路島ワインぶどう研究会と連携し、テロワール（農産物や食品の品質や特徴を決定する環境）の開発研究を進めている、今後、農山漁村活性化プロジェクト事業に申請し、さらなる進展が期待される。

#### 〈次年度への課題〉

・本学科では、数多くの地域連携活動を行ってきているが、その反面、活動内容やその成果に関する情報発信は十分であるとは言えない。そこで、WebやSNSを通じて、地域社会に分かりやすく発信し、本学科の意義を伝え知名度を上げていく。本学科の弱点である地元学生の少なさを解消していく上で重要な取組と考える。

### 国際化の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

・短期留学生の訪問時など、地域創成農学科および海洋水産生物学科と協力し、海外留学生と日本人学生との交流を促進した。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

・留学生の訪問時には、本学科の学生も多数参加し積極的な交流を通じて親睦を深めることができた。

#### 〈次年度への課題〉

・次年度も引き続き、留学生との交流の場を設け、積極的な参加を促していく。

# 海洋水産生物学科の自己点検・自己評価

学科長

堀 豊

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・定員充足率100%を目指し、オープンキャンパスの強化と広告の活用、地域イベントへの参加等により、新学科の認知度を高めた。
- ・オープンキャンパスでは学科概要説明の際に、なるべく新入生が実際に活動している写真を多く取り入れた。教員によるミニ講義を実施するとともに、水槽室や新設された臨海実習棟に案内し、水生生物と接する場を設けた。
- ・SNSによる学生と教員からの情報発信、ラッピングバスの運行、地元テレビ局・一般紙・業界紙への積極的な対応、地域イベントや高校進路説明会への参加に注力した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・令和6年度入学：入学定員40名、入学者数50名、入学定員充足率125%
- ・令和7年度入学：入学定員40名、入学者数48名、入学定員充足率120%
- ・オープンキャンパスでミニ講義を行うことにより、学科で学ぶ内容をより具体的に掘り下げることができた。
- ・学生が実習で利用している水槽室に案内することで、水生生物飼育の楽しさを伝えるとともに、臨海実習棟へ移動するバス内でも教員や在学生から積極的に話しかけることで本学科の魅力を効率的にアピールすることができた。
- ・様々なメディアを通じた広告や、高校におけるリモート説明会への参加、地域との連携強化により徐々に知名度は上がっている。

### 〈次年度への課題〉

- ・定員確保を持続するために、応募者の少ない淡路島内高校生への働きかけを強化するとともに、地域イベントへの参加学生数を増加させ、学科名称の認知度向上に努める。
- ・農学部受験者数・入学者数が多い大学近隣（近畿・中四国）の高校や予備校への広報活動を積極的に実施する（コーディネーターとの高校訪問、海洋水産生物学科在学生の母校へ学生と共に高校訪問）。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・退学者対策として、学科会議等で学生情報の共有に努めるとともに、入学後の早い時期に学生一人に一台ずつ水槽を管理させ、水生生物の採集や飼育を体験させた。
- ・「海業」全般に関する基礎的な知識の習得を目標として、リゾート施設見学や川遊び実習等の体験型学習を行った。
- ・臨海実習棟を活用し、全員に海釣りの体験をさせ、釣り上げた魚の同定実習を通じて水生生物学の学習効果を高めた。
- ・淡路島内の魚貝類種苗生産施設を見学し、大規模な生物飼育を体感させた。
- ・兵庫県と連携し、調査船による海洋観測を体験させ、海洋環境を考える契機とした。
- ・大学祭等のイベントでスモールビジネスの模擬体験をさせた。
- ・資格・免許取得の一環として、ダイビングライセンス講習の斡旋を行った。
- ・昨年度の1年秋学期は学科特有の専門科目が少なかったこともあり、修学意欲の低下が見て取れたため、今年度は、1年春学期の専門科目の一部を秋学期に移動し、基礎科目や教養科目も含めた学生の修学意欲の維持向上に努めた。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・令和6年度は退学者2名を出すこととなった。うち1名の退学理由は学科内容への興味の喪失であった。無期停学から退学となった者については教職員が学生の状況を長期間把握することができていなかった。学科会議において学科教員間の情報共有を図っていたが当該学生の状況を把握するには至らなかった。学生からの情報提供を得ることもできていなかった。
- ・学習面では、体験型学習を通じて水生生物や海、川に関する経験値を高めることができた。

- ・1年次の専門科目分散により、学生からの履修内容に関する不満は軽減したと思われた。
- ・令和6年度のGPAは、1年次生2.70、2年次生2.46、全体の平均は2.60、平均単位取得数は1年次生42.3、2年次生42.1（通算85.2）で、それぞれ76%、86%の学生が40単位以上を取得するなど概ね良好である。

#### 〈次年度への課題〉

- ・学科教員間の情報交換の機会を増やすとともに、学生とのコミュニケーションの機会を増やし、学生の異常を早い時期に察知し、きめ細かい指導を心がける。
- ・水産物の加工、調査船乗船や水産関係施設見学については、さらに学習、実習の機会を増やしていく。

### 研究推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・教員間の学術交流を進めるためのミーティングを重ね、若手教員に対する技術指導に注力した。
- ・南あわじ市と連携した新規事業を開始することにより研究資金を調達し、海藻類の増養殖研究、臨海実習棟周辺海域の環境モニタリングに着手することができた。
- ・淡路島内の魚貝類種苗生産施設の利用や兵庫県の実施する海洋観測結果の共有などにより、今後につながるような共同研究や連携を模索した。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・今年度の研究活動実績は、学術論文が4編、講演口頭発表が7題、書籍が1編、その他の業績10件であった。
- ・科学研究費応募は0件であった。ひょうご農商工連携ファンド事業助成金の研究開発部門に1件応募したが採択は0件であった。
- ・学内共同研究が1件、SDGs教育研究活動が1件採択された。
- ・他大学との共同研究が8件であった。

#### 〈次年度への課題〉

- ・地域創成農学科とも連携し、学科の枠を超えた新しい取り組みにチャレンジする。
- ・臨海実習棟の完成に伴い、現場海域における調査研究や陸上養殖関連研究などを見据えた整備をさらに進めていく。
- ・今後とも学術研究助成金はもとよりあらゆる競争的資金に対してチャレンジできる環境を醸成する必要がある。

### 地域連携・地域貢献の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・地元自治体や漁業者、民間団体等と連携し、イベントや会議に積極的に参加した。
- ・大学公開講座「吉備国際大学 地域創成生涯学習講座」を開講し、大学として地域との連携・地域への貢献を図った。
- ・淡路島内の高大連携協力協定校である「兵庫県立津名高等学校」において、理数探究における探究活動のテーマ設定に関して支援（指導・助言）を行った。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・5月「慶野松原海岸清掃」、6月「ひょうご環境未来会議」、7月「阿那賀地区夕涼み会」、8月「海のバンキシャ！2024」、9月「国際フロンティア産業メッセ」、9月から10月にかけて「淡路島まるやま水族館」、10月「第2回ひょうご豊かな海づくり推進大会」、11月「3海峡クリーンアップ大作戦」、「さかな文化祭あかし」、12月「ため池かいぼり」、3月「灰ワカメ生産技術の継承」等、様々な地域振興イベントに学生が参加し、兵庫県、淡路島、南あわじ市の活性化にそれぞれ寄与するとともに、大学名、学部名、学科名の認知度を向上させた。

### 〈次年度への課題〉

- ・交通の便が悪いことから、学外のイベントに学生が参加しやすくなるよう公用車や学園バスの活用を進める。
- ・大学、学部、学科名等のわかるパーカーやビブス等を整備し、認知度の向上に努める。
- ・アカモク、モズク、ナマコ、イガイの増殖等、地元からの要望が強い案件について優先的に研究に取り組む。

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・地域創成農学科と協力し、海外留学生と日本人学生との交流を促進した。
- ・海は世界に繋がっており、海の資源を考えるうえで国際的な視点・視座は必要である。そのためグローバルな課題や取り組みを講義の中で積極的に取り入れ紹介した。
- ・さなぶり祭等のイベントにおいて、魚介類を含めた様々な食材の紹介やバーベキュー、釣り体験等を行った。
- ・海外政府からの派遣訪問団に対応した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・2024年7月3日に本学の教育交流協定校であるフィンドリー大学(アメリカ)等からの短期留学生が農学部を訪問した。臨海実習棟付近での釣り体験や交流会では多数の学生が参加し親睦を深めることで、語学学習の意義や意欲を再確認することが出来た。
- ・2025年2月19日に臨海実習棟においてモロッコからの訪問団を受け入れ、海藻類養殖に関する説明を行った。

### 〈次年度への課題〉

- ・臨海実習棟周辺での留学生釣り体験イベントでは補助者が不足したことから、さらに多くの学生参加を求めていく。

# 外国語学部 外国学科の自己点検・自己評価

学部長・学科長

畝 伊智朗

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

入学定員充足率100%を目標とする。

それには専願入試の応募者をどれだけ多く確保するかが重要であるため、これまでのオープンキャンパスの学科の取組み（在学生による留学報告など）に加え、「保護者向けセッション」や「卒業生の活躍状況報告」などをプログラムに入れる取組みを行った。また、こういった地域からオープンキャンパスに来たかが分かるような「地図上の情報提供」が過去に好評（限定日時、限定データ項目などで公開）だということで、入試広報室からの支援により今年度試行した。進学支援企業主催の高校内説明会（25件）、来キャンパス型の高大連携活動（2件）、高大連携出張講義（1件）を行った。今年度の特筆すべき広報活動として、スタディアブロードの周知のためのA3両面二つ折りのパンフレットを入試広報室と連携して作成した。留学先、TOEICスコアの伸び、伊藤奨学生、外国学科のスタディアブロード特別奨学生、学業優秀者への特別奨学生の3つの奨学生制度をオープンキャンパス、各種説明会で配布、説明を行い、受験生への周知をはかった。外国学科の学生たちの学生生活を紹介するために、Youtubeに瀬戸内サニー氏によってハロウィーン行事の動画制作が行われ、配信された。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

オープンキャンパス参加数（保護者含む）は12月8日時点で、150人（昨年同時期133人）で、前年比113パーセントであった。

○入学定員：50名、令和6年10月入学生：5名、

令和7年4月入学生：23名、入学定員充足率：56%

高校内説明会では、対象生徒が1、2年生であり、進路に向けたの文理選択の決定に合わせて行われることが多い。また、1日の開催のうち他分野の説明に赴く生徒もおり、複数回の設定がされていた。来キャンパス型の高大連携活動では、外国学科の通常授業に参加する形式、ネイティブ教員による英語学習プログラムを実施した。外国学科の在学生との交流もあり、高校生が大学進学を実感できる唯一の機会でもある。

### 〈次年度への課題〉

オープンキャンパス参加者数が、出願数、入学者数に相関傾向にあるため、高校内説明会などにおいて、オープンキャンパスのPRを促進する。

高校内説明会での本学科への依頼は、外国語・国際系の分野である。この分野は、大学卒業後の進路選択の幅が多く、語学系、観光系の専門学校、観光系専門職大学とも競合する場合がある。また、進学対象となる大学で留学を必修にしている大学が全国的に多い。都市部の大規模大学は定員が多く、年内入試も活発化していることから高校生がそちらに流れないような工夫が必要である。さらに、考慮する点として、ある出張者のケースでは、職業理解あるいは進学説明と職業説明を合同にしている説明会がある。例えば、1日2回の説明会を実施する場合、高校生は1回目が専門学校、2回目が大学でこの二つの選択の間に関連がないケースもある。大学でのキャリア教育と大学生の主体的で多様な就職先の選択を明確にして説明する必要がある。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

令和6年度の事業計画に基づき、学生が楽しく学び、自己効力感を育めるよう、教育の充実を図った。そのために、学び合い、ディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションなどのアクティブラーニングを授業に積極的に取り入れた。さらに、学科FD研修会ではアクティブラーニングをテーマに取り上げ、今後の授業に活かしていく。また、各学期末には授業アンケートを実施し、その結果をもとに次学期に向けた授業改善に取り組んでいる。加えて、海外の提携校との国際交流を通じて、学生の成長の機会を提供した。

留学生への日本語教育では、2年次修了までに、全員JLPTN2に合格することを目標に、日本語正規授業の充実やN2対策講座などを実施した。

退学者・除籍者ゼロを目指す。退学などの対策のため、学生の授業出席状況を確認しながら、早め早めに指導を行うよう努めた。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

学び合い、ディスカッション、グループワーク、プレゼンテーションなどのアクティブラーニングを授業に積極的に取り入れることで、学生が主体的に学び、知識やスキルを深めるとともに、自己効力感を育めるよう配慮した。これにより、単なる知識の習得にとどまらず、他者との協働を通じて思考力や表現力を高める機会を提供できたと評価できる。また、各学期末には授業アンケートを実施するなどして、学生の学びの実感や授業内容に対する評価を検証している。これまでの結果から、アクティブラーニングを取り入れた授業に対する肯定的な意見が多いように思われる。本学科の授業は概ね良好な評価を得ている。さらに、グローバルな視点を養うため、海外の提携校との交流を強化している。具体的には、交換留学生や研修団を受け入れ、本学科の学生と共に学ぶ機会を提供し、異文化理解を深める場を設けた。これにより、学生が国際的な視野を広げ、異なる文化や価値観に触れることで、さらなる成長の機会を提供できたと言える。

##### 【JLPTN2 取得率】

##### ◆24年度春学期

・外国学科留学生 正課生41名中27名がN2取得（N2取得率65.9%、前年度58.3%）。

##### ◆24年度秋学期

・外国学科留学生 正課生44名中28名がN2取得（N2取得率63.6%、前年度69.2%）。

・N2未取得者は、3年次生以上が5名。2年次生が3名。

##### 【退学者・除籍数】

退学者3名、除籍者1名、合計4名が学修途上で大学を去った。不本意入学、精神的課題、経済的理由などが退学等の原因である。

#### 〈次年度への課題〉

アクティブラーニングの効果を更に高めるためには、学生一人ひとりの学習スタイルや特性に応じた指導方法の工夫が必要である。グループワークやディスカッションでは、積極的に発言する学生と消極的な学生の間に差が生じやすい。このため、全ての学生が主体的に学べる状況を提供することが求められている。教員のファシリテーション技術の向上や、個々の学生が適切に役割を担える仕組みを工夫し、より効果的な学びを提供しなければならない。次年度の課題として解決に向けて取り組んでいく。

秋学期修了時点で、N2未取得の3、4年次生が5名、2年次生が3名となっている。未取得者はN2対策講座に積極的に出席するよう指導しているが、非正規の講座であるため出席率が低い。次年度は週2回の講座に出席し、日本語学習時間を確保させる必要がある。

退学者等の対策として、引き続き、授業出席状況を確認しつつ、保健室カウンセラーとも相談しつつ、早期の個別指導、学科全体でのモニタリングに努める必要がある。

## 研究推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

（学術論文）

・池上 真由美 「ドイツ・シュタイナー学校の実践に学ぶ」『グローバルデザイン論攷』 第8巻第1号 pp29-38 (2024年)

・金沢真弓、「国際英語としての英語に対する認識—Global Englishesをテーマにした英語科目を通して—」『グローバルデザイン論攷』、Vol. 8, No. 1. pp. 5-12 (2024年)

・John FAWSITT, An Exploration of the Contemporaneity, Staging, and Speech Characterisation in Eric Ambler's Journey into Fear, Glocal Design Studies, Vol. 8, No1, pp 13-22, (2024)

・Paul R. TOWNSEND, "The Power of Praise and How to Make it Meaningful", Glocal Design Studies, Vol.9, No.1, pp 1-6, (2025)

・畝 伊智朗、「復興支援事業の成果は、どのように広がるのか？ —コンゴ民主共和国の事例から—」、『グローバルデザイン論攷』 第8巻第1号、pp39-55 (2024年)

(講演・口頭発表)

- ・池上 真由美「中学生の自主的な読みにつながる英語絵本の読み聞かせについて」中国地区英語教育学会研究発表会、研究発表、2024年6月
- ・池上 真由美「これからの義務教育学校の在り方を考える」美咲町立旭学園（義務教育学校）校内研修会、指導助言及び講演、2024年8月
- ・池上 真由美「義務教育学校の強みを活かしたカリキュラム開発」第73回全国へき地教育研究大会岡山大会、英語教育分科会、研究協議・指導助言・講演、2024年10月
- ・イアン・ウォーナー、現代イギリスの社会と文化、吉備創生カレッジ（2024年11月）
- ・イアン・ウォーナー、Briton on Britain：英国人による現代英国概観、吉備国際大学 まちなかゼミナール（2024年12月）

(その他の研究業績)

- ・反射スペクトルの多変量解析に基づく油彩画下層の油絵具マッピング分析法の開発、科学研究費助成事業 基盤研究(C)、2024年4月～2027年3月、大下浩司
- ・池上真由美 美咲町教育委員会より英語アドバイザーの委嘱を受け、英語特区である旭学園（義務教育学校）の教科横断的カリキュラム開発や英語教育の推進について指導助言を行った。
- ・池上真由美 9月にドイツのシュタイナー学校（小学校）2校とインターナショナルスクール1校において、1週間のインターンシップを行い、多様な指導方法を学ぶことを通して、これからの教育のあり方に関する論文執筆の準備をした。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

業務過多の中、一定数の研究業績を公表できたことは良かった。

#### 〈次年度への課題〉

教員の専門分野が多岐にわたっているため、単著の論文が多い。共同研究の可能性を模索する必要がある。

### 地域連携・地域貢献の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

##### 1. ボランティア活動

【スーパー・ボランティア・サークル (SVC) / 顧問: 池上真由美先生】

- \*6月 大学コンソーシアム岡山「日ようび子ども大学」in京山祭
- \*11月 オンラインによる参加校の報告会に参加
- \*7月 美咲町立旭学園English Camp
- \*2月 美咲町立旭学園 英語集会
- \*10月 岡南小学校PTAバザー支援
- \*11月 おかやまチームクエスト2024（岡山青年会議所主催）参加
- \*11月～1月 高齢者介護支援ボランティア

【園芸・スパイス研究会 / 顧問: 大下朋子先生】

- \*7月 高梁市栄町商店街「土曜夜市&カレーフェスタ」出店
- \*9月 岡山駅前朝市に出店
- 【インバウンド通訳案内サークル・大下（朋）研究室】
- \*10月 第2回 独歩ビールで夕暮れを楽しむ会in地域の客間「土屋邸」（倉敷市本町）準備・運営

- \*2月 一般社団法人秋田犬ツーリズム 北秋田観光コンテンツの創出事業とのオンライン交流
- 【軽音サークル / 顧問: 畝伊智朗先生】

- \*7月 大学コンソーシアム岡山主催「エコナイト奉還町商店街イベント」に出演

【その他】

- \*12月 岡輝公民館主催異文化交流イベント「もういくつ寝るとお正月」の準備・参加（SVC有志、正規留学生、交換留学生）
- \*3月 地域交流イベント「第16回つながれ岡輝2025」出演予定（SVC、留学生）
- \*3月 大元公民館主催「防災についての講座」への参加（留学生4名）

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

地域イベントなどに学科の学生（留学生を含む）の参加やイベントの準備、実施などを要請されることが増えた。サークルや研究会のメンバーや留学生で、積極的に対応した。地域の反応は好意的で、留学生の地域での共生、岡山キャンパスの知名度向上に貢献している。

### 〈次年度への課題〉

イベントなどに慣れた学生も卒業していくので、イベントの準備、実施ができるコアとなる学生の育成が必要である。

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

今年度は、外国学科の卒業必修プログラム「スタディ・アブロード（留学）」に計21名の学生を派遣した。派遣先は、アメリカ、カナダ、フランス、オランダ、韓国、ドイツ、オーストラリア、タイの計8か国。派遣した学生21名のうち12名は交換留学生として授業料が免除され、残り9名は自費留学であった。円高に伴い高騰している留学費用を援助する目的で、今年度から外国語学部独自の奨学金が新設された。初年度である今年度は、「伊藤奨学金」に4名、「スタディ・アブロード奨学金」に5名の学生達を選ばれ奨学金が支給された。また、留学した学生計21名のうち、計7名がJASSO（日本学生支援機構）の「海外留学支援給付金」を受給した。今年度夏休み・春休み期間中を利用してオンライン留学を行った学生は計9名であった。

留学生受入としては、4月に計3か国から計5名、10月に計2か国から計5名、合計10名の留学生が正課生として入学してきた。また、計4か国・地域（米、韓、蘭、台湾）の海外提携校から計9名の交換留学生を受け入れた。

例年開講している夏期短期プログラムに今年度はアメリカの提携校2校、ブラジルの提携校2校、カナダの提携校1校が参加し、計33名の学生+4名の引率が来学した。プログラム期間中研修団は、正課授業を受講したり、文化活動や観光、犬島で1泊2日のイングリッシュキャンプ、ホームステイなどを体験したが、そのほとんどに外国学科の学生達が随行し、長時間海外の学生達と一緒に過ごすことで、海外留学へのハードルを下げ、モチベーションを上げる結果につながった。

＊7月 外国人講師による学生交流スポーツイベント（バスケットボール）

KIUIドリルズサークルメンバーが中心となり、留学生と日本人学生との交流スポーツイベントを行った。

＊8月 留学生との交流イベント（鷺羽山ハイランド）

スーパーボランティアサークルメンバーが中心となり、8月に帰国する交換留学生のフェアウェルもかねて遠足を実施した。交換留学生以外の留学生も積極的に参加し、国籍・学年を超えて交流の輪が広がった。

＊11月 外国人講師による学生交流スポーツイベント（バスケットボール）

KIUIドリルズサークルメンバーが中心となり、留学生と日本人学生との交流スポーツイベントを行った。

＊11月 外国人講師によるハロウィンイベント（コスチュームコンテストや英語のゲーム他）

外国人講師2名が担当し、日本人学生、留学生が一緒になって英語のゲームとコスチュームを楽しんだ。

＊12月 クリスマス会（英語で歌を歌う、日本人学生と留学生が一緒になってたこ焼きを焼く他）

カフェテリアをクリスマス用に飾りつけ、クリスマスソングをみんなで歌ったり、食べ物の屋台を出したりして、学生同士親睦を深めた。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

＊外国語学部独自の奨学金が設立され、欧米に長期留学を希望する優秀な学生達が、経済的な理由で留学先を変更したり、留学をあきらめたりしなくてもいい環境が整ったことは、学生達の勉学に対するモチベーションを上げることにもつながっている。

＊今年度は、6年ぶりに夏期短期研修にブラジルの提携校2校が参加し、総勢37名という大人数での研修実施となったため、学生達はキャンパスにいながら海外にいるような雰囲気を経験することができた。

＊コロナ禍の影響で、オンライン留学を余儀なくされていた状況から、本来の海外留学中心にシフトしてきているが、経済的な理由でどうしても海外留学ができない学生や、語学力不足で留学に行けない学生、6週間～4か月の海外生活が出来る健康状態・精神状態にない学生については、引き続きオンライン留学を活用している。

## 〈次年度への課題〉

\* 日本政府の国際理解促進事業（かけはしやJenesys）への参画に積極的に取り組む時間的余裕がなく、公募されていたプログラムに応募できなかったのは残念だった。来年度は、積極的に応募したい。

\* 一定数の学生達を留学に送り出したが、やはり留学を先延ばしにする学生が目立つ。経験したことがないことに対する恐れや、決断力の欠如、経済的な理由などが考えられる。コロナ禍以前は、2年次に全員留学することが原則であったので、オンライン留学を含めできるだけ2年次に留学する原則に戻したい。

\* 留学した学生達が留学先で精神的に不安定になるケースが増えている。留学前に様々な指導やカウンセリングの実施などを試みているが、なかなか効果が見られない。全く、予期せぬ学生が、海外で予期せぬ行動をとるケースもあり、増加する予測不能な学生たちをどうやって安全に海外に派遣するかが大きな課題になっている。また、どの時点で学生を早期帰国させるべきなのか判断を迫られるケースもあるため、基準となる危機管理マニュアルの整備が必要である。

\* 交換留学生の受け入れに日本語のレベルを求めているため、日本語学習歴のない学生達が交換留学生として来学してくる。これらの学生達は、留学ビザ取得の関係で、最低週7科目受講する必要があるが、日本語学習歴のない学生が受講できる日本語の授業はなく、英語で開講されている授業数も少ないため、アメリカ人の学生が英語のクラスを受講するというような状況になっている。現在は、日本人学生達がボランティアで交換留学生達に日本語を教えているが、これらのクラスでは単位が付与されず、また日本語を教えるボランティアの確保も難しい。交換留学生の日本語レベルを問わないのであれば、それに対応する受け入れ体制が必要になる。日本語レベルを問えば、現在のように、オランダやスペイン、フランスからの交換留学生はほとんど来れなくなるだろう。

\* 交流イベントに積極的に参加しようとする学生が少なくなっており、イベント開催ぎりぎりにならないと参加を表明しない学生や、個別に声をかけないと参加しようしない学生が増えている。魅力的なイベントにどうやってより多くの学生達を積極的に参加させるかが課題である。

# アニメーション文化学部 アニメーション文化学科の自己点検・自己評価

学部長・学科長

清水 光二

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・令和6年10月の入学者：1年生5名、2年次編入生9名、3年次編入生1名（いずれも留学生）
- ・令和7年4月の入学者：1年生23名（日本人21名、留学生2名）  
（入学定員が40名のため、充足率は57.5%）

昨年は春の段階で定員40名を確保することができたが、今年はそれを大きく下回ってしまった。原因としては、東京の大手アニメスタジオを目指すことを強調しすぎて、逆に「何となくアニメが好き」という受験者にしめる大きな層を逃してしまったのではないかと考えている。

ただ、昨年度同様に秋の入学者（留学生）が期待されるので、最終的な充足率は85%ぐらいにはなるのではないかと予想している。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

定員割れした原因を改めて考えてみれば、地方の高梁から都心のアニメスタジオを目指すというかなり特化した本学科の目標と、実際に地方に暮らすのんびりとした大多数の生徒たちとの間にある意識のズレが大きかったのではないかと考えている。その溝を埋め切れずに、学科の東京志向を声高にアピールしても逆に引かれてしまったのかもしれない。

### 〈次年度への課題〉

それでも、アニメスタジオの東京一極集中という現実を考えれば、本学科の方針・目標設定に誤りはないであろう。ただ、東京のアニメスタジオへの就職を断念した学生ら（実は入学者の過半数の学生たち）にも在学中の満足感を持ってもらうため、もう一つ別の柱を工夫する必要があるであろう。例えば、イラストやゲーム、3DCGなど充実が、今の教師陣でも可能なことではないかと考える。

それと同時に、東京の大手アニメスタジオへの就職実績を早急に大きく上げることが重要である。今年度は一人の学生が大手元請スタジオに就職してくれたが（それは学科としての突破口にはなったのだが）、数としてアピールするのにまだまだ不十分である。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・退学と除籍について：退学者2名・除籍者5名（3月31日現在）
- ・資格について：今年度「色彩検定」の2級に2名、3級に4名が合格した。
- ・就職率について：52.61%（3月10日現在）
- ・実は令和7年度から、「アニメーション文化科目」「イラスト・印刷デザイン」「アニメーション制作」「3Dモデリング・ゲーム」の4つの柱を特徴とする新しいカリキュラムが始まったのだが、これはもちろん3つのポリシーに基づいて作成されたものである。そして、令和5年度より商業アニメに路線を定め、都心の大手アニメスタジオへの就職を目指すことと決めたことから、新カリキュラムにおいては特に就職活動に役立つ作画力を身につけられるよう授業内容が組み立てられている。
- ・今年度末、2名の学科教員が定年退職の予定であるが、その後任としてアニメと英語の教員各1名ずつを補充するようになった。学科内に多様なアニメ教員がいることによって、学生の多様なニーズにも応えられるのではないかと期待している。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

退学と除籍については、勉強よりも働くことを優先するタイプの留学生が入ってきた場合には、ある程度のドロップアウトは致し方がないのではないかと考える。彼らの多くは非漢字圏からの出身で、人一倍日本語学習に努力する必要があるのだが、日々の労働の後ではなかなかその時間が取れないようである。

- ・今年度、秋入学生として湖北工業大学から多くの留学生が入ってくれたのだが、彼らの日本語力の低さには大いに驚かされた。入試広報や中国支局長を通じて、相手校に入学前の日本語能力の向上を強くお願いするしかないであろう。
- ・今年度の「色彩検定」合格者は昨年度に比べると倍増しており、評価できよう。
- ・都心の大手アニメスタジオへの就職については、現在の3年生・2年生・1年生の様子を見れば、着実に就職者の数を増やしていけるのではないかと考えている。
- ・令和7年度から始まった新カリキュラムについては、今のところ学生の学修状況に大きな問題は見られない。

### 〈次年度への課題〉

- ・令和7年度に新しく採用される英語教員には、学科内の日本語担当者として、授業への出席や日本語能力試験の申し込み・合否の結果など、留学生の日本語学修状況を一元的に管理してもらうつもりである。それによって、留学生の退学者はある程度減らせるのではないかと考える。
- ・資格に関しては、令和7年度も「色彩検定」以外に、「CLIP STUDIO PAINTクリエイター検定」や「アドビ認定プロフェッショナル」なども、学科における取得可能な資格として学生には推奨していきたい。
- ・就職については、最終的にはアニメ以外の分野に進む学生の方が過半数になるので、ゼミの2年次・3年次あたりで学生との面談回数を増やし、進路選択で問題が発生しないように丁寧な指導が必要である。
- ・今年度開始の新カリキュラムについては、まだ始まったばかりなので今しばらくは様子を見たいと考えている。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

学術論文 2編  
 雑誌投稿等 1編  
 講演・口頭発表 2件  
 著書・作品等 2点  
 その他の研究業績 4点

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・今年度は科研費申請がまったくなかった。
- ・本学科には業界に勤めていた実務教員や専門学校の講師等が常時一定数いるため、本来あるべき大学教員としての研究活動がなかなか行えておらず、他学部・他学科に比べれば論文等の数が少ないと考える。ただ、新たに学会に入った者や大学院に進学する者などが現在出て来ているので、やがては研究者として育ってくるのではないかと期待している。
- ・学科教員の半数は本来アニメとは無縁の教員なのだが、彼らもまた何らかのアニメの専門科目を担当している。すると、個々の教員の本来の専門活動と必要に迫られて行うアニメの専門科目の提供を両立させなければならず、そのことが研究や論文執筆等に必要時間を奪っているように思われる。これは、本学科が以前から抱えている構造的な問題である。

### 〈次年度への課題〉

- ・上で述べたように、実務教員や専門学校の元講師等も大学教員になるべく現在努力をしているところである。時間はかかるが、やがては日本の大学における「アニメ」の立ち位置も定まり、教員の質が高まると同時に、科研費申請の数も増え、併せて研究成果も向上してくるのではないかと考える。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・今年度も「ゲームジャム高梁2024」を、10月19日（土）と20日（日）の両日、吉備国際大学多目的ホールにて開催した。実施主体はゲームジャム高梁実行委員会であるが、アニメーション文化学部が中心的な運営支援を行っており、学科の佐々木先生が審査員長、松山先生が審査員という立場で、参加者の作品を審査し講評を行った。今回も大会ポスターのイラストは、本学科の学生作品を使わせてもらった。

・なお、例年通り学内からは、作業療学科、外国学科、経営社会学科、eSportsサークルなどからの協力も得ている。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

・「ゲームジャム高梁」は、本学科がICTクラブ高梁、岡山県立高梁城南高校、岡山Unity勉強会などの外部の関係機関と協力して実施できる数少ない社会貢献活動なので、今後も継続して関わっていく必要があると考える。  
・在学中に「ゲームジャム高梁」に参加した学生が、今度はゲーム制作会社の社員として大会に参加してくれており、学生の就職面においても徐々に成果が現れ始めている。

#### 〈次年度への課題〉

・本年度新たに3DCGを専門とする教員を迎えたので、その先生の授業と「ゲームジャム高梁」との連携が今後は考えられよう。外部の人との交流だけでなく、習ったことが実際どのようにゲーム作りに活かされるのかを知ることは、学生の今後のモチベーション向上に大いに繋がると期待できる。

### 国際化の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

・6月18日、中国の黄岡師範学院研修団をお迎えした。研修団の学生らには特別授業として、前嶋先生の「彫塑」と富田先生の「クリンナップ」を体験してもらうことになった。中国ではなかなか経験できない貴重な体験となったようだ。  
・9月8日から14日までの一週間、河村顕治学長とアニメーション文化学科の教員4名で、中国各地の教育機関を訪問した。その中でも、かねてから交流のあった湖北工業大学と黄岡師範学院を訪ねるのが一番の目的だったのだが、今後も継続的に留学生を送り出してくれることが確認できた。コロナ禍で途絶えていた交流がこのような形で再開できたことを、中国側と日本側の双方ともにとっても喜んだ。  
・今年度より留学生の3年次編入には、日本語能力試験の2級合格が必須の条件であると定めた。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

・9月に一週間中国を訪問したことにより、コロナで抑制されていた相互の国際交流への強い思いが改めて確認できてよかった。これは、留学生確保に必ずつながるものと考えられる。  
・今年度の秋入学の留学生（主に湖北工業大学の学生だが）の日本語能力が予想外に低いことに驚かされたのだが、入学前に日本語の力をある程度つけておかないと、来日後の留学生活がとてつもないものになり、学生自身が不幸になる心配がある。

#### 〈次年度への課題〉

・主に湖北工業大学と黄岡師範学院についてだが、留学生の今後の派遣状況の推移を注視する必要がある。  
・入試広報室を通じて、留学前の日本語学習の強化を強く訴える必要があると考える。  
・中国からの留学生は大学院進学や帰国後の就職を考える学生がほとんどなのだが、別科から入ってくるインドネシアやスリランカの学生は日本での就職を強く望んでいる。そうした学生の就職支援をいかに行うか、学科なりにその方法と態勢を早急に考える必要があるように思う。

# 人間科学部 人間科学科の自己点検・自己評価

学部長・学科長

京極 真

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

《学科全体》オープンキャンパスでは「分野を越えて学ぶ」という人間科学の魅力をアピールし、各専攻で模擬授業や校内案内、在校生との交流を実施。

《心理学専攻》オープンキャンパスでは専攻紹介、模擬授業（毎回異なる内容）、心理検査・実験体験、在学生との交流を実施。在校生が中心となり対応。大学見学4校、高校ガイダンス21校（23回）、出張講義3校に対応。学科ブログによる情報発信は今年度やや不十分だった。

《理学療法学専攻》オープンキャンパスでは全教員が参画し、専攻の人材像を説明。3・4年生によるプレゼンや在校生とのフリートークを導入。高校ガイダンス4校、大学見学2校を実施。・大学案内パンフレットの「学びのポイント」「専攻の特徴」などを改善。

《作業療法学専攻》オープンキャンパスで専攻紹介、模擬授業、国家試験対策体験、在校生との交流を実施。高校ガイダンス9校（うち8校は理学療法と合同）、大学見学2校に対応。SNSで授業やオープンキャンパス情報を発信。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

《学科全体》105名（定員120名）、入学定員充足率：87.5%（昨年度62.5%）

《心理学専攻》新入生39名（定員40名）、入学定員充足率：97.5%（昨年度82.5%）、再入学1名

《理学療法学専攻》47名（定員40名）、入学定員充足率：117.5%（昨年度80.0%）

《作業療法学専攻》18名（定員40名）、入学定員充足率：45%（昨年度30%）

### 〈次年度への課題〉

《学科全体》学科ブランド確立、オープンキャンパス充実、入学後の満足度向上による口コミ効果の促進を目指す。

《心理学専攻》オープンキャンパスで日常の現象を心理学的に楽しむ企画を工夫し、他専攻との合同学習の魅力をアピールする。

《理学療法学専攻》オープンキャンパスで専攻の特徴を伝え、在校生の協力を効果的に活用。授業や国家試験対策を充実させ、在校生の満足度向上を図る。学科NEWSやInstagramを高校生に響く内容で発信し、高校ガイダンスや大学見学で専攻の魅力を伝える。

《作業療法学専攻》オープンキャンパスでは国家試験合格率100%など専攻の特徴を強調し、在校生が生の声が届ける仕組みを整備。高校ガイダンスや大学見学では受験生が興味を持つテーマに資料を再構成し、SNS発信で専攻の魅力を効果的にアピールする。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

#### 【教育課程に関する検証】

《心理学専攻》『基礎演習』を中心に学生間交流の促進に努力した。

《理学療法学専攻》「豊かな人間性」と「多様性に対応する力」を育む教育を実施。不本意入学の学生を早期発見し、本人と保護者に対応した。

《作業療法学専攻》教員間のサポート体制を構築し授業の質向上を図り、学生の意見やアンケートを基に教育内容を改善。『基礎演習』や『人間科学概論』で3専攻間の交流を意識した活動を取り入れた。

#### 【退学者対策】

《心理学専攻》チューターが個別面談を行い、生活指導を実施。大学に来られない学生には関係部署と連携し対応。問題のある学生は教員間で情報共有した。

《理学療法学専攻》退学者2名（進路変更）と転学科希望者2名に対し、本人・保護者と懇切に対応。

《作業療法学専攻》チューターが丁寧な指導を行い、退学や転学科希望者には面談で具体的助言を実施。保護者とも連携し早期解決に努めた。

【資格・免許・検定等】

《心理学専攻》公認心理師受検資格取得に必要な科目指導を実施し、1年生全員に心理学検定受験を指導した。

《理学療法学専攻》国家試験対策を1年次から計画的に実施し、OBが理学療法士の魅力を説明した。

《作業療法学専攻》国家試験対策を1年次から計画的に実施し、個々の進捗状況に応じた指導や資格取得支援を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

【教育課程に関する検証】

《学科全体》3専攻は3つのポリシーに基づく教育課程を着実に実施し、成果を確認した。

【退学者対策】

《心理学専攻》精神的疾患等で大学に通えなかった学生2名が退学（退学率6.5%）。他者とのコミュニケーションが苦手な学生が多く、早期発見・対応が重要と考える。

《理学療法学専攻》1年生2名が進路変更で退学、2名が転学科希望で懇切に対応し退学を回避。転学科理由は経営学やスポーツ科学への関心の高まりによるものだった。

《作業療法学専攻》退学者・転学科者は0名。

【資格・免許・検定等】

《心理学専攻》今年度初めて実施した心理学検定の1年次受検の結果は4月末に最終発表なので、確認できていない。このデータを踏まえて、1年次に心理学検定の受検を課すか、2年次に課すかについての検討が必要である。

《理学療法学専攻》1年次から理学療法士国家試験対策を導入できた。

《作業療法学専攻》1年次から作業療法士国家試験対策を導入できた。

〈次年度への課題〉

【教育課程に関する検証】

《学科全体》3専攻の学生間の交流はおおむね好評であった。引き続き3つのポリシーに則った教育課程を着実に実施し、学生一人ひとりが目標達成できるよう支援する。

【退学者対策】

《心理学専攻》退学者・除籍者の数値目標として5%台を目指す。精神的な問題を抱えている学生については、早期発見とともに、教員間やホットルーム・学生相談とも連携をとりながら、早めの対策が必要である。

《理学療法学専攻》退学者ゼロを目指す。1年次と2年次のチューター体制は、それぞれ副チューターとサポーターを配置する。

《作業療法学専攻》退学者・除籍者0%を目指す。学生指導を強化する。

【資格・免許・検定等】

《心理学専攻》公認心理士受験基礎資格の取得を目指している学生には、単位の取りこぼしがないよう指導する。心理学検定の受検をとおして、全国レベルでの基礎知識の修得レベルを把握し、大学での学びの質の向上を目指す。

《理学療法学専攻・作業療法学専攻》国家試験合格率100%達成を目指す。1年次から一貫して国家試験対策プログラムを計画的かつ体系的に実施する。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

《心理学専攻》科研費3件（継続：代表1件、分担2件）、その他の学外助成金3件（新規：代表2件、継続：分担1件）、査読あり論文6（単著・第1著者2編、共著4編）、査読なし論文5編（単著・第1著者4編、共著1編）、解説・報告書等3編（単著3編）、講演・口頭発表等24件（注）心理学専攻の集計は2024年1月～12月の期間である。

《理学療法学専攻》科研費：5件（代表3件、分担2件）、厚生労働科学研究費補助金：1件（分担1件）、他の助成金等：4件（企業との共同研究2件、岡山県助成金1件、学内助成金1件、寄付金1件）、論文：14編（査読あり12編）、講演・口頭発表等：10件、著書：1件

《作業療法学専攻》科研費5件（代表2件、分担3件）、査読あり論文14編（単著・第1著者1編、共著13編）、査読なし論文4編（単著・第1著者3編、共著1編）、著書4冊（単著1冊、共編著0冊、分担執筆3冊、翻訳0冊）、講演・口頭発表等22件

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

《心理学専攻》研究室の移動などにより研究の取り組みへの影響が心配されたが、最低限のことはできたのでは考える。

《理学療法学専攻》教員が研究活動に取り組んだが、論文化や発表については昨年度より総件数は減少した。教員各自で自覚をもって継続的に研究活動に取り組んでいる。企業との共同研究契約が2件、地方自治体の助成金が1件、地域貢献の学内助成金が1件で、社会実装や地域貢献をもたらす成果であった。

《作業療法学専攻》教員各自が研究活動に取り組み、おおむね良好な結果であった。一部教員においては研究成果が限定的であった。

### 〈次年度への課題〉

《学科全体》学科内での共同研究が実施されるような環境が望まれる。

《心理学専攻》研究環境については、特に施設的に実験的研究に支障をきたしており、改善が必要である。

《理学療法学専攻》引き続き教員各自で研究活動に取り組むとともに、学内外の研究者と積極的な学術交流を図る。研究活性化のために、科研費等の応募を増やす。

《作業療法学専攻》各自が研究活動に取り組む。科研費への応募をさらに促進する。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

《学科全体》公開講座（まちなかゼミナール）の実施。

《心理学専攻》〔高梁市〕学校ふれあい促進事業（高梁市教育委員会）特別支援教育推進事業（高梁市教育委員会）、母子保健事業：乳幼児健診（高梁市・健康づくり課）ペアレント・トレーニング講座（高梁市・NPO法人color）。〔岡山県〕思春期・ひきこもり相談（岡山県・備北保健所）、子どもの心とからだの総合相談（岡山県・備北保健所）、教育相談（岡山県・高梁高校）、心の健康相談（岡山県・総社南高校）。〔その他〕学校における心理教育授業（倉敷市真備東中学）、少年院におけるコンサルテーションおよび保護者支援（法務省岡山少年院）、児童養護施設におけるアートセラピー体験（岡山聖園子供の家）、岡山いのちの電話相談（岡山いのちの電話協会）。今年度より「地域住民の防災・減災に向けた意識向上」をテーマとした取り組みを開始（真庭市・高梁市）。

《理学療法学専攻》高梁市ミニディへ講師講師派遣（2回）。インターナショナルフェスタにおける中学生との交流で2年生が基礎演習授業で参画した。1年生授業で地域住民の生活課題を共有するため、住民1名を講師として招聘した。臨床実習指導者講習会の世話人で教員2名が参画。次年度以降の講習会講師招聘に備える。

《作業療法学専攻》〔園芸療法〕特別養護老人ホームで1年生有志とともに園芸療法を実践した。〔就労支援プロジェクト〕月1～2回、大学内業務を地域在住の精神障害者にシェアし、就労経験や適性探索を支援。SDGs学習の一環として利用者の講演も実施。〔高梁市介護予防事業〕3地区で講演・実演を開催し、成果検討会議や令和7年度の地域連携に向けた調査を実施。

〔認知症サポーター養成講座〕1年生対象の講座を開講し、高梁市の要望で啓蒙展示を開催。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

《心理学専攻》従来より行ってきた地元高梁市を中心とした上記の地域連携・地域貢献活動は、教員単独もしくは共同で行われ、その成果は広く地域の教育・保健（医療）・福祉分野で認められている。「防災・減災」に対する取り組みは、地域との連携が十分ではなかった点が問題であった。

《理学療法学専攻》各教員の専門性を活かした地域貢献活動が行われた。演習授業を通して地域課題を分析できる人材の育成に取り組むことができた。研究活動の内、地方自治体の助成金が1件、地域貢献の学内助成金が1件採択され、事業が行われたことは、新たな取り組みとして評価できる。

《作業療法学専攻》〔園芸療法〕学生の園芸療法体験と訪問が利用者の楽しみとなった。〔就労支援プロジェクト〕月1～2回の活動が精神障害者の再入院阻止に貢献。活動回数は減少したが、地域作業所から感謝され、成果が評価された。〔高梁市介護予防事業〕検討会議で糖尿病予防がフレイル予防の鍵と判明。生活習慣講話や身体作り実演、リハビリ動機づけ調査をまとめた。〔認知症サポーター養成講座〕講義連動型の仕組みで受講生増加に寄与し、10月にはラーニングコモンズで働き世代向け啓蒙ブースを設置・継続した。

### 〈次年度への課題〉

《心理学専攻》地域連携・地域貢献と、それに努める教員の本来の研究的関心に割く時間とのバランスを考慮したうえでの、より一層の地域貢献活動が期待される。「防災・減災に向けた意識向上への取り組み」は、今後、地域貢献活動の柱となりうると考える。

《理学療法学専攻》地域連携・地域貢献を推進するために、今年度の取り組みを継続する。授業を通して、地域の人々のウェルビーイング向上に関わる身体的、心理的、および社会的な課題を発見し分析する人材育成の充実を図る。異業種協働のための基礎力を身につけるためのキャリア教育を推進する。

《作業療法学専攻》〔園芸療法〕令和7年度春学期からの園芸療法実習で施設訪問を行い、利用者の生活の質と施設サービスの向上に寄与するため、協力体制を強化する。〔就労支援プロジェクト〕地域社会への持続的貢献と連携の新たな形態を模索する。〔高梁市介護予防事業〕令和6年度の結果を基に、虚弱高齢者への健康支援の方針を協議予定。〔認知症サポーター養成講座〕令和6年度の継続実施とともに内容のさらなる洗練を図る。

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

《心理学専攻》特記事項なし。

《理学療法学専攻》1年生は『グローバルスタディーズ入門』科目で国際的な視点を学んだ。

《作業療法学専攻》6月20日、21日にフィンドレー大学の先生方を迎え、学内や近隣施設を見学。20日は学内案内、特養グリーンヒル順正や老人保健施設ゆうゆう村を訪問し、夕方には先生方が作業療法に関する講義を実施。21日は創心会や岡山県精神科医療センターなどを見学後、岡山キャンパスで外国語学部の学生・教員と交流。また、宿泊予定施設（JK寮・国際交流会館）の見学も行った。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

《心理学専攻》特記事項なし。

《理学療法学専攻》国際化の視点がさらに必要である。

《作業療法学専攻》今年度予定していた取り組みは、すべて実施することができた。

### 〈次年度への課題〉

《心理学専攻》国際化教育を行う機会の1つとして、国際バカロレア教育についての学びを取り入れる。

《理学療法学専攻》2年生で国際化教育を行う機会（「おしゃべりカフェ」への参加など）を増やす。

《作業療法学専攻》2025年度に予定されていた研修団派遣は中止となった。今後、2026年度に向けてフィンドレー大学や学生課と連携し、派遣調整を進める予定である。

# 通信教育部の自己点検・自己評価

通信教育部長

栗田 喜勝

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

(1) 本学科の教育目標は、ブランドビジョンに定める「実践的な知識を自ら学ぶ力」、「多様化する社会で生きぬく力」、「自分の可能性を信じる力」の育成を基盤として、子どもの主体的な学びを援助する保育内容・教育内容に関わる専門知識を修得し、子どもへの直接的な発達支援や、保護者への子育て支援を行う実践力を身につけることであり、目標に沿った人材養成を行っている。

(2) 本学科のカリキュラムは、4年制通信教育課程として、大学卒業の学位取得にふさわしい教育内容になっている。具体的には、教養科目群14科目(テキスト科目11、スクーリング科目3)は、基礎的な教養を身につけるために言語・情報関係科目群、社会・人文関係科目群、自然科学関係科目群から成っている。また、専門科目群104科目(テキスト科目71、スクーリング科目27、実習科目6)は、保育士資格・教員免許取得にかかわる専門科目に加えて、心理・保育・教育・子ども福祉について多面的に学ぶための科目が配置されている。

① テキスト科目については、科目担当教員が指定する教科書や参考書を用いた自宅学修であるが、科目単位認定試験については、対面実施により年度当初の計画通り実施することができた。

② スクーリング科目については、対面授業で行うことにより計画通り実施できた。

③ 実習科目のうち保育実習については、計画通り実施した。

(3) 資格・免許の取得状況については、概ね学生の希望通り取得することができた。内訳としては、保育士資格取得者4名、幼稚園教諭一種免許状取得者4名、小学校教諭一種免許状取得者2名であった。

(4) 退学者対策としては、ゼミ担当教員の個別指導体制により、学生が気軽に相談できる環境を整えている。取り組みの成果として学修意欲の喪失による退学は無かったが、心身の不調による退学が2名、学納金未納による除籍が1名あった。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

4年間の学びを通して、保育・初等教育に関する各種の専門知識や技術を修得し、専門職者に必要な職業倫理、子ども観等を身につけるとともに、向上心を持ち自己実現を目指す態度を涵養することができており、各種の資格や免許も概ね学生の希望通りに取得できている。また、教員の懇切丁寧な指導により、退学者、除籍者とも減少していることは評価できる。

### 〈次年度への課題〉

令和2年度学生募集停止となったが、在学生の教育については今後とも人格の陶冶と専門性向上によるバランスの取れた人材養成に努力する必要がある。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

1) 学科の研究活動としては、(1) 教員の個人研究、(2) 学科教員の共同研究が上げられる。

(1) 教員の個人研究

今年度の学科教員の個人研究については、著書2件、学術論文3件、学会発表2件であった。

(2) 学科教員の共同研究

学科教員の共同研究については、「吉備国際大学たかはし子育てカレッジ事業」に関わる研究や、高梁市における「次世代育成支援対策」に関わる研究等を行っており、今年度は親子を対象とした「子育て講座」1回、保育者を対象とした「子育て支援者講座」2回を実施した。親子を対象とした子育て支援活動の取り組みや、地域の保育園、認定こども園、幼稚園等の保育者を対象としたステップアップ講座は、中山間地域における地域密着型子育て支援拠点形成のモデルとして地域の子育て支援に貢献することが期待されており、令和5年度おかやま子育てカレッジ地域貢献事業補助金(岡山県指令備中局地第123号)の交付を受けた。

□

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

本学科の特性上、所属教員の専門分野は心理系、保育系、教育系、福祉系等の多岐にわたるが、学術研究活動に精力的に取り組んでいることは評価できる。また、岡山県の補助金による地域の子育て支援事業を学科教員が協働して展開していることも評価できる。

### 〈次年度への課題〉

教員の個人研究ならびに共同研究の促進を図り、科研費申請・採択を目指す必要がある。また、研究成果の学生教育への還元、地域の子育て支援活動へのフィードバックを通じて、学生の学士力や地域の子育て支援力の向上を図る必要がある。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

#### (1) 子育て講座の実施

平成22年7月に高梁市内の子育て家庭に対する支援を目的として、岡山県備中県民局、高梁市、高梁市内の子育て支援団体等、12団体の協働により大学内に設置された「吉備国際大学たかはし子育てカレッジ実行委員会」による様々な活動を例年展開している。本年度は高梁市子育て支援センターならびに母親クラブと連携して、親子ふれあい型のプレパパ・プレママ子育て講座を1回実施した。

#### (2) 子育て支援者講座の実施

地元の保育園・認定こども園・幼稚園等に勤務する保育者・子育て支援関係者を対象としたステップアップ研修の一環として、外部専門家による子育て支援者講座を2回実施した。

#### (3) 各種委員等

学科教員が委員を受託している各種委員については次の通りである。  
高梁市子ども・子育て会議委員、高梁市情報公開・個人情報保護審査会委員、高梁市行政不服審査会委員、岡山県保育士養成協議会理事、中四国保育士養成協議会協議員

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

親子ふれあい型の子育て講座は、参加者(親子)に好評で定着してきている。また、高梁市内外の各種委員会や団体から委員の委嘱を受けて活動に取り組んでいることは評価できる。今後とも引き続き積極的に取り組む必要がある。

### 〈次年度への課題〉

「吉備国際大学たかはし子育てカレッジ実行委員会」による子育て講座や子育て支援者講座を実施しているが、今後地域の子育て支援の充実にさらに努める必要がある。

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

異文化・国際事情の理解を深め、国際化・グローバル化時代の様々な国際問題の理解や取り組むべき課題に関する知識・洞察力を養うために、「外国語(英語Ⅰ,Ⅱ)」をはじめ、「多文化理解」や「国際社会学」等の授業科目を配置し、国際化教育の推進を図っている。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

授業科目の中に、「多文化理解」や「国際社会学」等の科目が配置されていることは、国際化の推進に資する取り組みとして評価できる。

### 〈次年度への課題〉

令和2年度より学生の募集を停止しているが、国際化に資する授業科目の未履修学生には履修指導を行うとともに、国際化の理解を深めるよう自己学修を促す必要がある。

# 社会学研究科の自己点検・自己評価

研究科長

姜 明 求

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

教員一丸となって定員確保(100%)のために大学の公開講座・講演、Researchマップ、学科授業(学内進学)、学会出席などを通じて情報発信をした。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

教員一丸となって定員確保のために公開講座、講演、学科授業(学内進学)などを通じて積極的に情報発信をした。

学生確保の点検と評価は以下の通りであった。定員確保(100%)の点検結果、入学者は前期課程3名(25%、留学生=女1人、男1人)で、前年度が66%。3名は学内進学の留学生。後期課程の入学生は1名(25%、社会人)であった。前年度は0名(0%)。

後期課程の社会人(日本人)の1名の入学はやや評価ができる。しかし、このような結果は大変不満足であり、前期・後期課程共に定員確保の目標(100%)を達成することができなかった。これは深く反省すべき点である。現在、在学生は、博士前期課程が11名(45%、日本人1名、留学生10名)、後期課程が1名(0.08%、社会人=日本人)である。

### 〈次年度への課題〉

定員確保は大きな課題(前期・後期)である。次年度も引き続き、博士前期課程(12名)・後期課程(4名)の入学定員100%を目指す。

次年度も、教員一丸となって定員確保(前期・後期課程共に、100%)のために公開講座、講演、学科授業(学内進学)、学会出席などを活用して定員確保につながるような情報発信を積極的にしていく。特に、学内進学の院生増加のために積極的に授業中に社会学研究科の魅力の情報発信をしていく。また、博士(後期)課程に社会人の確保に全力を尽くす。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

社会学研究科の3つのポリシーに合わせて、社会のニーズに応える教育及び院生の満足度が高くなる学習体制、研究指導體制を構築した。また、日本語教育(留学生)に力を入れるとともに、懇切丁寧な研究指導をした。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

教育の充実の点検と評価は以下の通りである。懇切丁寧な論文指導と留学生の日本語学習支援など教育の充実を点検した結果、効果が見られたことを高く評価することができる。充実した研究環境の提供、スポーツ大会の開催など院生個々の関心や興味に注意を払った教育改善は院生の動機づけと授業満足度の向上につながった。また、留学生の日本語能力の向上と留学生の退学ゼロ%にもつながった。

① 専門科目(24単位)及び演習(8単位)の32単位を取得し、修士論文の審査に合格した者に対して修士学位(社会学)を授与した(留学生7名、秋2名、春5名)。対象の全員(7名)が修了できた。また、院生が自主的に学習し、プレゼンテーション能力の向上のための授業を行った。授業アンケート調査では春の教員の平均値が4.93、GPAの平均値が春学期3.88(2024年)であった。懇切丁寧な研究指導と自主的に研究できる教育環境の充実が院生の動機づけの向上と学習満足度の向上につながった。

② 退学者を防止するために、各教員が院生の修学状況を把握し、個別面談の実施、教員間で情報を共有しながら、懇切丁寧な指導を行なった。しかし、経済的理由による除籍者が1名(日本人)となり、退学者(除籍者)ゼロ%の目標を達成することができなかった。

- ③ 日本語教育の充実が留学生の日本語能力の向上につながる効果があり、修士論文の完成ができた(7名)。7名の内、5名は就職(国内)、1名が帰国(中国)、1名が出産予定。
- ④ 社会の多様なニーズに対応するために不開講科目は引き続き隔年開講して専門教育の充実を図った。
- ⑤ 社会学研究科論叢26号を発行し、OG2名、OB2名が投稿した。OG、OBの投稿は社会学研究科のブランド力の向上にもつながったと考えられる。

### 〈次年度への課題〉

建学の理念、社会学研究科の3つのポリシーに合わせて、社会学研究科=ブランド力の向上につながるような取り組みを引き続き行う。

次年度も、日本一面倒見の良い社会学研究科を目指して、懇切丁寧な研究指導(主指導教員と副指導教員2名)と留学生の日本語学習支援と、学習満足度の向上のために良い研究環境の提供の取り組みを全教員が引き続き行う。また、退学者(除籍者)ゼロ%を目指して全教員が情報を共有し、個別面談を実施して問題の学生を早期発見し、懇切丁寧な指導を行う。これは面倒見の良い社会学研究科の取り組みであり、引き続き行う。また、情報発信と社会学研究科のブランド力の向上のために大学院論叢27号を刊行する(OBとOGの投稿)。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

教員各自が科研などの研究費の申請と、著書・論文・学会発表を目指した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

研究推進の点検と評価は以下の通りであった。

科研費採択・継続 1件、助成金 0件、受択研究 0件、外部資金 0件

論文 3編

学会発表 9回

研究推進の点検結果、時間と様々な活動が制限される中、研究の業績(論文、学会発表)は一定の評価ができる。ただし、全教員が年に1編の論文、著書を公表することが叶わず、目標を達成することが出来なかった。ただし、学会の発表が9回あったことをやや評価できる。しかしながら、科研の採択、外部資金、助成金などの獲得においてはより一層の努力が必要であり、反省点として指摘できる。

### 〈次年度への課題〉

社会学研究科において科研の採択、助成金、外部資金の獲得は課題である。次年度も、教員各自が科研の採択、外部資金獲得のためにより一層の努力をすると共に、教員各自が研究力レベルアップと、社会学研究科のブランド力を高めるために論文、著書の公表及び学会発表が行える時間の確保、環境整備に取り組む。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

各教員が教育・研究の専門分野を活かして、シンポジウム、公開講座、行政の委員などの地域連携、地域社会貢献活動を行った。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

地域連携・地域貢献の推進の点検と評価は以下の通りであった。地域連携・地域貢献を点検結果、各教員は教育・研究の専門分野を活かして地域連携、地域社会の貢献活動を行った。特に、公開講座(まちなかゼミナール)、高梁市民を対象にする高梁健康スポーツ講座+高梁筋力アップ講座、高梁川流域連携中枢都市圏事業合同シンポジウムを行った。また、岡山県環境審議会議員、備中地域みらいづくり支援事業審査委員会委員など行政の委員を担当した。このような活動は地域連携、地域社会に大きな貢献であり、一定の評価ができる。ただし、地域連携、地域社会の貢献活動の回数が少なく、高く評価することができないことが反省点として指摘できる。

### 〈次年度への課題〉

地域連携、地域社会の貢献活動の回数の増加は課題である。次年度も、情報発信とブランド力の向上のために公開講座、ボランティア活動などの地域連携、地域社会の貢献活動には全教員が積極的に取り組む。このような活動を通じて大学の持つ知の社会への還元と共に、地域社会に貢献できる人材育成の充実を図る。

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

研究・学習を通して異文化・国際事情などの理解、地域住民との交流を図り、国際化を目指した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

国際化の推進の点検と評価は以下の通りであった。社会学研究科の在学生は留学生が多く、国際化の一環として授業を通して異文化の理解の促進、また、広島西教寺のボランティア活動を通じて日本文化の理解と共に地域住民との交流を図った。

このような国際化の取り組みは一定の評価ができる。社会学研究科の留学生を国別にみると、中国6名(男5、女1)、ベトナム2名(女)、インドネシア2名(男)となっている。

### 〈次年度への課題〉

次年度も、引き続き、授業を通して異文化・国際事情などの理解の促進、留学生と日本人学生との交流(相互の文化の理解)、地域住民との交流などを図り、国際化の充実化に取り組んでいく。また、国際社会(自国)で活躍できる人材の養成に取り組む。

# 保健科学研究科の自己点検・自己評価

研究科長

京極 真

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・博士（前期）課程ではⅡ期からⅣ期、博士（後期）課程では（博士）Ⅰ期にわたり、入試を実施した。多様な受験機会を提供することで、幅広い受験生に対応した。
- ・ホームページやパンフレットを活用し、博士（前期）課程および博士（後期）課程の魅力や特徴を積極的に発信した。
- ・学術誌や学会等において学生募集案内を掲載し、専門性の高い層へのアプローチした。
- ・EメールやZoomを通じて受験生からの相談に対応し、個別の質問や不安解消に努めた。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・博士（前期）課程：入学定員6名、入学者数0名、入学定員充足率0%（昨年度の充足率16.7%）
- ・博士（後期）課程：入学定員3名、入学者数3名、入学定員充足率100%（昨年度の充足率100%）
- ・学部大学院一貫教育制度による科目等履修生の受入：2名（理学療法学科3年次）

### 〈次年度への課題〉

- ・入学定員充足率100%の達成を目指す。入学定員充足率100%を目標とし、より多くの受験生が本学への入学を希望するような環境づくりと情報発信を強化する。
- ・研究科独自の魅力を発信する。受験生が積極的に受験を決意できるよう、本研究科が持つ独自性や魅力（特色あるカリキュラム、研究環境等）について具体的かつ効果的な広報活動を展開する。
- ・保健医療福祉学部、人間科学と連携し、学部から大学院にかけての一貫した教育体系のもと、科目等履修生の受け入れを充実させる。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・本学の教育理念に基づき、3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）に沿った講義、演習、研究指導を実施した。
- ・研究計画発表会、中間発表会、博士論文事前審査会、学位審査を開催し、学位審査は厳格に行われた。
- ・院生との連絡ノートを作成し、相談体制の強化を図った。
- ・退学予防策として、個別指導を重視し、懇切丁寧な研究指導体制を構築した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・博士（前期）課程の修了生は1名、博士（後期）課程の修了生は0名であった。
- ・博士（後期）課程では、2名が博士論文の審査を受ける予定であったが、1名が辞退した。また、もう1名は審査不合格となり、単位取得後満期退学となった。
- ・連絡ノートを活用し、院生からの要望を適切に把握することができた。
- ・博士（前期）課程の1名をTA（教育助手）として活用することができた。
- ・退学者は0名であり、退学防止の取り組みが一定の成果を上げたと評価できる。

### 〈次年度への課題〉

- ・研究指導体制を強化し、1人の主指導教員と2人の副指導教員を配置し、学位論文の完成を支援する。
- ・学位審査の質を向上させるため、1人の主査と2人の副査が厳正に審査を実施し、学位の価値向上に努める。

- ・授業では多様なメディアを活用し、講義とアクティブラーニングを組み合わせることで、大学院生の研究能力および技能の向上を図る。
- ・TAを積極的に活用し、大学・大学院の教育方法を学ぶ機会を提供する。
- ・院生とのコミュニケーションノートの使用を継続し、相談体制のさらなる強化を図る。
- ・引き続き退学者数ゼロを目標に、個別指導やサポート体制の充実を図る。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・科研費12件、厚生労働科学研究費補助金：1件、その他助成金等4件
- ・論文38編、雑誌投稿2編、講演・口頭発表等44件、著書6冊 など

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・研究活動は、おおむね良好な結果であったが、昨年度より総件数は減少した。
- ・各教員が自覚をもって研究活動に取り組み、成果を公表した。

### 〈次年度への課題〉

- ・来年度も、今年度と同様に、教員それぞれが自身の研究活動に取り組みとともに、研究科内での積極的な学术交流を促進し、より良い成果を目指すための工夫を行う。
- ・研究の活性化を図るため、科研費などの競争的資金の獲得を目指し、その応募を積極的に奨励する。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・岡山県看護協会や高梁市医師会との連携による委員会活動や研修講師の実施
- ・地域の高校への出前講座
- ・認知症サポーター養成講座や在宅医療・介護推進に関わる活動を通じた地域貢献
- ・「まちなかゼミナール」での教員による公開講座
- ・高梁市のミニディ事業への講師派遣
- ・インターナショナルフェスタにおける中学生との交流（2年生が基礎演習授業で参画）
- ・1年生授業への地域住民の招聘（地域住民の生活課題を共有）
- ・【園芸療法】特別養護老人ホームへの訪問、1・2年生による高齢者との交流支援
- ・【就労支援プロジェクト】大学内業務を地域在住の精神障害者とシェアし、就労経験や適性探索をサポート
- ・【高梁市介護予防事業】3地区での講演・実演・成果検討会議、令和7年度に向けた地域連携の調査
- ・【認知症サポーター養成講座】1年生を対象とした講座や高梁市内での啓蒙展示

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・各教員が専門分野を活かし、地域社会への貢献活動を積極的に展開した。
- ・教員や大学院生が地域連携・貢献活動に関連する研究活動を推進した。

### 〈次年度への課題〉

- ・今年度実施した地域連携・貢献活動を継続し、さらに発展させることで、地域住民との信頼関係を深化させる。

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・大学院生の国際的な活躍を目指し、学位論文に関連する英語論文の執筆支援を行った。
- ・英語での論文を基に議論を行い、国際的な最新の動向についての教育を提供した。
- ・フィンドレー大学の先生方を迎え、学内や近隣施設を見学した。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・大学院生の国際的な活躍を目指し、学位論文に関連する英語論文の執筆支援を行った。
- ・英語での論文を基に議論を行い、国際的な最新の動向についての教育を提供した。
- ・予定通り国際交流を深めることができた。

#### 〈次年度への課題〉

- ・英語での論文執筆支援を引き続き実施する。
- ・国際社会で活躍する研究者を育成するために、英語論文の読解を通じて世界の研究動向に対する理解を深める機会を提供する。
- ・2025年度に予定されていたフィンドレー大学からの研修団派遣は中止となった。今後、2026年度に向けて派遣調整を進める予定である。

# (通信制)保健科学研究科の自己点検・自己評価

研究科長

京極 真

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・入学試験は第1期から第3期にわたって実施した。
- ・ウェブサイトやパンフレットを通じて、本研究科の紹介を行った。
- ・ソーシャルメディアを活用して広報活動を行った。
- ・学術雑誌や学会において、学生募集に関する告知を行うなどの宣伝活動を展開した。
- ・EメールやTeamsを活用し、受験生からの相談に対応した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・入学定員15名、入学者数6名、入学定員充足率40%（昨年度の充足率73.3%）

### 〈次年度への課題〉

- ・入学者数が定員の100%に達することを目標とする。
- ・広報活動をさらに強化し、通信制の利点を前面に押し出して、本研究科の特長を広く周知する。
- ・大学院生の確保を目指し、口コミ効果を高めるために、在籍中の大学院生の満足度向上に取り組む。
- ・受験生が積極的に受験を決意できるよう、研究科ならではの魅力を積極的にアピールする。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・定められたポリシーに基づき、研究教育や研究指導を実施するとともに、研究計画発表会、中間発表会、学位審査を行った。また、学位論文の審査もポリシーに従い厳格に実施した。
- ・日常的にEメールやTeamsなどのデジタルメディアを活用し、授業や研究指導を行った。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・修了生は理学療法学専攻2名、作業療法学専攻1名の計3名だった。
- ・退学者・除籍者は0名であった。

### 〈次年度への課題〉

- ・丁寧な研究指導を通じて、大学院生の満足度向上に努める。
- ・研究指導体制は、1人の主指導教員と2人の副指導教員による構成とし、細やかで充実した内容となるよう工夫しながら、学位論文の提出に向けて取り組む。
- ・学位審査は1人の主査と2人の副査が担当し、厳格に実施することで学位の質をさらに高める。
- ・授業では多様なメディアを活用し、高品質な通信制教育を提供する。
- ・退学者・除籍者0名の達成を目標とする。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・科研費12件、厚生労働科学研究費補助金：1件、その他助成金等4件
- ・論文38編、雑誌投稿2編、講演・口頭発表等44件、著書6冊 など

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・研究活動は、おおむね良好な結果であったが、昨年度より総件数は減少した。
- ・各教員が自覚をもって研究活動に取り組み、成果を公表した。

### 〈次年度への課題〉

- ・来年度も、今年度と同様に、教員それぞれが自身の研究活動に取り組むとともに、研究科内での積極的な学术交流を促進し、より良い成果を目指すための工夫を行う。
- ・研究の活性化を図るため、科研費などの競争的資金の獲得を目指し、その応募を積極的に奨励する。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・岡山県看護協会や高梁市医師会との連携による委員会活動や研修講師の実施
- ・地域の高校への出前講座
- ・認知症サポーター養成講座や在宅医療・介護推進に関わる活動を通じた地域貢献
- ・「まちなかゼミナール」での教員による公開講座
- ・高梁市のミニディ事業への講師派遣
- ・インターナショナルフェスタにおける中学生との交流（2年生が基礎演習授業で参画）
- ・1年生授業への地域住民の招聘（地域住民の生活課題を共有）
- ・【園芸療法】特別養護老人ホームへの訪問、1・2年生による高齢者との交流支援
- ・【就労支援プロジェクト】大学内業務を地域在住の精神障害者とシェアし、就労経験や適性探索をサポート
- ・【高梁市介護予防事業】3地区での講演・実演・成果検討会議、令和7年度に向けた地域連携の調査
- ・【認知症サポーター養成講座】1年生を対象とした講座や高梁市内での啓蒙展示

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・各教員が専門分野を活かし、地域社会への貢献活動を積極的に展開した。
- ・教員や大学院生が地域連携・貢献活動に関連する研究活動を推進した。

### 〈次年度への課題〉

- ・今年度実施した地域連携・貢献活動を継続し、さらに発展させることで、地域住民との信頼関係を深化させる。

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・授業や研究指導を通じて、国際的な最新トレンドに関する知識を学生に伝えた。
- ・英語の論文を題材に議論を行い、国際的な最新動向についての教育を実施した。
- ・フィンドレー大学の先生方を迎え、学内や近隣施設を見学した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・国際的な動向を踏まえ、将来の研究で期待される内容についての理解を深めた。
- ・予定通り国際交流を深めることができた。

### 〈次年度への課題〉

- ・国際社会で活躍する研究者を育成するため、英語論文の読解を通じて世界の研究動向を理解する機会を提供する。
- ・2025年度に予定されていたフィンドレー大学からの研修団派遣は中止となった。今後、2026年度に向けて派遣調整を進める予定である。

# 心理学研究科の自己点検・自己評価

研究科長

森井 康幸

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

- \*入試広報室による募集・広報、大学ホームページ上での研究科の案内、それに内部の学部生に向けては学園内推薦入試に有利な心理学検定受検の案内などを行った。
- \*学園内推薦入試(6月)では学内から4名、九州医療科学大学から2名の計6名の応募があった。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- \*博士(前期)課程の入学定員：15名に対し、入学者は4月入学が10名。入学定員充足率は66.7%。
- \*昨年の4月入学者数と比較すると5名増加で、充足率は33.3%上昇。
- \*博士(後期)課程は、入学定員2名に対して、入学者0名、入学定員充足率は0%。

引き続き、入学者数や定員充足率の向上に努めたい。

### 〈次年度への課題〉

- \*本学の学部生に対しては、普段の授業等のかかわりの中で、心理学研究の面白さ、心理的支援の社会的重要性などを理解させ、大学院進学に関心を持たせるよう心掛ける。
- \*九州医療科学大学の臨床心理学科にも、今年以上に積極的に博士(前期)課程への入学生の募集を働き掛けたい。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- \*博士(前期)課程には、1年次生が5名、2年次生が4名(10月入学生1名含む)の計9名が在籍。
- \*教育効果の1つの指標としてのGPAの値は、博士(前期)課程の1年次生4名の平均GPAは3.24であった(範囲は2.9~4.0)。2年次生4名の平均GPAは3.6であった(範囲は3.4~4.0)。
- \*3月2日に行われた公認心理師の試験結果は、3名受験し3名とも合格した。
- \*就職に関しては、3名とも就職(就職率100%)。2名が、岡山県警察本部が令和7年度から新たに設置する「心理支援官」に、1名は県内の病院に臨床心理士として就職した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- \*昨年度末の教員研究室や研究生室の移動による物品の片付け・整理などの混乱があっ中、全員のGPAの平均は3.0以上であり、教育効果は高い水準を維持していたといえる。
- \*心理学コースの学生(1年次生)については、実験室の環境の問題から十分なデータをとれなかった。実験環境の整備・改善をおこなうことは喫緊の必須の課題である。
- \*公認心理師試験では、令和6年度修了で公認心理師試験を受験した3名のうち3名が合格し合格率は100%であった(全国平均は、67%)。

### 〈次年度への課題〉

- \*公認心理師の受験対策として、院生同士の受験に向けた勉強会の立ち上げを促しているが、必ずしも十分に行われていない。実施方法等を検討したうえで、こうした試みを次年度も強く促したい。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

科研費3件（代表1件、分担2件）  
その他の学外助成金3件（新規：代表2件、継続：分担1件）  
査読あり論文6（単著・第1著者2編、共著4編）  
査読なし論文5編（単著・第1著者4編、共著1編）  
解説・報告書等3編（単著3編）  
講演・口頭発表等24件

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

\*「大学院担当教員は、年間に1回以上の学会発表、1編の論文作成をノルマとして課す」という目標については、大学院担当教員9名の平均で見ると達成している。

### 〈次年度への課題〉

\*第3期中期目標・中期計画にある「研究推進」の項で掲げた目標「社会実装の推進」の実行計画『研究成果の地域社会への実装』の具現化に向けた取り組みを強力に進めていく。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

\*従前どおり、学校ふれあい促進事業（高梁市教育委員会）特別支援教育推進事業（高梁市教育委員会）、教育相談（岡山県・高梁高校）、母子保健事業：乳幼児健診（高梁市・健康づくり課）、子どもの心とからだの総合相談（岡山県・備北保健所）、ペアレント・トレーニング講座（高梁市・NPO法人color）、学校における心理教育授業（倉敷市真備東中学）、少年院におけるコンサルテーションおよび保護者支援（法務省岡山少年院）、児童養護施設におけるアートセラピー体験（岡山聖園子供の家）、岡山いのちの電話相談（岡山いのちの電話協会）、思春期・ひきこもり相談（岡山県・備北保健所）、心の健康相談（岡山県・総社南高校）で地域連携・地域貢献活動を行った。

\*新規の取り組みとして、「地域住民の防災・減災に向けた意識向上」をテーマとした取り組みを開始（真庭市・高梁市）。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

\*地域貢献家畜働は、地元高梁市を中心に、教員単独もしくは共同で行われ、その成果は広く地域の教育・保健（医療）・福祉分野で認められつつある。大いに評価できると考える。

\*「地域住民の防災・減災に向けた意識向上」をテーマとした取り組みについては、地域住民との連携が十分にできなかった。

### 〈次年度への課題〉

\*地域貢献と、それに努める教員の本来の研究的関心に割く時間とのバランスを考慮して、これからの地域貢献を漸増する方向で活動していくことが期待される。

\*「防災・減災に向けた意識向上への取り組み」は地域貢献活動の柱となりうると考える。

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

\*研究科としての取り組みは特になかった。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

\*特になし。

### 〈次年度への課題〉

\*現時点では、心理学研究科は「地域連携・地域貢献」の方に重心が偏っているが、国際的視野に立った研究へと広げる必要がある。

# (通信制)心理学研究科の自己点検・自己評価

研究科長

森井 康幸

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

- \* 大学ホーム・ページにおける通信制・心理学研究科博士（後期）課程の紹介。
- \* 通信制・博士（後期）課程のパンフレットの発行。
- \* 通信事務、あるいは入試広報室による各種の大学院説明会。
- \* オープン・キャンパス時や普段の土曜・日曜日における面談。
- \* 受験資格や教育課程に関する問い合わせに対するメールによる回答。
- \* 研究内容・計画等に関する問い合わせに対するオンラインでの面談。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- \* 入学を検討している方からの問い合わせは数件あったが、受験・入学者は0名であった。
- \* 博士課程（後期）ということで、学位論文の作成に当たっては、その専門性の高さゆえに教員側とのマッチングの問題は致し方ないとする。

### 〈次年度への課題〉

上記の学生確保に向けた取り組みを充実させ、定員充足に向けて取り組みたい。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- \* 今年度から年2回（夏・冬）の対面によるスクーリングを再開した。
- \* 指導体制も専任教員4名から、退職された教員の補充も含めて5名体制へと強化した。
- \* スクーリングでは、在籍している3名の院生（1年2名、3年1名）、およびこれまで本研究科で指導いただいていた2名の元教員にも参加いただき、活発な議論が行われた。
- \* 指導に当たっては、スクーリングとテキスト科目によるレポート指導の他、随時オンラインでの指導も行っている。
- \* 従来の日程の場合、常に大学の行事と重複するため、今年度からスクーリングの時期を1週間ほど前倒して実施するように変更した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- \* 本研究科の元教員のスクーリング参加により、多面的な指導が可能になり、非常に有意義であった。
- \* 在籍5年目の院生（3年）も、来年度には博士論文の提出が可能な状況である。

### 〈次年度への課題〉

- \* 来年度6年目となる3年の院生には、学位取得できるようにしっかり指導していく。なお、この学生は、査読付き論文に受理されたことから、博論作成に向けて大きく前進した。
- \* 1年の2名もテーマ等の絞り込みが進み、今後も懇切丁寧な指導を行っていく。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- \* 科研費2件（いずれも継続：分担2件）
- \* その他の学外助成金3件（新規：代表2件、継続：分担1件）

- \* 査読あり論文4（単著・第1著者1編、共著3編）
- \* 査読なし論文3編（単著・第1著者1編、共著2編）
- \* 解説・報告書等3編（単著3編）
- \* 講演・口頭発表等15件

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- \* 研究室移動に伴う雑多な作業の加わる中、また実験室環境の未整備の中、それなりの成果を上げたものと評価する。

〈次年度への課題〉

- \* 研究については、担当教員の自覚の問題であり、研究と教育のバランスが課題である。

## 地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- \* 通信制という研究科の性格から、院生個々の高梁市を中心とした地域貢献は難しい。担当教員の地域貢献は、通学制の研究科同様、前年の維持・発展に努める。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- \* 特になし。

〈次年度への課題〉

- \* 特になし。

## 国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- \* 通信制心理学研究科としての取り組みは特になし。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- \* 特になし。

〈次年度への課題〉

- \* 特になし。

# 地域創成農学研究科の自己点検・自己評価

研究科長

相野 公孝

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・大学のホームページ及びパンフレットの発行により研究科の案内を行なった。
- ・市民講演会や他研究機関講演会などの機会を活かし、研究科の案内を試みた。
- ・在学生には課題研究や卒業研究指導を通じていかに研究が楽しいかを伝え、大学院進学の動機付けとした。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・博士課程前期 1人、後期課程 0人の出願があった。
- ・就職率が良く、在学生から大学院進学者が極めて少ない状況であった。また、社会人においては、理系研究への興味及び学位取得意欲の減退が著しい状況であった。

### 〈次年度への課題〉

- ・引き続き在学生には研究の楽しさ、重要性を発信するとともに、社会人の生涯教育の場として利用できるように検討していきたい。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・学部大学院一貫教育がスムーズに行えるようにシステム化の構築に取り組んだ。
- ・研究科の専門分野を拡大するためにカリキュラム変更に着手した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・学部大学院一貫教育制度に関する地域創成農学研究科の内規（案）を作成した。
- ・新たに地域環境学及び水圏生物学分野を追加した新しいカリキュラム案を作成した。

### 〈次年度への課題〉

- ・令和8年度から学部大学院一貫教育及びカリキュラム変更ができるように、体制を整備する必要がある。

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・科学研究費取得のため申請数を増加するために、学術研究助成基金以外の各省庁及び地方自治体が行なっている競争資金の応募への申請を推奨した。
- ・各学会への査読付き論文への投稿、積極的な学会発表を行うよう啓蒙した。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・研究活動実績は、学術論文が7編、学会等発表が12題、書籍が2編、学術雑誌1編、紀要1題、その他研究会講演14題であった。
- ・科学研究費応募は5件（前年3件）であり、継続が1件であった。助成・受託研究は4件、学内共同研究が1件、SDGs教育研究活動が1件採択された。他大学との共同研究が1件であった。昨年に比べ研究費確保への意識は授受に高まりつつあると考えられた。

#### 〈次年度への課題〉

- ・今後とも学術研究助成金はもとよりあらゆる競争的資金に対してチャレンジできる環境を醸成する必要がある。

### 地域連携・地域貢献の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・地域企業及び地域との連携をさらに強化するために、地域のイベントに積極的に参加し、学術的な面からも地域企業との共同研究を増加させる努力を行った。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・酵母の遺伝子レベルでの分類を行い、イザナギ系統、イザナミ系統に大別した。昨年と異なった新しい酵母を用いて、千年一酒造株式会社との共同で清酒を醸造することができた。

#### 〈次年度への課題〉

- ・現状の取り組みを継続しながら、より広範囲の地域連携活動を行う。

### 国際化の推進

#### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・学部の国際交流イベントに積極的に参加した。

#### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・さなぶり祭において、高梁キャンパスの留学生が参画し、田植えを通して日本の文化の交流を行い。バーベキューを通じて、留学生との学生間交流を密にした。また、さなぶり際には高梁キャンパスの学生と留学生との交流を行なった。

#### 〈次年度への課題〉

- ・海外研究機関との共同研究を活用化し、研究科学生の海外への視野を広げることも考える必要がある。

# (通信制)連合国際協力研究科の自己点検・自己評価

研究科長

末吉 秀二

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

1. 広報活動
  - ・リスティング広告 (Google)
  - ・国際協力キャリアガイド
  - ・協力隊を育てる会ニュース
  - ・研究科ホームページの拡充 (過去の修士論文テーマを掲載)
2. 入学前Web相談およびオンラインによる入試の実施
3. 入学者増への施策 (ハイフレックス型授業) の検討

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

入学定員7名、入学者3名、入学定員充足率：43%

### 〈次年度への課題〉

- ・入学定員充足率100%を目指す。
- ・ハイフレックス型従業の導入
- ・今年度の広報活動およびWeb相談、オンライン入試を継続

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

- ・夏季および冬季スクーリングの実施
- ・共通選択科目のスリム化 (15科目を13科目に)
- ・オンライン (Teams) による懇切丁寧な教育・研究指導

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

概ね満足のいく結果であった。

### 〈次年度への課題〉

今年度の取り組みの継続

## 研究推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

修士論文の学術雑誌への投稿奨励

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

学術雑誌へ投稿できるレベルの論文はなく、今後の課題となった。

### 〈次年度への課題〉

今年度の取り組みの継続および修了生へのフォローアップ

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

南あわじ市津井地区での「地域調査法特論」（フィールドワーク）による地域との連携

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

受講者はいなかった

### 〈次年度への課題〉

今年度の取り組みの継続

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

タンザニア、キューバ（修了生）、中国、ケニア、ウズベキスタン（在校生）を調査対象とした研究の実施

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

概ね満足のいく結果であった。

### 〈次年度への課題〉

今年度の取り組みの継続

# 留学生別科の自己点検・自己評価

別科長

松原 孝

## 学生確保

### 〈今年度の取り組み状況〉

今年度の別科募集定員80名(春40名,秋40名)に対して春秋共に47名の応募があり、面接試験の結果春秋共に43名が合格となった。在留資格不認定、入学辞退の学生がいたため、春入学生39名、秋入学生40名が在籍し、令和6年度の定員充足率は99%(春入学生99%,秋入学生100%)となった。

別科在学時には、例年通り進路ガイダンスを行うなどして学部進学モチベーションを維持できるよう努めた。

昨年度の課題でもあった、大学進学目的を明確にするための別科入学前の現地セミナーをネパールで実施し、手応えを感じることができた。また既存の日本語学校以外にも協定を締結する準備を進めている。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

令和5年度秋入学生32名中、29名が吉備国際大学に進学(内編入1名)、内部進学率90%となった。また令和6年度春入学生39名中、吉備国際大学への進学者は29名(内編入2名)で、内部進学率は74%となり、前年度より秋季は約20%、春季は約10%増となった。71名中、3名が専門学校へ進学、1名が大学院の研究生、4名が特定技能または就職、4名が退学(除籍)・帰国、留年が1名であった。

別科入学時から大学で学ぶ価値や意義を多方面からアプローチし、また先輩などの影響もあり最終的には進学率を向上させることができた。

### 〈次年度への課題〉

吉備国際大学の留学生別科として大学への進学率100%を目指す。この数値を実現するために、前年度同様に各学部の先生方にもご協力をお願いし学部説明会を実施し、さらに学部生との交流の機会を増やすためにも先生方だけではなく学生部・留学生課との連携を強め、楽しく希望に満ちた学校創りを目指す。

また別科入学前の現地セミナー実施や現地の送り出し機関とのコミュニケーションも密にとり、大学の魅力を発信し学部進学が有望な学生の確保に努める。

## 教育の充実

### 〈今年度の取り組み状況〉

#### 【退学者対策】

前年度に引き続き、教員間で学生の出欠状況などを共有し、連絡なく欠席した学生には電話やメッセージまたは家庭訪問をし、常に繋がりを持ち、学生の変化に気がつくよう取り組んだ。また面談なども実施し、家庭や経済状況を把握し、学費未納対策として計画的に支払いをするよう指導。教員は学業のみではなく生活面でも、アルバイト情報を提供するなどしてサポートした。

#### 【資格・免許・検定等】

別科では入学時の日本語能力のレベルによってクラスを分け、JLPT受験を目標の一つに学習している。試験慣れするため、またモチベーションアップのためにも、JLPT模擬試験を定期的の実施。その他、授業内でも模擬試験や模擬問題をくり返しこなし、受験対策をした。

#### 【その他】

今年度は念願の専務理事講話を実施し、大学のことだけでなく、日本そして平和への関心を深めることができた。

日本語教育に関しては、社会状況の変化と共に変化しているが、国の政策にも対応していけるよう重要度が高い「日本語教育の参照枠」に関するセミナーへ参加するなど、情報収集を行った。

## 〈今年度の結果についての点検・評価〉

### 【退学者対策】

令和5年度秋入学生の退学除籍者は0名、令和6年度春入学生の退学除籍者は2名となった。秋入学生に関しては21%から0%とかなり減少、春入学生は5%となった。春秋共にクラスの仲が良く連帯感があった。また国籍やクラスを問わず学生同士コミュニケーションをよくとっており、先輩が後輩にアルバイトの紹介などもしていたので、別科生同士の間関係が良好であった。出席率も90%以上(100%も複数名)であることから、学校生活が充実しておりそれが結果的に退学者対策になった。

### 【資格・免許・検定等】

JLPTに関して、令和5年度秋入学生は合格率55% (N3:65%、N4:33%) 令和6年度春入学生は合格率19% (N3:23%、N4:18%) となった。春入学生は2度受験のチャンスがあるが、1度目は勉強期間が短いため合格率が低迷。秋入学生は入学時にN4相当の資格保有者が多かったため合格率に影響した。

### 【その他】

専務理事講話は普段の授業では触れることがない平和という大きなテーマに触れて考える貴重な体験となった。

## 〈次年度への課題〉

### 【退学者対策】

退学や除籍になる学生の兆候を早期につかむためにも、引き続き日常のコミュニケーションや定期的な面談を実施し、信頼関係を築くよう努める。また経済的な理由での除籍者を出さないためにも、別科入学時に学費を全額納入できる、もしくは経費支弁が確実な学生、またはアルバイトをするのに十分な日本語能力を有している学生を選抜できれば回避できると思われる。

### 【資格・免許・検定等】

年2回のJLPT受験(秋入学生は申し込み期日の関係で1回のみ)を必須とし、合格を目指す。長期休暇で日本語能力が落ちないように、学習を継続できる工夫をする。具体的には学内でも模擬試験を定期的に行い、年間を通して日本語力が低下しないように努めたい。成績を可視化するなどして、モチベーションが上がるよう対策を講じる。

### 【その他】

日本語教育機関認定法が施行され日本語教育に対して変革のときである今、別科の教職員全員が制度を理解し、体制を整えていく必要がある。一方で学生には別科に留学しているからこそ学べるという場を提供していきたい。

## 地域連携・地域貢献の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

大学がある高梁市の伝統文化を留学生が学び受け継いでくれればと、今年度も昨年度に引き続き高梁市の教育課と婦人会の方たちと連携し、大学で「備中松山踊り」の体験会を実施していただき参加した。希望者は本番にも参加し、そこでさらに地域の方との交流を深めることもできた。また地域連携の意味合いも兼ねて、岡山ゆかりの団体(アムダマインズ様)に外部講師を依頼し、その活動などを知る機会も設けた。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

日本文化に関心がある学生にとって松山踊りの体験会は好評で、特に浴衣を着て踊るという行為は、自国の民族ダンスとの共通点もあるからか、印象深かったようだ。地域の方とも文化を通してお互いに交流を深めることができた。アムダマインズ様の講義は国際貢献とSDGsについて考えるきっかけ作りが目的であったが、岡山ゆかりの団体ということで、親近感も沸き身近な存在に感じることができ、より関心が持てたようだ。

### 〈次年度への課題〉

次年度も年中行事として備中松山踊り体験会を実施したい。3度目となるが、学部生も交えて学生主体となり地域の方との交流ができるのが理想的である。別科生には体験を通して日本文化だけではなく、学部のある高梁にも関心を持ってもらい、進学後は地域や地域の方との関りを自ら持てる自主性を身に付けてもらいたい。また地域事業や産業を知るきっかけ作りのためにも、引き続き外部講師を招いての講義も実施したい。そのためにも地域の団体とのネットワーク構築も積極的に行う。

## 国際化の推進

### 〈今年度の取り組み状況〉

グローバルな人材育成のためには、異文化背景を持つ仲間と共存することで多様性を受け入れ、広い視野を持ったグローバルマインドを養う必要がある。そのためにも授業だけでなく他国の学生とコミュニケーションが図れるよう、全員参加のイベントを定期的実施した。また世界での活躍を目指す留学生が、大学進学後より具体的に将来を見据えて国際人として歩いていくためのきっかけ作りとして、特別講義(専務理事講話、外部講師授業)を実施し、普段の授業とは角度を変え学ぶ機会を設けた。

### 〈今年度の結果についての点検・評価〉

行事やイベントなどでは国境を越えて交流することができるので、異国の文化や習慣に触れるきっかけになる。相手の文化や習慣を理解することはグローバルマインドの基本であり、仲間との協同作業や対話を通して自国以外の国のことにも興味を持つことができたのではないかと思う。特別講義では国際協力は特別なものではなく、日常の中で「知ること」「理解すること」から始まるのだということを知ることができた。

### 〈次年度への課題〉

近年、様々な目的を持った外国の方が増加しているが、国際的に活躍したいという夢のために日本を選んで留学している別科生に、日頃から留学とは何か？その先の目標は何か？ということ意識してもらうことは、彼らが将来を考える上でも重要だと思われる。日本語を学ぶだけでなく、大学進学後に何を学びたいかを意識することは、なかなか普段の生活ではできないことであろうから、そのような機会を与えるべく次年度も特別講義などを実施し、国際協力の場を提供していきたい。



## 令和6年度 自己点検・自己評価委員会総会 外部評価

※各内容について5段階評価（5点：非常に良い 4点：良い 3点：普通 2点：やや劣る 1点：劣る）

1. 令和6年度 吉備国際大学の自己点検・自己評価	評点平均	コメント
(1) 建学の理念・教育目標の具現化について	4.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全職員が共有し、具現化する方針はよい。どう具現化されたのか、さらに可視化されるとよい。</li> <li>・建学の理念を基にしたブランドビジョンが共有され、実践されていると思います。</li> <li>・教職員に対しては、ブランドビジョンや2つの教育の特色は根付いていると感じる。</li> </ul> <p>学外に対して、より分かりやすい形でブランド化を進めていただき、学生確保につながることを期待したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生につけさせたい3つの力と貴学の特色をうまく調和させている。</li> <li>・学外、学生、教職員に周知されている。</li> </ul>
(2) 学生確保について	3.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブランディング実行委員会への学生の参加はよい。新しいアイデアと参画意識の向上が期待でき</li> <li>・高校性へのガイダンス等募集活動の拡大は評価できると思います。高校生があまり知らない資格・学</li> <li>・昨年度より増加はしたが、入学定員を充足している学科は1学科1専攻のみであり、引き続き大変</li> <li>・厳しい状況である。この少子化を生き抜く力を発揮していただきたい。</li> <li>・学生の確保に向けた方向性が確立しており、成果を上げている。</li> <li>・学生確保に努めている。</li> </ul>
(3) 教育の充実（教育改善・向上）について	4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学修成果の可視化は大切だと考える。学修ポートフォリオ・ルーブリック評価を有効に活用し、</li> <li>・キャリア形成に繋げてほしい。</li> <li>・資格取得や退学者対策など、丁寧な学生指導が成果として出ていると思います。</li> <li>・教育課程の改善と学習支援の強化が国家試験の結果に表れている。</li> <li>・国家試験の合格率の向上、退学・除籍率の減少等成果を上げている。</li> <li>・退学等の人数が減少している。</li> </ul>
(4) 教育の充実（学生支援の充実）について	4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ユニバーサルパスポートのプロファイル機能には期待できる。情報共有を効率化し支援に役立てたい。</li> <li>・学生と理事長・学長が意見交換できることは良いことと思います。今後、更に学生と地域との交流</li> <li>・や、学生同士のキャンパス間の交流を増やして、様々な経験をしてほしいと思います。</li> <li>・学生支援も充実しており、キャンパス間の交流も行われ、これからが楽しみである。</li> <li>・きめ細やかな対応が素晴らしい。</li> <li>・今後も学生支援の充実を。</li> </ul>
(5) 教育の充実（キャリア支援の強化）について	4.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・低学年からのキャリア教育が充実している。出口指導と繋げていきたい。</li> <li>・キャリア教育やキャリア支援の充実が就職率の向上に結びついていると思います。</li> <li>・1年次からのキャリア教育の成果が就職率にうかがえる。今後もきめ細やかなサポートに期待したい。</li> <li>・具体的な支援を積み重ねている。</li> <li>・忠実な支援がなされている。</li> </ul>
(6) 教育の充実（図書館の活用）について	3.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ラーニング commons の充実には期待できる。デジタルとアナログを融合した学びの場を構築したい。</li> <li>・引き続き利用しやすい図書館に向けて、少しずつ改善していってもらえればと思います。</li> <li>・図書の実践やイベントについては評価できるが、図書の貸出数や図書館の利用人数が不明なため、</li> <li>・今後は示していただきたい。</li> <li>・地道な活動を継続している。</li> <li>・新本などの充実を努めて下さい。</li> </ul>
(7) 教育の充実（学修環境の整備）について	4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新学生会館には、地域との連携の場、学びの場としての機能も期待したい。</li> <li>・学生が集い情報交換しやすい環境づくりを進めていると思います。</li> <li>・施設、設備の整備は計画通りと認められる。改修した学生会館の活発的な利用に期待したい。</li> <li>・計画的、継続的に行われている。</li> <li>・学生会館などのオープン。環境整備をすすめて下さい。</li> </ul>
(8) 研究推進について	3.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会実装の推進は大学にとって重要と考える。大学・学部単位での産学官連携研究は進めていきたい。</li> <li>・科学研究費や学術論文、講演、口頭発表など研究活動の活性化が必要と自己評価しており、</li> <li>・今後の充実が望まれます。</li> <li>・科学研究費の採択、研究倫理・コンプライアンス違反もなく、研究の推進については評価できる。</li> <li>・科学研究費補助金の新規採択率の向上がみられた。</li> <li>・研究費補助金の件数を増やすように努めて下さい。</li> </ul>
(9) 大学運営（持続可能性の追求）について	3.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SDGs を指向した活動は大切なので進めていきたい。</li> <li>・SDGs 達成を目指した活動の推進においては、自己評価でできなかったことが多数あり、</li> <li>・実施に向けて改善が望まれます。</li> <li>・SDGs 推進活動は学生・教職員全体に根付くことが望ましいので今後に期待したい。</li> <li>・SDGs への紐付けに期待したい。</li> <li>・持続可能性の追求ができています。</li> </ul>
(10) 大学運営（職能開発の強化）について	3.8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全学で組織的に研修を行うことができています。</li> <li>・全学だけでなく、学科別でも実施し、組織的に研修を実施して教職員の資質向上が図られている</li> <li>・と思います。</li> <li>・教職員の資質向上と能力開発なお一層取り組みを期待する。</li> <li>・研修会の成果が出るよう期待したい。</li> <li>・教職員の資質・能力の向上に努めて下さい。</li> </ul>

評点平均 コメント

(11) 大学運営（人権・安全への配慮の充実） について	3.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な学生への対応が安定的にできている。</li> <li>・通報やハラスメントの問題がなかったようなので、今後も法令遵守や差別のない環境づくりを進めてください。</li> <li>・人権関連は、その時代に即した対応が望まれる。</li> <li>・多様な学生へのきめ細やかな配慮が充実している。</li> <li>・パワハラ等への配慮に努めて下さい。</li> </ul>
(12) 大学運営（法人部門との連携の円滑化） について	3.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新体制のもとでもガバナンス強化に努めてほしい。</li> <li>・法人と大学と相互チェックが働いています。</li> <li>・法人部門との連携については、適切に運営されている。</li> <li>・安定している。</li> <li>・円滑に連携がとられている。</li> </ul>
(13) 大学運営（財政基盤の確立）について	3.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・更なる入学定員の増加を目指してほしい。</li> <li>・今後も学納金収入の増加等により、収支バランスの改善を図っていただければと思います。</li> <li>・外部資金獲得、そして何よりも学生の定員確保が必要である。</li> <li>・法改正による新体制への移行をチャンスと捉え改革へつなげてほしい。</li> <li>・適切に財政基盤が出来ている。</li> </ul>
(14) 大学運営（適正な会計処理の実施）について	3.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適正な会計処理ができている、継続してほしい。</li> <li>・適正に行われていると思います。</li> <li>・適正に会計処理が行われている。</li> <li>・適切に会計処理できるようにシステムを構築している。</li> <li>・適切な会計処理がなされている。</li> </ul>
(15) 内部質保証について	3.8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PDCAサイクルを回し、改善を重ねてこそ、質の向上につながる。</li> <li>・客観的に適正に点検・評価ができていると思います。これを元に改善を積み重ねていただければと思います。</li> <li>・アセスメントプラン実施計画どおりの実行は評価でき、PDCAサイクルが実現できている。</li> <li>・点検と検証が計画どおり行われ、体制が確立されつつある。</li> <li>・内部質保証の改善に努めて下さい。</li> </ul>
(16) 地域連携・地域貢献の推進について	4.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域貢献人材育成プログラムには高校生も参加させたい。開設を期待している。</li> <li>・知の地域への還元、地域連携・地域貢献活動とも多々実施されており、評価できます。</li> <li>・地域への貢献・還元は、今後も充実することを望む。</li> <li>・意図的・計画的に取り組みが進んでいる。さらなる充実を期待する。</li> <li>・今後も推進してください。</li> </ul>
(17) 国際化の推進について	3.8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターナショナルフェスタには高校生も参加させたい。</li> <li>・大学としての国際化、特に海外との交流、留学生の支援は充実していると思います。</li> <li>・異文化に接する機会の交流活動を今後も望む。</li> <li>・着実に進んでいる。</li> <li>・小・中・高との連携も行ってみては。</li> </ul>

2. 令和5年度 学部・学科・研究科の自己点検・自己評価

コメント

社会科学部	3.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校のPBL活動への講師派遣、支援などを行ってほしい。</li> <li>・定員充足と研究推進には改善が必要と思われます。</li> <li>・新カリキュラム導入で今後の教育の充実に期待したい。</li> <li>・広報活動と実績の両面から入学者数の確保に努めている。</li> <li>・入学定員の確保に努めて下さい。</li> </ul>
経営社会学科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デジタル人材育成と総探の内容の充実に向けた教職員対象研修会ではお世話になった。</li> <li>・今後も連携を続けてほしい。</li> <li>・教育の充実と地域貢献、地域連携、国際化の推進はよくできています。定員充足と研究推進には課題があり改善が望まれます。</li> <li>・文部科学省の留学生就職促進プログラムが今年度よりスタートしたとのことで、留学生を含めた今後の教育の充実に期待したい。</li> <li>・国際交流活動の充実を努めている。</li> <li>・各賞の受賞は、学生の励みになり、今後も受賞出来る様に励んでください。</li> </ul>
スポーツ社会学科	3.8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校への講師派遣、部活動支援などを行ってほしい。</li> <li>・研究推進や地域連携・地域貢献は特によくできていると思います。定員充足や資格合格率の向上に各種資格試験等の学生への個別指導に工夫を評価する。</li> <li>・スポーツ通じた地域連携・地域貢献が進んでいる。</li> <li>・女子野球部の創部等があり、今後の部・環境整備の充実を努めて下さい。</li> </ul>
看護学部看護学科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護師希望は少なからず存在している。他校との差別化、魅力発信が大切。</li> <li>・資格取得と就職率が良いだけに、定員充足率の向上が望まれます。</li> <li>・教育指導により、看護師国家試験100%合格を達成したことは評価する。</li> <li>・国家試験率が向上しており、これを入学者増に結び付けたい。</li> <li>・定員の確保に努めて下さい。</li> </ul>
理学療法学科	4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国家試験合格率100%はすばらしい。継続を目指してほしい。</li> <li>・国家試験合格率100%を達成しているほか、丁寧に学生指導ができていると思います。</li> <li>・国家試験対策を1年次より実施、外部資金の確保、地域貢献の推進等評価できる。</li> <li>・きめ細やかな対応をしている。</li> <li>・国家試験合格率100%の継続に努めて下さい。</li> </ul>

評点平均 コメント

作業療法学科	3.8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国家試験合格率が成果として分かりやすい。100%を目指してほしい。</li> <li>・国家試験合格率100%を達成しているほか、丁寧に学生指導ができていると思います。</li> <li>・国家試験対策、外部資金の確保、学生間の縦の繋がりが強化、地域貢献等評価できる。</li> <li>・園芸療法にも着手し、新卒100%の国家試験合格も素晴らしい。</li> <li>・学生への支援が充実している。</li> </ul>
心理学部心理学科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資格取得を目指した取組はよい。</li> <li>・学生から、地域や留学生に対して自主的な働きかけや取り組みが課題と思われる。</li> <li>・就職率100%は評価できる。</li> <li>・学生への対応が丁寧である。</li> <li>・科研費等の積極的な獲得に努めて下さい。</li> </ul>
農学部	3.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新学科については、既存概念にとらわれない内容を期待している。</li> <li>・研究や地域連携・地域貢献など、どの学科も活発に行われていると思います。</li> <li>・地域連携、地域貢献は評価できる。新学科開設により、学部全体での定員充足に期待したい。</li> <li>・地域と連携したプロジェクトが進んでいる。</li> <li>・地域連携活動、研究費の獲得に努めて下さい。</li> </ul>
地域創成農学科	3.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校のPBL活動への講師派遣、支援などを行ってほしい。</li> <li>・定員充足率以外は、とても充実した活動内容だと思います。</li> <li>・高大連携事業、地域連携事業は評価できる。</li> <li>・入学者数が伸びている。</li> <li>・定員の確保に努めて下さい。</li> </ul>
醸造学科	3.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特になし</li> <li>・共同研究の推進や、地元企業との連携による新商品開発が高く評価できます。</li> <li>・地域連携事業は評価できる。</li> <li>・地道な活動をしている。</li> <li>・研究成果などの情報発信で積極的にやって下さい。</li> </ul>
海洋水産生物学科	4.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・淡路ならではの特色を持った取組を広報したい。</li> <li>・学生も多く、活動内容も全般的に充実しているように思います。</li> <li>・地元自治体や漁業者、民間団体との交流は今後の農学部の発展に期待できる。</li> <li>・定員充足率が素晴らしい。</li> <li>・今後も地域連携・各研究などの充実を努めて下さい。</li> </ul>
外国語学部外国学科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンライン留学というものがわからないが、2年次に全員留学は特長としてよい。</li> <li>・金銭的な補助があればよい。</li> <li>・地域連携・地域貢献に積極的に取り組んでいることは評価できます。留学生の派遣・受入も実施していますが、課題もあるようなので改善されるとよいと思います。</li> <li>・特徴ある指導法、地域貢献等は評価できる。</li> <li>・更なるアクティブラーニングの充実で、人気の学科になってほしい。</li> <li>・今以上の高校への説明会を積極的に行ってみては？</li> </ul>
アニメーション文化学部アニメーション文化学科	3.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・就職率と内容が大切かと思う。</li> <li>・就職率の向上や大手アニメスタジオへの就職実績をつくってほしい学科になるのではと期待しています。</li> <li>・カリキュラムも就職活動に役立つ作画力が身につけられる内容となりこれから期待できる。</li> <li>・充足率の変動が激しい学科であると思う。試行錯誤を期待している。</li> <li>・定員の確保に努めて下さい。柔軟な就職先の確保が必要では？</li> </ul>
人間科学部人間科学科	3.8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「分野を超えて学ぶ」というコンセプトをアピールしたことはよい。</li> <li>・全般的によく取り組んでいると思います。作業療法士については、高校生に向けてわかりやすいPRが必要だと思います。</li> <li>・学科の学習指導を引き継ぎ、これからの専攻の未来を期待する。</li> <li>・地域連携・地域貢献の活動が、学生の育成に結びついている。</li> <li>・学生へのサポートがしっかりとされている。</li> </ul>
通信教育部	3.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ニーズはないのか？高校では通信制がブームである。</li> <li>・丁寧な指導により、学生の希望に沿った資格や免許の取得、退学者等の減少につながっている。</li> <li>・学生募集停止から6年目ということで、全員が卒業できるよう導いていただきたい。</li> <li>・丁寧な研究・指導を継続している。</li> <li>・通信での資格・免許の取得状況はとてもいいのでは。</li> </ul>
社会学研究科	3.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究レベルアップのために、何をすべきなのか。</li> <li>・日本一面倒見の良い社会学研究科を目指しているとのことで、引き続き丁寧な指導を行っていただき、定員充足に期待する。</li> <li>・丁寧な研究・指導を継続している。</li> <li>・留学生への日本語養育の充実して。</li> </ul>
保健科学研究科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究レベルアップのために、何をすべきなのか。</li> <li>・研究活動については、科研費採択数や論文数も評価できる。後期課程は定員を満たしているとのことで、来年度は前期課程の充足を期待したい。</li> <li>・丁寧な研究・指導を継続している。</li> <li>・定員確保に努めて下さい。</li> </ul>

評点平均 コメント

(通信制) 保健科学研究科	3.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・通学生と同様に来年度は定員充足に期待したい。</li> <li>・実践的な研究・指導をしている。</li> <li>・退学者ゼロは評価できる。今後もゼロを目標として下さい。</li> </ul>
心理学研究科	3.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公認心理師合格率100%は評価できる。今後の修了生の活躍に期待したい。</li> <li>・有能な人材を輩出するための努力をしている。</li> <li>・県警察本部への就職は、今後の定員確保にいいのでは。</li> </ul>
(通信制) 心理学研究科	3.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導の充実が努めていただき、学生確保を望む。</li> <li>・スクーリングの機会をうまく利用している。</li> <li>・定員獲得に努めて下さい。</li> </ul>
地域創成農学研究科	3.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究活動実績は評価できる。学部大学院一貫教育のPRも含め学生確保に期待したい。</li> <li>・丁寧な研究・指導を継続している。</li> <li>・定員確保に努めて下さい。</li> </ul>
(通信制) 連合国際協力研究科	3.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度は学術雑誌への論文投稿ができるよう指導の強化に期待したい。</li> <li>・丁寧な研究・指導を継続している。</li> <li>・定員確保に努めて下さい。</li> </ul>
留学生別科	3.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・退学者が減り、進学率が上がっており、良い成果が出ていると思います。</li> <li>・きめ細やかな対応をしている。</li> <li>・日本語教育の充実を行って下さい。</li> <li>・定員を充足し、内部進学率が増え、退学除籍者が減ったことは大変評価できる。日本語教育に関しては、学生が学部進学後に苦労しない為にも、N3の合格率にこだわっていただきたい。</li> </ul>

総評およびご意見・お気づきの点

<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生への丁寧な指導に努めていると感じられ、退学者数の減少や資格取得につながっていると思います。地域連携・地域貢献についても多くのことに取り組んでおり、評価できると思います。全体的に教育目標の具現化に向けて、全学で取り組んでいると感じられます。</li> <li>・一部の学科で入学定員充足率が低いところがあります。資格取得に実績があり、先生方の指導により、将来なりたい自分になれる大学だと思いますので、高校生に向けて、大学卒業後の自分の姿を思い描かせることが必要かと思えます。例えば、作業療法士になるとこんな仕事ができる社会貢献できるとか、6次化とは生産から製造・販売まで実現するなど、わかりやすく表現し、また活躍しているOBを見てもらうなどして、高校生に夢を描いて入学してもらえるようになれば、大学の強みが更に生きてくるのではないかと思います。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・中期目標・中期計画を元に、1年を通してPDCAサイクルを実現し、内部質保証体制の確立を図っていることは大変評価できる。</li> <li>・国家試験の合格率は向上し、退学率も減少していることから、教育の充実も着実に進んでいる。引き続き、学習成果の可視化や学習支援の強化を行っていただき、ブランドビジョンを達成していただきたい。また、教職員一丸となって募集活動を強化していただき、定員の充足に期待したい。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・18歳人口の急減の影響は極めて大きく、日本中の大学はもとより、あらゆる組織がその対応に追われています。そうした中においても、大学の建学の精神や吉備国際大学ブランドビジョン等を共有され、ぶれることなく大学運営をなされていることに敬意を表します。</li> <li>・市・市教育委員会とも、同様の課題を抱え、苦慮しておりますが、今後、益々大学との連携を強め、時代に即した施策を実現し、この難局を乗り切っていきたいと思えます。今後とも、よろしく願います。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生人口の減少と学生の確保が難しい時ではありますが、産官学の連携を今以上に密にして、発展が出来ればと思います。</li> </ul>





輝け、自分。羽ばたけ、未来へ。

**吉備国際大学**

Kibi International University